北より南へ

—北韓脱出「平新艇」副機関長手記—

内外問題研究所

北より南へ

—北韓脫出「平新艇」副機關長 手記—

內外問題研究所

私たちを迎える「ソウル市民歓迎大会」(市民会館)

北韓の社会では人間が人間でなく動物であり，また機械であることをわが身の体験に照して深くさとっている．……著者

祖国の第一歩を踏みだす私たち(金浦空港)

日本到着直後の私たち(下関海上保安庁)

私たちに提供された住家(アパートの一部)

うなる密航の4人　平新艇の反乱

船上で反乱、亡命　北朝鮮の四人

産經新聞

THE MAINICHI DAILY NEWS, MONDAY, SEPTEMBER 19, 1966

N. Koreans' Asylum:

Mutiny Becoming Int'l Issue Involving 3 Governments

讀賣新聞　9月19日 月曜日

朝日

漁船員亡命事件

Korean Fi

g Asylum Her

政府

新聞のトップを飾る「平新艇」事件

私たちと運命を共にせんとした「平新艇」(下関港)

私の盛大な結婚式

新妻と私

序文

自由の凱歌を歌いつつ

太陽は、燦然と輝いている。私は、北韓カイライ集団治下の暗黒を脱出し、自由と平和を勝ち取った。そればかりではない。自分の人生をとり戻すと同時に、生きがいと、その歓びを知った。甚だしい心の渇きもいやされた。

永遠の祖国、大韓民国のふところに抱かれた瞬間の感激は、死ぬ時まで忘れないだろう。どのようにすれば、その全てをここで云いつくすことができるだろうか？ 北韓カイライ集団の鉄のカーテンを堪え忍ばねばならなかった苦しい首枷は、余りにも絶望的であったがゆえに、とうてい言葉では言い現わす術がない、自由への帰港は、死を賭しての生への帰還であったがゆえに、表現の言葉になやむ次第である。今、私の暮している自由世界は、まるで夢のようである。

この歓びをどのようにして現わしたらよいのだろうか。

しかし、私は話を進めている。狂わんばかりに声をはりあげて話をしている。こうすることで、青春の意志をもって手に入れた心のふるさとを謳いあげ、分断された祖国の痛みを、自由への勇気と信念をもって洗い流そうとしているのだ。今こそ、はっきりと言い切ることができる。この輝きにみちあふれた世界で、本当に尊いものが何であろうか、人間の総体的な生涯において、真実だいじと言うものが何であるかを、私は思いを馳せる。彼らの北方の空の下で、人間としての権利と希望を奪ばわれ、いばらの生存を強いられている同胞の上に、父と母、そして愛する妹の上に。そして、私は信じて疑わない。たとえ、現在は話をかわすことができなくとも、希望にみちた再会の日が必ず訪れることを。

この手記を書きながら、私は何回となく、熱くなる目頭をおさえた。つたないこの手記を、太陽の光から疎外され、暗闇の人生を歩まされている同胞の運命を念頭において書き続けた。

北韓カイライ集団治下の同胞と、自由のもとで暮らしている皆さんに、心からの感謝をこめてこの本を捧げたい。

韓国・ソウル・鍾路で。

一九六七年　五月

目次

1、自由人のふるさと……一五
2、大海の真中で……二七
3、脱出計画……五〇
4、悲しみの大地……七〇
5、「成分調査・成分除隊」……八二
6、海州綜合機械工場……一〇二
7、「赤い都市」……一一七
8、「北極星協同農場」……一四七
9、第一次脱出……一七一

10、私の「大学推薦事業」……一九一
11、鴨緑江は濁っいる……二一三
12、くらげ加工事業……二三三
13、「女性号」の副船長……二五一
14、北送在日同胞の娘……二七九
15、脱出……三〇三
16、自由への凱旋……三一三
17、幸せな凡人……三四四

1、自由人のふるさと

私たちは、日本の福岡で大韓航空のDC四号機に乗り、祖国大韓民国に向かって飛び立った。玄海灘を飛び越えた飛行機は、やがて釜山の水営空港に舞い降り、約一時間ばかりとまった。空港では、各界の著名な代表たちが待っていた。通信社と新聞社の記者やカメラマンが、飛行機にどやどやと乗りこんだ。フラッシュがきらめいた。

『すばらしいことでした。』

『心からの歓迎を』

『祖国をとり戻した感激をひとごと言って下さい。』

さまざまなげきれいの言葉と、質問を浴びせられた。私たちはただ感謝した。胸は感激でいっぱいになり、わき起こる喜びと感動を、どのように表現したらよいかに迷った。ただ私たちは

『嬉しいかぎりです。』

『どうも有難う。どうも有難う』
何十回も、これだけ言うのが精一杯であった。
飛行機は、再び飛び上がり、ソウルに向かった。
物言わぬ山河、美しく横たわる祖国の大地。
窓から目を放すことができなかった。祖国の大地が、歓迎の査閲式を行なっているかのようであった。
涯しなく広がっている平原、連綿とつらなる山脈。その瞬間私は、母なる祖国のふところに、ながい旅路のすえ、もう一度抱かれようとする大きくなった赤ちゃんに似ていた。
どんなにかはげしく、自由へのあこがれを抱き続けてきたことか。どんなにか強く温かい愛情を求めてきたことか。私たちは、遂に心のふるさとに帰って来たのである。
その日は、お天気もよかった。
飛行機は、いささかの動揺もなく、まるで真綿の坐ぶとんにふんわりと坐っているかのような心地がした。
美人のスチュワデス嬢が、お茶をもてなしてくれた。はじめて味わう「パゴタ」(韓国の煙草)の紫の煙に包まれて、この身に温かく注ぐ皆さんの情愛をひしひしと感じた。同乗のお客さんた

ちは、心から私たちの心境を理解してくれた。そして、私たちのふくれあがった感激を自分のものとして受け入れてくれた。まずい表現、場違いな嘆声が飛び出ても、それをわらわなかった。そのような態度や表現がかえって大きな感激と喜びを現わしていることを知っていた。

私たちは、ポツリポツリと北韓カイライ集団治下でなめたひどい苦しみと惨めさを物語った。死をとしてでも、脱出を決行したぎりぎりの心境を伝えた。

私たちは、どんな些細なことでも罪を犯したために、その刑罰を恐れて、逃げて来たのではない。もしも、動機がそれであったならば、喜びはあっても誇りは無かっただろう。それは、誇りというよりもむしろ自負心であり、胸全体を引き緊め、満ち溢れる再生の感情なのであった。私たちは、この再生の感情、あるいは祖国に帰って来た心境を説明するのに一生懸命になっていた。

私たちは、そこらへんの、どこにでも住んでいる、平凡な人間に過ぎない。その私たちが、死にものぐるいになって鉄のカーテンを突き破ろうと決心した。まさにその点に、北韓のむごい現実が横たわっているのだ。平凡な私たちに、人並みはずれた勇気と決断力があったのではなく、北韓のひどい現実が、勇気と決断力を与えてくれたのである。

このほかにもう一つ、不動の信念があった。自由への信念、これがなかったならば、流血沙汰

をくぐり抜けてでも敢えて脱出しようという気にはなれなかっただろう。また脱出そのものも成功しなかったはずである。

自由、自由への意志が導いてくれたと考えたい。その自由が、たとえとるに足らないものであっても、そんなことはどうでもよい。いわば素朴な自由であってよい。それで満足だ。しかし、これが人間の本能であることは、誰も否定できない。たったの一時間でも、それなくしては生きることのできないものとしての自由。このような自由への信念が、脱出を成功に導いてくれたのである。

私たちは、このような二面を説明した。

一つは、北韓の惨状。非人間的な状況と、想像に絶する苦しみを味わっている同胞たちのこと。もう一つは、人間の生命に尊厳性を与えてくれる自由、自由への信念、それである。

脱出を成功に導いたこの二つの要素は、顔の両面に似ている。そのいずれがもってだいじであるかは判別できない深いつながりを持っている。その一つが、脱出の花であったとすれば、もう一つは、脱出の根であった。

私たちは、生命を担保に入れて、脱出を計画したが、脱出に成功して祖国に帰ったことにより希望に溢れる新しい生命を授けられた。

まわりのお客さんたちは、あなたがたのどこに、そのような勇気と信念がひそんでいたのかと頭を振りながら笑った。ある人々は、本当にあなたがたが例の平新艇の主人公たちですかと、いかにも疑わしげに訊ねたほどである。

私も、笑顔で答えた。「平新艇」と紹介されたのは間違いで、「平新底」が本名であると。「平新」底引網船の略語だと船の名前の由来を説明し、これくらい知っているのだから、ほんものであることがおわかりになられたでしょうと言った。

お客さんたちも、私たちも心の底から笑うことが出来た。（註＝この本では、読者の便宜のために、平新底を平新艇に統一表記す）

頬骨が幾らか飛び出た大男、太い眉毛の李燦虎。

李燦虎は、党員である。彼は、新義州軽工業大学の学生であったが、脱出のために学校をやめ、水産事業所に就職、船乗りになった。「成分」（家族的環境や思想の傾向）が立派で、大学さえ卒業すれば、将来のこともある程度保証されている結構な身分であったが、北韓カイライ集団の共産主義思想に少しづつ疑いを持ち始め、最後には遂に、深い幻滅を味わった。彼は、いちじは何もかも諦めていた。理論と実際がかけ離れ、憎しみと虚脱感のみが支配する北韓カイライ集団の治下で、未来を失ない、現実に絶望していた。その彼が、今はどうだろう。笑っている。心

の武装をすっかりとき、安心して笑っていられるのである。「平新艇四一〇三四号」の甲板副船長であった張大衡、彼ものんびりと笑っていた。美男子の彼は、性格も明るく、また太っ腹の男である。彼は、北韓社会のあらゆるところを、辛酸をなめながらさまよった。行くさきざきで、どこでも人間としては堪えられない苦労を重ね、心に痛手を負った。面と向かっては、つとめて朗らかな表情をつくろうが、いつも深い絶望の影を引いていた。彼は、北韓の社会では人間が人間ではなく動物であり、また機械であることを、わが身の体験に照らして深くさとっていた。さかんに、未来への夢にふくれあがり、希望にあふれていなければならない若さを持ちながら、彼もまたすでに青年の誇りであるすべてを失ない、ただ共産主義が与える虚無感に、深い痛手を負っていたのである。この張大衡が、今はどうだろう。本物の自由のふところの中で、安らげに笑っている。

安炳録、彼も笑っていた。四人の中では、いちばん年下の安君。不幸な人生を早くから歩んでいた。六・二五動乱で両親を失ない、幼ない時から孤児として虐たげられた生活を送る。孤児の悲しみ—これだけでも幼い少年の肩には重過ぎているのにあまつさえ、すでに故人となった両親が反共主義者であったという連中からの言いがかりによって、二重三重のカセを背負いこみ、虐待されねばならなかった。そんな環境のなかで、彼は成長した。面倒をみてくれる人が一人でもい

るのはおろか、かえってこずき回し、つらくあたるのがせいいっぱいの待遇だったのである。

北韓カイライ集団は、共産主義の理論とは裏腹に、祖先や生まれを重視し、成分をほじくるが、なかんずく親戚関係にはやかましい社会なのである。当然のことであるが、孤児の人生はイバラの道である。それに、組織と党性が支配する北韓カイライ集団の閉ざされた重苦しい空の下で、自分の心と身を寄せてもよい寸土を発見することさえも出来なかった。この安丙録が、今は祖国の上空を飛びながら、盛んに笑っている。

永遠に、私たちの脳裏から去らない一九六六年九月二八日。偶然の一致なのかも知らないが、六・二五動乱の時、韓国軍がソウルを奪回した「九・二八首都奪回の日」と重なる。

新聞記者の一人が、これと結びつけて、面白い比喩を口にした。

『あなたがたは飛行機に乗ってソウルを取り戻しに行く人たちではないか』

皆がいっせいに笑った。私たちも笑った。しかし、私たちの笑いには余りにも多くの意味が含まれていた。

遂に、飛行機はソウル上空にさしかかった。水原を過ぎると工場の密集地帯が眼下にひろがった。

私たちは、全部が立ちあがり、われ知らず口走っていた。

『あゝ、ソウルだ、あれがソウルだ』

自由人のソウル、私たちの目的地としてのソウル、カイライ集団のくびきから北韓の同胞を救い出すべき任務を持つソウル、ひそかに聞いたラジオ放送をたよりに、あれほどまでにも慕ってやまなかったソウル、そのソウルが、肉眼に飛びこみ始めたのである。

奇蹟にもいとしいチャンスに恵まれ、大韓民国の北韓向け放送を、ひそかに聴取した時のことである。

『こちらは、ソウルです。こちらは、ソウルです。北韓の同胞におくる放送を始めます』

というアナウンスメントが流れると、見たこともないソウルの幻に、胸はどんなにかはげしくしめつけられたことか。放送では耳にすることができたが、行くに行けない幻の理想郷、それがソウルではなかったのか。

私たちは、肉眼に映るソウルの町の姿をあっけに取られたまま見下ろしていた。とうていわが目を信ずることができなかった。

これがあのソウルなのだと考えてしまうことができないほど、現実のソウルの姿はショックであった。私たちは、最初はわが目を疑い、次にはソウルを疑った。

北韓カイライ集団が念仏のお題目のように唱えたこと、ソウルは避難民の堀立小屋だらけであ

るという宣伝にだまされるほどおろかな私たちではなかったが、それにしてもこの目で見るソウルの姿は、想像を絶して、とてつもなく大きくて美しかった。ちょうど日暮れ時で、ソウルの町は素晴らしい夕焼に包まれていた。飛行機は、スピードを落し、ソウルの上空を旋回していた。

夢の中でも忘れなかった終着驛、永遠の安着地であるソウルに到着したと考えると、あらゆる感慨が嵐のようにまき起こった。遂に来るべき所に来た。

自分の座標をようやく見つけ出したのである。ただこの瞬間のためにあったたいくたの危険と苦難に満ちた決行が、さまざまな念願が、今こそ現実のものとなったのである。

気も張り裂ける思いであった。到底耐えることのできない、そして喜びなのか痛みなのかもさだかでない、はげしい戦慄の瞬間であった。

目頭がじんと熱くなった。心の噴火口を押さえつけようとしたが、湧き出る涙はどうすることもできなかった。誰かが私の肩をポンとたたいた。振りかえると、そこには「私たち」が居た。皆が目に浮かべ、喉をつまらせているではないか。私たちは何も言わなかった。ただ強く手をにぎった。これだけで充分。それは百の言葉よりも、もっとはっきりと気持を相手に伝えてくれた。

機首が下を向き、私たちは座席に戻った。漢江が見える。沈み行く太陽の光を反射して、黄金色に輝く、民族の念願を秘めた漢江、そして屏風をめぐらしたように、ソウルをかこんだ山脈、ひろびろとした金浦平野。

やがて、飛行機は着陸した。

午後六時十分ちょっと過ぎであった。私たちは座席から身を起こした。窓に駆けよって外を眺めた。

タラップが、飛行機の方に近づいて来た。人々が飛行機の前にむらがっていた。私たちを歓迎するために来た人々である。それぞれに大きな花束を持っていた。そして盛んに手を振る。その手には、太極旗(韓国の国旗)がしっかりと握られていた。秋風に吹かれて、旗はまるで生き物のように、ひるがえっていた。人々は、何かを盛んに叫んでいた。何と言っているのだろうか。彼らの興奮した表情、感激にふるえる顔が、私たちの視線をとらえ、まぶた全体にひろがった。

送迎台が見える。そこにもまた、人がぎっしりと立ち並んでいた。声は聞こえないけれども喊声をあげながら太極旗を熱心に振っていた。

送迎台の上のポスターが私たちをびっくりさせた。

「歓迎、平新艇脱出帰順漁夫」、全てが、私たちを迎えているではないか。

私たちは、感激の嵐に見舞われた。かくも熱烈な歓迎を受けようとは想像だにしたことさえもなかったので、かえって恐縮して身のちぢむ思いさえした。

ドアがひらかれ飛行機の中に祖国の空気が流れ込んだ。甘い、ほのかに温かい、そして新鮮な空気。

カメラマンが飛び降りたあと、今度は私たちが仕度を始めた。

その時、人々が飛行機の中に入って来た。力いっぱい、私たちの手を握った。

『よく来てくれました。よく来てくれました』

『皆さんを心から歓迎いたします』

それは、しびれるほどの強い握手であった。祖国の握手であった。

私たちは、花束を抱いて、外に出た。タラップを降りながら、われ知らず、声にならない喊声をあげた。カメラマンが盛んに写真をとっていることも知らなかった。手を握って私たちを歓迎する人々の姿も目に入らなかった。私たちは、ただ叫び声をあげていた。

遂に祖国の大地をふんだ。私たちは力をこめて、それをふんだ。それは死んでも離れることのない祖国の大地。心のふるさとであった。

それは、自由人のふるさとでもあった。少しのちぐはぐささえも感じさせない、生まれ落ちた時から住みついていたとしか思われないふるさとであった。希望と、青春をたくし、力いっぱい働くことのできる場所、そのような祖国であった。

そして、まさにその次元において、その瞬間において、私は失ったもの全てを取り戻し、そのようにして自分の人生を新しく始めようとしていた。

ソウルは、私の生まれ故郷ではないが、自由のために生命をかけ、ソウルに向かって脱出の航海を行なった私にとっては、この世にただ一つしかないふるさととなったのである。私は人の波にもみくちゃにされながら、帰郷の喜びの涙を流していた。私は、栄光の瞬間に到達するまでの苦しかった過去をふりかえっていた。

2、大海の真中で

一九六六年七月十一日、「平新艇〇三四号」があわただしい出航準備を進めている時、一人の「大男」が船に現われた。新顔で、眉毛が濃く、ほほ骨が飛び出している顔の印象から、歓迎できそうな男ではなかった。

私はエンジンの調子を調べていたので、忙しかったが、なんとなくその大男が気になった。男は、甲板に上がり、甲板員である李周昌と話をしていた。私は、二人に気づかれないようにしながら、それとなく注意を払っていた。しばらくして大男の姿は消えた。

朝会のときその男が再び現われた。

船長の文士善が、彼を紹介した。

『こちらは李燦虎同志です。これからいっしょに働くことになりました』

李燦虎は、濃い眉毛をピクッと動かしたかと思うと、小さく頭を下げた。

『とくに』

船長は、まわりを見まわして、一段と声を張り上げた。

『李同志は、党員であります。私たち全体の模範になるのはもちろん、非党員は、指導を受けねばなりません』

船長はこれだけ言うと、私をはじめ、党員でない船員一人一人の顔をゆっくりと眺めまわした。

私は承知しましたと云うふうに、軽い目礼で答えた。

しかし、本当のことを言えば、私の気持は決して愉快な方ではなかったので、顔にしわを寄せてため息をついた。党員がもう一人ふえた！ 嬉しいはずがない。

（ひょっとしたら、危険が迫っているのかも知れない）

このように考えながら朝会をすませ、船尾にある機関手専用の寝室に帰った。

それなのに、しばらくすると、当の李燦虎がその寝室に現われた。横になっていた私は体を起こし、いらっしゃいとあいさつの言葉を投げた。

党員というのが引っかかった。うまくあしらうにこしたことはないと考えた。下手をすれば、ひどい目にあうのがおちであった。

『僕の寝場所が、ここだそうですが』
李燦虎は、にこにこ笑いながら言った。
『ここは機関手たちの専用寝室なんですよ』
私はそれとなく拒絶の意思をほのめかした。すでに党員が二人もいるのに、もう一人ふえたのでたまったものではない。
『しかも、ここは機械装置のために床をはがなければならない場合もあるのです。とても不便なんですよ』
『ほお、そうですか』
李燦虎は、私の話を軽く聞き流した。
『船長同志に話して、舵手の寝室を使った方がよいと思いますよ』
『まあ、そこへはゆっくりと引っ越すことにしましょうや』
李燦虎は、相変らず笑い顔で、言うのである。
私もそれ以上は、言わないことにした。
彼は私たちの寝室で寝起きするようになった。
(かたときも油断してはならないぞ)

私は自分に言い聞かせた。「成分」をいつわっている私は、そのごろ嘘がばれかかっているように思われて、実のところ気が気でなかった。新義州水産事業所の態度が、どことなく変ってきたからである。

やがて、私たちの船は出航点検を受けた。

丸帽（官帽）をかぶった新義州水産事業所の支配人が、四名の事業所出入港検閲官を従がえて、船に現われた。

私たちは、前もって整列していた。軍事副船長の柳尹輿が一歩前に進み出て、挙手敬礼をし、つづいて報告した。

『支配人同志、平新艇〇三四号は出航準備の検閲を受けるため整列いたしました』

支配人は、柳の敬礼を返し、ひとくさり訓辞を述べた。例によって例のごとく、その訓辞は、あくびをさそう退屈な代物だ。判でおしたようなおきまりの内容である。要するに、「党」に誓った生産計画を百五〇パーセント超過達成せねばならないのである。船員たちの思想状態がよくないとおどかし、出航準備のありさまがなっていないとハッパを掛けた。

ようやく、支配人の訓辞が終った。

やっと海に出られると、私は安堵のため息をついた。軍事副船長はいつものように「気をつ

け」、「かしらなか」の号令をかけた。

『支配人同志、命令どおりに実施いたします』

支配人は、肩をゆり動かしながら、一度も振り返らないで歩み去った。私たちはその場に立ちつくしていてから、

『船員、位置へ』

の命令といっしょに各自の持場に帰った。

船長は、操舵室に入り、出港の汽笛を鳴らした。

私は、エンジン・ルームに戻って、ハンドルを握り、機関を始動させた。モーターの響きが部屋いっぱいに満ちる。この音をついて、伝令機の信号がチリンチリンとまるで怒ったように鳴る。マイクからは、ぶっきらぼうな船長の命令が矢つぎばやにくだされる。

『船首索しめ、船首索ゆるめ、索とけ』

ついに船首の大なわが解かれた。もう一度、出港の汽笛が鳴り、船は中速で港の埠頭を出始めた。

見送る人は、一人もいない。いちじに体中から力が抜け、張りつめた神経がゆるんだ。

このたびは、北緯三四度、東経百二二度附近に出漁し、十日間ばかりを操業を行なうといわれ

た。夏には、冷凍設備がないので、長期間の出漁が不可能であった。一方、冬の間は一度出漁すると、三ヵ月四ヵ月も海で暮らさねばならない。

金日成は、全漁船に対して、一年間三百日以上の出漁を要求している。これは、船が故障をおこして帰港することを考慮に入れない日数なので、実際には一年中海に出ている計算になる。今度の場合もそうである。十日に入港し、十一日の朝、再び出港する始末で、船員が上陸を許された時間は、わずかに十七時間。

私たちは、季節の移り変りを敏感に感じ取った。一回行って来れば春であり、もう一度行って来れば夏であり、そして秋が、冬が……。

船は、鴨緑江の河口に向かって下って行く。時速八ノット。満潮の時を利用しての出港なので、河口は水が満ちわたっている。水深は相当に深くて、百五十六トンの平新艇を浮かべる程度はある。

河の北岸には、中国人の姿がちらほらと目についた。畠の草取りでもしているのだろうか。船が孤独孤（地名）を過ぎるあたりで、洗濯をしていた中国娘が手を振る。こちらも手を振って、それに答える。

孤独孤の前は、水深が浅くて流れが早い。事故がしばしば発生する危険水域なので油断しては

いられない。私は、再び機関室に戻り、機械に全神経を配った。
鴨緑江を完全に出てしまうには約三時間がかかる。今度は、どういう理由からか「女性号」にも会われなかった。私は気がふさいだ。
陸地を離れるときには、必ずといってよいほど、一種の強迫観念に取りつかれた。今度こそ帰ってはならないという強迫観念なのだ。
海は広い。海は、どの大陸、どの国にも通じている。海は、希望するところへ行けるように道を開いていてくれる。今度の航海ではどんなことが起こるだろうか。奇蹟でも訪れて、このひどい場所から逃げ出せないものだろうか。
鴨緑江の下流は、少しづつその幅を広げるが、私の心は散散に乱れてくるのだった。動揺している自分の心を感ずる。
平新艇に乗り始めてから、早くも三年の年月が流れた。早ければ早く去った三年と言えないこともない。しかし、いいかげんに早く過ぎ去った三年間ではない。私は綿密な計画を練っている最中である。
私の青春が促してくれており私は勇気を失なっていない。それでも、チャンスはなかなかやって来なかった。時機が熟さない限り、自分一人の力ではどうしようもないことであった。

この世界のどの国で、こんな船を漁船と呼ぶことができるだろうか。漁船に武器を積み、軍事副船長という職名の軍人が乗り込んでおり、党細胞副委員長、そして技術副船長が乗っているこんな漁船があるものだろうか。彼らは、船員の言葉のはしばしから行動のすみずみに至るまで、監視の目を光らせるのみではなく、船の中で「社労青会議」を開き、軍事訓練を行ない、そして「党員学習」、「自己批判」を毎日繰り返すのである。

とても考えられないほど、堪し難い生活であることは言うまでもないが、慣れてしまうとそんなことも忘れがちになった。ただ、間隔をおいてひっきりなしに突き起こる鋭い怒りと、激痛のように迫って来る脱出への慾望、挫けることを知らない反抗への意志が、それを思い起こさせてくるのだった。

船はしばらくして鴨緑江を出はずれ、海に至った。

海では、晴ればれとした気持になる。北韓カイライ集団の政治が暴威をふるう陸地から、少しでも遠く離れたと思うと、それだけでも、生きがえったような気持になる。

風が快よく、正午近い太陽は高い天心で、清く明るく輝いていた。

船は、スピードを出し始めた。ほぼ十ノット、方角は南西方面。この位置からみて、全羅南道群山港と中国本土の青島を結ぶ直線の中間点ぐらいのところである。

李燦虎が、私の方に近づいて来た。私は彼の勧める煙草を受け取り、一服つけながらも、警戒の念をゆるめなかった。

『船にはながいのですか』

李が訊ねた。

私は、三年ほどになると答えた。彼の質問には、第二のかくれた目的があるかも知れない。

私は緊張した。

『李燦虎同志はいかがですか』

私もききかえした。

『ようやく一カ月半ぐらいですね。はじめは平新艇三五号でしたが、こちらに移されたのです。』

彼は、くつたくなげに笑った。身の上話では、船に乗るのが性味に合うような気がしたので、大学を中途でやめたそうである。

『大学をやめて船乗りになるなんて、ちょっと考えられないことですが。』

私は、あっけに取られて反問した。

実際、北韓の社会はそんな生やさしい所ではない。大学を出れば(しかも彼は党員なのだ)、それだけ出世も早くで結構ずくめのはずではないか。その大学を中途でやめ船乗りになった? あり

得ない話であった。

（きっと、ワナだ）

私は、そのように考え、一層強く気持を引き緊めた。

『よかったと思いませんか？　こんなに広い海で生活する方が』

李燦虎は、からからといかにも楽しげに笑いつづけた。

『そりゃ、よいかも知りませんが』

『それでいいんですよ。それ以上のことはぼくも知りません』

李燦虎は、こう言って立ち去った。

私は、機関室への帰途、注意しようと自分に言い聞かせた。（李のやつ、こちらの本心をさぐっているのだ！）

彼は、党員である。この船に乗る時党委員会で私の監視を命令されたかも知れない。（後で知ったが彼は実際にその命令を受けていた）

その日の夜のことである。周囲は暗闇に包まれ、ただふなべりを打つ波の音が聞こえる静かな夜であった。雲一点かからない晴天で、星が点点と輝いていた。私は、甲板に上がり、空を眺めながら口笛を吹いていた。

広い天と地の間で、私一人だけがぽつんと取り残されてしまったような孤独感が、ひしひしと迫った。前途には、悲観の材料が積もるばかりで、暗い気持をなだめようとしていた。
肩をポンとたたかれ、びっくりして振りかえると、副船長の張大衡がにこにこと笑っていた。
『一人で何をそんなに考え込んでいるんだ』
『夜空を眺めているだけだ』
『心配ごとでもあるようだね』
張大衡はずばりと私の心の中をあてた。
『またどうしてやぶから棒にそんなことを言うのか』
『李燦虎のことさ』
『李がどうした?』
『注意してくれよ、おっさん、党員なんだから』
張大衡は、すこぶる心配げな表情。
私は、よくわかっていると彼に答えた。そして、李燦虎はどことなく善人のように見えるし、私たちを監視しているようすもないとつけ足した。
私と張大衡は、心を打ち割ってつき合う間柄であった。すでに約束もできていた。

機会が来れば、いっしょに脱出することにしてあった。二人の間では、およそのプランもできあがっていた。ただ万事が思うように運ばない。それで気を揉み続けているのだった。

二日後、船は目的の海域に到着した。それからはぐるぐる回りながら魚とりだ。

一日に網を六回入れる。〇三四号と〇三三号は、まるでふたごのようにくっついて動く。一方が網を入れると、一方が上げる仕組みになっていた。

一日中、網を入れ網を引き上げる。

夜中にも、必ず一回だけ網を入れる規則になっていた。労働時間がちゃんとあるわけでもなければ、休憩時間が決まっているわけでもない、うとましく苦しい単調な作業。

一日の水揚げ量がちゃんと決まっているので、それに達しないときは、さまざまな責任追究を免れることができない。

しかし、船はどうであれ、太陽は東海から昇り黄海に沈む。太陽の運行さえも単調だ。かもめ一羽見ることさえない（これは陸地から遠く離れていることを言うときによく使う言い回しである）見渡す限りの大海原である。変化というものがない。全ては死のように固定している。

この海の平和にくらべて、一点の薄汚ない垢にも似た漁船の中では、醜さと罵声が渦巻き、苦しい労働が続く。

すでに浸みついた生ぐさは、体中に行き渡るだけ行き渡った悪臭が鼻をつき、揮発油のにおいが嘔吐をもよおさせる。
作業中にも、李燦虎はひっきりなしに私に近づこうとつとめるのだった。
私は、それに応じながらも、心のトビラは厳しく閉ざしていた。私の気持を知ってか知らずでか、彼は徐じょに自分をさらけ出して来た。
私も警戒はしながらも、彼という人間に興味をおぼえ始めた。彼は、顔がでこぼこで、眉毛も濃い男ではあったが、簡単に底の割れる悪知恵を働かせたり、人をおとし入れたりする人物には見えなかった。
一面彼は、多情多感な青年でもあった。
船乗り生活が短かいせいなのかも知れないが、海の変化を魅入れたような瞳で観察する男でもあった。
海にはたしかに、野性の美がある。柔弱な人間には測り知ることのできないみずみずしい律動感がある。
涯しない海が呼吸をしているような波を見つめていると、その荒荒しい息づかいを感じるのだ。腹の中に、あらゆる不思議で神秘な宝物を蔵しながら、海はあくびをしたり、咆えたり、ま

た怒ったりする。

霧が深く立ちこめた明け方の海と、太陽の動きにつれて太く大きな火の柱を立てる日中の海は、まさに壮観そのものである。その海を見ていると、心が清められるようで、生きていることが嬉しくなる時もあった。

早くも七月十七日になった。たそがれの光景が素晴らしい日である。私は疲れた体を船のてすりにもたせかけていた。空と海が紅に染まって入りまじり、相互の境界線をくずし合っていた。たそがれの太陽は、七色の光をまき散らす。太陽の足が着くとたん、海はまるで七色の透明ガラスのようになる。海は光の世界と化し、空の低い部分には辰気楼が立ったりする。

太陽は静かに没し去ろうとしていた。海に飛び込み、少しだけ泳いで行けば、太陽を引き上げることができるかも知れないと思われるほどの近さである。

私はその日、とくに悲痛な思いにとらわれた。わが身の境遇が、ちょうど沈みかかった太陽に似ていると思ったりした。

このまま、一日一日を無駄に過ごしていたら、一体どうなるのだ。

今すぐにでも、船を自由に動かすことさえできれば、全力を尽して群山に駆けつけてやるのだが。海図で見る群山は、むしろこの船の位置よりも少しばかり北の方に位置しているではない

か。

それは夢のような話である。夕食後、再び甲板に上がり、夜の海を眺めた。ちょうど其の時丸い月がのぼってきた。その光の中で、波が愉快そうに踊っていた。

波の音は、私の過去のささやかな泉、あるいは赤ちゃんのときの子守歌のようにきこえた。酒を飲めないのに、酔ってみたい気持に襲われるそんな夜の海であった。

これではいけないと私は気を取り直した。

（弱気は大敵だ。強くなれ。感傷におぼれれば、結局、全てが水の泡だ）

肩に力を込めた。私を助けてくれる人は自分以外にはない。緊張を維持し、勇気をたくわえねばならない。それがないと、脱出の成功はおぼつかない。

家族を思った。とくに妹のことが忘られなかった。今は、どこで、何をしているのだろうか。三年まえ、故郷を出てから一度も会えなかった妹。妹の手紙（差出人の住所のない手紙であった）から想像すると、どこかの炭鉱で働いているようすであった。

さまざまな雑念を振り落し、心を鬼にしなければならないと考えながら、船の内側へ向きを変えた。早く寝るにこしたことはないと諦めたからである。

『何をそんなに思いつめているのですか』

まるで私の心の中のことは、手のひらのようにわかっているとでも言いたげな声が、すぐ目前で聞こえた。李燦虎。

『あ、いつからここに出ていたんですか』

私はしまったと思った。

『ちょうど今、煙草はいかがですか?』

彼が煙草をさし出し、私は火をつけてやった。

『早目に寝た方がよさそうですね』

と私は言った。

『まあまあ、そうおっしゃらないで、話でもしましょう。夜の海が惜しくはありませんか』

李燦虎は、おいしそうに煙草をふかし、夜空を仰いだ。

あたりは静まりかえり、波だけが月の光に驚ろいたように、立ちつ沈みつしていた。世界全体が滅び去った荒廃の真只中に、私たち二人だけが取り残されているとでも思いたくなるほど、周囲には人の気配がなかった。

私は、李燦虎をまっすぐに見つめた。大男の彼が、浅はかな悪知恵を働かせて、他人をワナに陥し入れる人間には見えなかった。お人好きのタイプ。いくらか警戒心をゆるめた。彼が私をど

う思っているにせよ、話の相手になってみることも悪くはない。
『とても考えられないことですね』
と私は言った。
『何がですか』
『大学をやめて船乗りになるなんて』
『ああ、またそのお話ですか。学問をしてみたところで、運命が大きく開かれそうもなかったのですよ。いっそのこと、甘い空気のあるさわやかな海で、人生を送ろうと思いましてね』
李燦虎は、大したことではないとでも云いたげに、ふふんと鼻で笑った。
『李同志は、党員なんでしょう?』
私は重ねて訊ねた。こちらの本音は、党員のお前さんが何が不足で、こんな労働をなさるのかね、という一種の誘導訊問であった。
『党員ですって? 党員がどうかしたとでも云うのですか』
彼は、少しばかり興奮した。まるで党員であることを呪っているようなそぶりである。
『ところで海の生活が気に入りましたか』
私は話題の向きを変えた。

『もちろん。この国は狭すぎます。海に出て来ると、胸のつかえがすっかり降りたような気持です。海は青春の舞台です』

『おかしな話だな。私でしたら広い海よりもですよ、狭くても陸地のらくな暮しを選びますね』

『おやおや、またさっきのことですか。閔同志は、とても警戒心の強いお人ですね』

『そんな意味ではありませんよ。私だったらもっと勉強もしてみたいし、人民のために自分の力を発揮してみたいと思っているのです』

『学問をすれば誰でも成功しますか？　だいじな点は、心の安らぎですよ』

『そいつはブロジョア根性というものだ』

『まあまあ、そう力まないで下さい……　どうだっていゝことでしょう』

李燦虎は、独り言のように言うと、煙草を力いっぱい海へ投げ捨てた。

『ええいくそ、ソ連にでも行ってやろうか』

しばらくしてから、李はこのようにつぶやいた。

『ソ連ですって？』

『ソ連でなくてもかまいませんや。どこへ行ったって、ここよりはましなはずですよ』

彼は、落ち着き払った態度である。

私は答えなかった。はげしい悪感が私を襲った。こんな話は、誰にでもしてよい性質のものではない。彼の口ぶりには、一種の痛快ささえひそんでいたが、それに釣られて合づちを打ってはいけない。しかし、真正面から反対するのもまたおかしかった。

悪感の度はもっと加わった。真夏にランニング一枚着ているのに、小刻みの震えが両足にきた。

私は、これではいけないと気を持ち直した。

『そんなことは云っちやいけませんよ』

冷たくあしらってやった。

『そう警戒しないで下さい。私は絶望しました。こんなところは、もう我慢が出来ないのです。若さが惜しい』

『飛んでもない。あなたは何の罪もない私を殺すつもりですか』

『誤解しては困ります。閔同志のことではいろいろと聞かされていますよ。あなたの成分が悪いということもです。それだけではありません。成分を偽っていることも。党委員会からは監視するようにと言われています』

彼は豪傑ふうの洪笑を飛ばすと、なつかしげに私を見つめた。

『成分を偽ったことなんて一度もない』
私は頭がこんがらかってきた。彼の言葉をどう受けとめるべきか。
『しかし私はあなたを監視する気などこれぽっちもありませんや。むしろ信じてもよい友人だと思っているのですからね。ともかく、注意するにこしたことはないでしょう。党委員会では、あなたの正体を知っているようすでした』
李燦虎は、甲板にもたれてどっかりと坐った。私にも坐るようにと手招きした。
『ありがとう。成分がばれて、たとえ炭鉱へ引かれて行っても、結構、ただ、今日の温かい言葉は忘れないつもりですよ』
私は彼の濃い眉毛を見つめながら言った。
『炭鉱行きはつまらんな』
李燦虎は、まるで自分の言葉の意味を知らないかのように、ずばりと言ってのけたのである。炭鉱へ引かれて行かないようにする方法？　それは脱出以外にはない。
私も坐った。私は李燦虎の手を握った。
私はそのまゝ、しばらく黙っていた。
『こんなことは、生命をかけないと云えない』

もはやあほうのような表情をしまってもよいと考えたらしく、李燦虎の瞳は急に輝きを帯びてきた。

『生命をかける？』

『そう。生命がけでないとできない冒険です。私たち、これから別別にならないようにしましょう』

『その意味は？』

『その意味は、文字どおりそれだけですよ』

『あなたに計画でもあるのですか』

『あります』

『云って下さい』

『南の方へ飛ぶのです。そのために学校もやめて、ここまで来たのです』

『信じられない』

『私は調べてみましたよ。この船は武器を積んでいますね。こいつさえ奪えば必ずしも夢ではない』

『奪えなければ？』

『その時は死ですね』

李燦虎は、興奮を押し殺した低い声でささやく。私は、彼の表情から、生と死を超越した意志の力を読み取った。

もはや包み隠す必要がなくなった。びくびくして、しりごみばかりしているわけにはいかない。

『いいだろう。あなたがワナをかけたとしてもかまわない。前まえから決心していた。副船長張大衡とも約束してある。そして安炳録とも』

『僕を入れると四名だね?』

『あなたが加われば勿論のことです』

『わかった。チャンスが問題だ』

『もちろん、チャンスが大事だ』

私は、立ち上がった。李燦虎も立った。

二人とも煙草をくわえ、早くも西の空に傾いた月を見つめた。夜の海は、月の歓迎準備でもしているのか、ぶくぶくと沸き立っていた。

私たちは、船尾の寝室に戻った。

私は一睡もできず、矢つぎ早やに煙草をすい続けた。

今や、決断の時機が迫っている。この人生で、チャンスは一度しか訪れない。そのチャンスをこちらの勇気と意志をもって、しっかりと摑まねばならない。これが運命を切り開く力だ。私は、運命を自分に都合よくたたき直すだけの勇気を持っていると思った。

李燦虎が嘘を云ったのではないと信じた。彼は、それに足る男である。党員であり、大学教育まで受けた男の口から、北韓脱出の話が飛び出してきた。およそあり得ないことには違いないけれども、それだけに一層強く、李燦虎の言葉に固い信念と決意を読み取った。

信頼できる友人を得たことは、大きな喜びである。一人の力では、どうにもならない仕事がある。それも、友人どおしの強い協力と結びつきがあれば、容易に可能となるのだ。李燦虎を信じてやろう。私はひと晩中、こう思い続けた。とたんに、気持も落着いてきた。

久しぶりに感ずる自信であった。勇気も湧いた。そうだ、脱出だ。ながいながい時間をかけて、それだけをねがいつづけて来たではないか。李を加えて、四人の同志が力を合わせる。不可能を可能にしてやる。私は一層強く、脱出の決意を固めた。やっと、気持が落着き、いくらか寝ることができた。

3、脱出計画

私は、翌日張大衡と二人きりで会った。李燦虎の話をきいて、張大衡は顔色を変えた。
『信じられない。軽がるしく行動するわけにはいかんよ』
張は心配の方が先立つようすであった。
しかし、私は、李燦虎を信じてもよいと思いつめていたので、張を説きつけようとした。
張は信じようとしなかった。
ちょうど仕事があったので、私たちは離れた。
その後、私はせっせと李燦虎と会った。もはや私たちは、相手の心をさぐったり、適当な餌を投げてみたりする探索の段階を飛びこえていた。
心と血が通じ合う双児のように、気持をさらけ出し、とてつもない大事業の計画に熱中した。
気持の上では、二、三日中にでも決行してしまいたかったが、それは不可能なことであった。

まず、武器の奪取が難しい。四名の射撃手が実弾装塡の銃を持って、きびしい監視の目を光らせていた。武器庫は、船尾船室である私たちの部屋にあった。しかし、それをおさえることができない。四名がとてもすきを与えてくれなかった。

一刻が千秋の思いとは、まさしくその時の心境であったが、できないことはできないことで、次の機会を待つにしかはないと決めた。

その代り、私たちは作戦を練った。ひとたび船を掌握した時、どのような順序と行動で、処理にあたるかである。

ある日、張大衡と私と李燦虎の三人が落ち合った。安炳録も加えたかったが必要以上に四人が寄り集まるのもどうかと考えたので、取り止めにした。

張大衡は、李燦虎を見て、ぶすっとした表情をつくった。

李燦虎が口を開いた。

『党委員会では、あなたもきびしく監視するようにと言われましたよ』

『私をですか?』

張がおうむ返しに訊ねた。

『いちばん年上のお兄さんた、人民軍の忌避者だったそうですね』

『何ですって、その時、兄は重病で、一歩も歩くことができなかったのです。それで、軍隊に出られなかっただけです』

張大衡は、怒りでぶるぶると震えていた。

『ところが、党委員会はそのようには考えてはいません。思想がなっていないので、軍隊勤務を忌避した反動分子だと言っていました』

『反動分子？ ふん、病気で、召集に応じなかった人間を銃殺した人殺しどもめが』

張大衡の興奮はつのった。

李燦虎は黙った。彼も張大衡の気持をわかりすぎるくらいわかるのだった。

しばらくしてから、李燦虎は自分が大学で経験したことをぽつりぽつりと打ち明けた。彼は、新義州軽工業大学の幹部指導員（党の組織体）の一人だった。いわば学生課の職員に似たようなものである。ある日、上級機関から突然、学生の動きに気を配るようにとの命令を受けた。

学生の中でもとくに、北韓に送還されてきた在日同胞学生の動きをつかむ必要があると言われた。学生たちの行動や言葉は、細大洩らさず調べあげられていた。そればかりではない。在日「朝総連」から送ってきた友人親戚の近況までそなえつけてあった。もしも、その知合いが北韓の政治体制にふさわしくない人物であれば、北送同胞にも「危険人物」のレッテルが貼られ、きびしい

監視の目が注がれるのである。

目に見えない網が、一人一人の個人の上におおいかぶさっているので、いつ、いかなるときに引っかかるか、わかったものではない。

このあと、彼は大学の学生になったが、とても勉強する気になれなかった。北韓カイライ集団の正体を、余りにも知り過ぎてしまったからである。そこは神聖な学園というよりも、スパイが乱舞する戦場のようなところであった。

しかも、学校で勉強するのは純粋の学問ではない。朝から晩まで、「党政策学習」、「マルクス・レーニン主義」、「金日成労作研究」、「金日成抗日闘争回想記」、「共産主義教養」などが科目の殆んどで、学生を機械的な人間につくり直そうとするのだから、個人の精神の自由を守ることは不可能に近い。

もちろん、李は共産主義社会に大きな望みをかけ、その希望を実現してみようと考えたこともあった。しかし、実際に見たり聞いたりする現実が余りにもひどいことばかりであり、いかにももっともらしい口実を設けては馬や牛をこき使うように、皆をしぼりあげていることに気がついた。

大学をやめる気になったのは、良心にさかろうてまで学問をする気持には到底ならなかったか

らであるというよりも、未来に対してまったく希望を見出すことができなかったからである。このような社会では、結局、さっさと死んでしまうか、あるいは脱出するほかに、人間として生きるすべはないと考えた。彼が、水産事業所に来た目的は、一つしかなかった。船に乗れば、脱出の機会もあるだろう。

李燦虎の打ち明け話に、張大衡もため息をついた。三人はその場で固い握手をかわし、生死を共にすることを誓った。

早くも帰港の時期になった。しかし入港は嬉しくなかった。計画を実践できないで、汚辱の土地へ帰ることを誰が歓迎しよう。

ながい航海のあとには、陸地以上の恋しいものはないが、その陸地が早くわかれを告げたくてたまらない所である。これはどうしようもない。

私は、航海から帰るたんびに、深い心配のとりこになった。あるいは、今度入港した時には、予想だにしなかった危険が待っているのではないだろうか。炭鉱に引っぱられるのではないだろうか。

船長以下、船の幹部は幹部たちで、入港の時期が近づくにつれ、一層とげとげしくなり、頭をかかえるのだった。約束の漁獲高をあげることが出来なかったからである。

彼らも、水産事業所の支配人から怒鳴られることや罰を食うことがこわい。それでますますいら立ち、部下の船員をののしっては、責任を転嫁することに浮き身をやっするのであった。毎日のように、「作業総和と自己批判会議」が開かれ、哀れにも非党員と末端の甲板工らが体のよい追究の餌食になった。

それに、どんなに機械であっても機械にも忍耐の限度というものがあるのだ。殆んど、休みなしに稼動させていたので、やたらに故障が相次ぐし、故障がなくても機能を十分に発揮できない有様である。これがまた、末端船員のサボタージュのせいにされ、一層てっぴどくどやしつけられるのだった。

八月五日、私たちの船は心配の種をいっぱいに積み込んで、鴨緑江をさかのぼった。ずいぶん久しぶりに、人間の姿と樹木と家を目にするわけであるが、なつかしさが一向に湧かない。平野には蘆の茂みが波打っていた。今年もまた、洪水があったことを知った。

元来、新義州は洪水の多い所である。殆んど毎年のように、鴨緑江がはんらんして町を呑み込む。洪水が来ると、市民は疎開し、もぬけのからとなった町は、幾日間も、水の底に沈むのだった。

満潮にならないと新義州には入港できないので、時には龍岩浦(地名)で一泊することもあるが、

今度の場合はうまく時間に合わせて入港に成功した。
入港検閲は出港検閲以上にやかましい。支配人を入れて五人組の検閲官は、船員にねぎらいの言葉一つかけない。その場ですぐに、漁獲量が少ないと怒鳴り始めた。このあと、船の状態を調べたが、機関の点検を行なう時には、私の心臓はまるで大変な罪でも犯した人のように、はげしい動悸を打ちつづけるのだった。
久方ぶりの入港ではあったが、出迎えの家族などが港に出ているはずがない。(たとえ家族があっても、彼らは事業所の塀の向う側で、勝手知らない新来の他所者のように、頭を突き出してこちら側を眺めるのがせいいっぱい歓迎儀式である。)
検閲をすっかりすますのには、およそ二時間がかかる。このようにもみくちゃにされた後、陸に上がればつかれが体中をしめつける。彼らは、船員に魚一匹分けてくれるのでもない。魚は、いわゆる「国家の魚」なのである。(余談であるが、私は大韓民国に来て、魚釣り会が多いのには、本当にびっくりした。北韓では、たとえ協同農場の貯水池にある魚でも、釣りはご法度である。それもまた、いわゆる「国家の魚」だ。協同農場自体が魚釣りを行なうことはある。それは、もちろん、水産資源を開発する「国家の目的」を遂行する作業なのだ。釣れた魚が個人に回わされると考えるのは大変な誤解である。)

金日成は、「特別命令」を下して、漁船の一回停泊期間を四八時間以内にした。入港した時間から四八時間（それで大抵の場合一日半）以内に、また出港せねばならない。一日以内に出港してしまう場合さえも、往往にしてある。

私のような独身者にとっては、むしろ有難いことかも知れないが、家族持ちにとっては、それ以上の苦痛はない。しかも、冬の間は一度出港すると、数カ月を海で過ごさねばならない。一年を通じて家族がめぐり会える日数は、わずか二十数日間にすぎない。

それればかりではない。久しぶりに家へ帰るのだから、手土産の一つでもぶらさげて行きたいものであるが、それさえもできない夫や父親の辛さは、想像に余りあろう。

私たちは、ようやく上陸を許され、水産事業所を抜け出した。自由な時間は、たったの十時間。次の日の朝七時には、再び船に帰っていなければならない。

まず、大きく息を吸い込んだ。魚の臭いがしみ込んでいない空気！これこそ、本当においしい空気だと云わねば、どこにおいしい空気があるのだろうか。歩くのに不便さを感ずる。いつも船の震動にゆられていたので、足もとの大地が、震えているような錯覚におち入る。

北韓の殆んどの都市がそうであるように、新義州の町も閑散としていた。まず、自動車がない。新義州全体を通じて、乗用車（全部官用車）はわずかに十六台。バスは、一区間に二台し

か配車されていない。

車の姿を拝むのが難しいのも無理ではない、人も多く見かけることが出来ない。すでに夕方になっていたが、町を歩く人が少ないからである。

私と李燦虎、そして張大衡は酒が恋しくなった。途方もない大冒険の相談もしたかったし、あるいは最後の帰港になるかも知れない（次の出港で脱出に成功すれば新義州も見納めである）その晩を意義ぶかく送りたかった。

ところが、北韓には個人商店というものがない。たとえお金があっても、自由に買えない。必要品は物物交換の形で、ひそかに闇取り引きされる。

お酒を買って来て呑むなどというぜい沢は党の高級幹部の連中らでなければ、できない真似である。

私たちは、酒を呑むために食堂に入った。午後六時から八時までの二時間に限り、酒を売っている。全新義州の男が集まって来たかのようである。長蛇行列をつくっている人の数が、ざっと百名をこえた。私たちは、行列の最後尾にくっついた。

駅の出札窓口のような小さな窓があって、自分の番が来ると、そこへお金を差し入れ、引きかえに「酒券」を受け取る。今度は、この「酒券」を持って、酒屋まで行き、そこでまた待つ。酒屋には編

み椅子五、六個が置いてある。席があかないと、そこへ入って酒を飲むことができない。こんな有様なので、酒を飲むのではなく、ようやく喉に注ぎ込むといった方がもっと正確な言い方になる。

それで、順番が早くやって来れば助かるが、その日は、一時間以上も待たされた。ようやく席があき、そこの女の子に早く酒を持って来てくれとさいそくした。返事がふるっていた。

『ふん、誰がお酒をすすめたのかしら。せきたてられるのはご免だわ』

こんな酒の味がどんなものかは、およそ想像がつこう。たのしい会話をまじえる?　それはなお不可能だ。（私は、大韓民国に来て、何回となく酒をのみに行ったが、その光景には驚いたというよりも、むしろアッケに取られた。人をはべらせて、お酒をのんでいたからである）居酒屋を出た私たちは行き場に窮したが、これという目あてもなかったので、新義州「青年公園」の方へ、ゆっくりと歩いて行った。

私はその当時、自分の家とか部屋を持つ必要がなかった。いつも海へ出ていたし、入港した時は、水産事業所の合宿所に泊まればそれですんだのである。

友人の家を訪れ、そこで寝る場合もあったが、出来るだけしないことにしていた。その理由はこうだ。私が行けば、当然食事をしなければならない。労働者の一日あたりの配給食糧が七百グラム、労働力のない人（学生を含めて）の一日あたりの食糧は三百グラムになっている。これ以

上の配給はない。もし、お客さんに食事をもてなせば、家族の一人が食事を欠かねばならない。食糧事情はこうであっても、久しぶりに訪ねて来たお客さんをそのまま帰すわけにはいかない。主人も客もお互いに苦しい思いを強いられるわけである。

北韓の都市には、駅前に広場と公園がある。広場が必要なのは、群集大会をしばしば開くからであり、公園、これは対外宣伝用になくてはならないのだろう。

公園といっても、とくに広いわけではなく、数カ所にベンチがおいてあるだけの荒れはてたもの。客を家に招くことがとても出来ないので、公園は広い意味の社交場となっている。コーヒショップや甘物屋、個人経営のホテルや料理屋などはない。人人は自然、公園を利用するようになる。

人気のない場所を見つけて坐った。

こちらの話が、彼らの耳に入れば全てが終りである。

夏なので、雑草の上に坐ってもかまわないのだった。公園のあちらこちらに「安全員」(警官)の姿が見られた。私たちは、まわりに誰もいないのを見すかしてから、ひそひそと相談を始めた。

話の糸口がほぐれると、ひどく緊張しながらも大胆な気持になった。生命がけの大冒険ではないか。ちょっとした失敗が命取りにもなりかねない。

『くどいかも知れないが、心の準備は出来ているだろうね』
私が、まずこの点をただした。
『よけいなことは云わないで、本題に入ろう』
李燦虎が言った。
『船舶検査期日が迫っている。決行日を前もって決めておくことは難しいな』
これは張大衡の意見。
沈黙が流れた。毎年夏になると、八月十六日から船の修理を受ける。船がひどいおんぼろ機械なのである。
修理とはいっても、大仕掛のドック入りと考えたら大間違いである。船員たちが機械を取りはずして、あれこれと修理を行なうのである。
今年も八月十六日から船舶検査が始まる。脱出決行は自然、そのあとになるわけだというのが張大衡の意見である。一日千秋の思いの私たちにとって、それは余りにも遠い未来のように思われたが、やむを得ないことでもあった。
次には船の武器をどんな方法で掌握するかの問題に移った。いろいろな意見が、出されたがまさにこれだという妙案は浮かなかった。それで、射撃手が武器庫の警備をおろそかにする夜をね

らって、一挙に決起することに決めた。

たとえ武器庫を奪ったにしても、船を完全に支配するまでには、さまざまな困難が待っているはずであった。

それで私たちは、同志の数をもっとふやすことができるかを検討した。これには李燦虎も張大衡もそして私自身も反対であった。ことがことだけに、相手かまわず、打ち明けることも出来ない相談であったが、脱出を決行するだけの勇気を持つ者が、ほかにまた居そうでもなかった。もちろん安炳録は同志であったけれども。

安炳録は戦争中に両親を失ない、孤児院で育った孤児である。世界のどこで生まれ、生きて行くにせよ、孤独と苦難を背負わされるのが孤児の運命であるが、とくに北韓では、孤児であるがゆえの苦痛が一層甚だしい。

一日中酷き使う労働者全体にも、充分に食糧が行き渡らない有様である。まして、孤児に食べるものや着るものが充分に行き渡るわけがなく、孤児の成長を見守り面倒を見てくれるはずもなかった。

安君が十才ばかり年下であるせいもあって、私は日ごろから、肉親の弟のように可愛がった。そのせいなのか、彼も肉親の兄のように私を慕ってくれた。

それればかりではない、彼も大人になるにつれて、まわりを観察し、判断を下すようになった。それまでは漠然と当りまえのように考えていたことが、決して当りまえのことではないと気づき始めた。

去る六月のことである。彼はひどい風邪を引いて、水産事業所の合宿所に寝込み、高熱にうなされた。

ところが、水産事業所側では病気の治療を心配してやらないのはおろか、かえって『成分の悪いやつが仮病を使って怠けようとしている』と怒り、食事さえも出さなかった。彼は、あまりの仕打ちにあきれ、船長に突っかかった。病気をなおしてくれないのはまた我慢もしょうが、ご飯さえも出さないのは飢え死にしろということかと。

彼の悲しみや辛さは、ざっとこんなものであった。彼は、冷たい世間に一人放り出され、面倒を見てくれる人のいないみじめさがどんなものであるかを、骨身にしみるほど知っていた。いつか私は

『安、僕たちもいゝ所へ行きたいものだね』

と訊ねたことがある。

『どうしても、行かなければなりませんよ』

彼はこのように答えてくれた。

この安炳録を加えて、行動を共にする同志は全部で四人。平新艇三四号には驚くことなかれ、二十名が乗り込んでいる。結局十六名が相手だ。比較にもならない四対一の闘かいである。

それも、四対一という単純な数字で表現してもよい、そんな生やさしい闘かいではない。北韓カイライ集団の人間改造が、実に徹底しているからである。

北韓カイライ集団は、考えることのできる人間、知覚力のある人間を作り出すことは避ける。人間であることに間違いはないが、殆んど本能的にいわゆる「党と政府」に忠誠をつくすように訓練された機械のような人間だけが生まれる。とくに、船の幹部陣がそうである。人間感情の自然な発露というものがない。自由が何であり、幸福が何であるかを考えてみたことさえもない。それは、まさしく人間機械だ。彼らは、人間がなぜ生きているのか、なぜこのようにみじめな生活と抑圧された仕事にしがみつかねばならないのか、ということについて、疑問を抱いたことのない機械である。

それがゆえに、一人一人はまさに生きている武器でもある。この武器たちを打ち負かして脱出しなければならなかった。

前に立ちはだかる壁は高いが、脱出計画をおくらせることはなおさら許されなかった。難しければ難しいほど、必死の意志と、自由への信念をもって、立ち向けねばならない。

数は少なかったが、信念と勇気によって結ばれているのだ。これは、偉大な力の泉である。一つになった四人の精神と肉体は、不可能を可能にするだろう。

脱出の過程で、もし必要とされれば、悪徳党員どもを取り除くこともやむを得ないと決め計画を貫くことにした。

夜が大分更けてから、公園を出た。考えておかねばならないことと、準備しておかねばならないことが余りにも多すぎた。その全てを、力のゆるす限り片づけておくことを固く誓った。

翌日の出港予定は満潮の時間を取り逃がして延期されその次の日七日の明け方ようやく出港した。

「八月十五日記念式」に参加せねばならないこと、そして十六日から船の検査が行なわれることなどの事情によって、今度の航海は遠方を避け、中国の遼東半島近海で魚をとった。

すでに話したように、前もって決行日を決めていたのではない。情勢有利と判断されたら、いつどこででも行動に移る体制にあった。今度の航海でもその機会を断えずうかがい続けたのは云うまでもない。

しかし、機会は訪れず、船は十四日再び帰港した。

「八・一五記念日」のお目でたに、入港まで重なったのだから普段とは異なる割増しの食糧分配でもありそうなものだと思ったが、大変なボーナスのように尊大に振舞いながら出してくれたのが、船員全部に対する豚肉五キログラムと三合入り加工酒八本であった。

もちろん、代金は私たちがちゃんと支払うのである。前にも云ったように、北韓ではお金があっても品物を買う機会は、そうざらにあるものではない。私たちの場合でも見るように、代金を貰って豚肉を渡しながら、お上が、大変な面倒でも見てやっているように振舞うわけである。

酒は船で回しのみ、外へ出た。与えられた自由時間はわずかに二時間である。

「八・一五」がいわゆる「国慶日」であるならば、一日ぐらいのんびりと骨休みをさせてくれたってよさそうなのであるが、かえってこんな日を悪用する。精神の再武装が必要だというわけで、「八・一五精神」というものをつくり出し、こじつけるのである。「八・一五」を前後して、「特別警備週間」を設けたが、私はその日に限って夜間歩哨の当番に回わされ、一睡も出来ず、普段よりも一層ゆううつな一昼夜を送らねばならなかった。

八月十六日からは船の修理に動員された。副機関長である私は、機械をすっかり分解して性能を調べ、故障の有無を点検する任務を与えられた。それは、もっけの幸いであった。

脱出する場合にそなえて、熱心に機械を調べた。エンジン故障で、脱出が不可能になった時、一番困るのは、私たちなのであった。

敵は本能寺であったけれでも、機械は丁寧に調べ、整備をし直した。まず推進器を新しいのに取り替えた。軸心を正確に調整し、前まえから具合の悪かった「クラッチ」と「スラスト」をすっかり直した。

噴射器をきれいに掃除し、圧縮の悪いピストンも新しいのに取り替えた。

この時、いちばん神経を使ったのは、船のスピードをもっと出すかの問題であった。決起が第一段階で成功した場合、全速力で脱出する技術の問題が残る。それは勇気と信念だけでは解決のできない、機械にかかることなのである。

全速を出したとき、私たちの船の最大速力は、約十ノットであった。ところが、機械の修理をすましてみると十二ノットまでは出そうであった。私は満足した。機械について、手を打つべきところは全部打っておいた。

船舶修理期間中の苦しさは、とても言葉で言い現わすことが出来ない。昼夜をわかたず、その仕事に打ち込んだ、が遅ればせの雨季で鴨緑江の水がふくれ上り、機関室の床まで水浸しの仕末であった。

ともかく、九月四日までには船の修理が完全に終った。九月五日の海運監督庁の検査も無事に合格した。六日は一日中、出港準備で忙がしかった。

二十数日ぶりに、ようやく再び海へ出ることができた。

それはとても意義ぶかい船出であった。私と李燦虎、張大衡はその間にしばしば顔を会わせ、決意は固まる一方であった。心の準備もさることながら、今度の航海では必ず決行のチャンスがあると予想されたので具体的な計画を練った。

たとえ成功がおぼつかなくても、もはやおめおめと退くわけにはいかないと思った。死を恐れまいとお互いにはげまし合った。

北韓での最後の滞在は、それだけに一層意義ぶかい時間になったが、それは私たちの内面のできごとで、表から見たらおだやかな時間がのんびりと流れて行った。

九月六日、私たちの平新艇三四号は、三三号といっしょに、十二時定刻出港の汽笛を鳴らした。

これが最後の見納めだと考え、鴨緑江の濁流に目をそそいた。

なぜ私は死を賭してまで、脱出しょうとするのだろうか。

鴨緑江は、黙もくと流れていた。中国の少女らがいつものように手を振りながら、私たちを見

送り、その対岸である北韓の岸では真夏の太陽を吸い込んだ蘆の原が夏風に吹かれて静かにたゆとうていた。私の考えも、過去の山脈を辿って静かにたゆとうていた。

いちじは、私にも夢があった。いちじは、私にも希望で胸がふくらむ時代があった。しかし、夢は打ちくだかれ、希望は消えた。一個の取るに足らない平凡な人間である私が、ふかい絶望を胸にたたみ込み死をとしての脱出を決行しょうとしている。

私は、このよう決断を迫った過去のさまざまなできごとをふりかえり始めた。北韓カイライ集団が、一人の若者に押しつけた無惨な絶望感と、そして脱出を決意させた過去を頭の中で考えてみた。私の目に涙が浮かんだ。

4、悲しみの大地

私は、太平洋戦争（いわゆる支那事変）の真っ最中に生まれた。当時の、「日本帝国主義」が満州、中国を占領し、蒙古方面へと勢力を伸ばし始めた時である。

一九三六年八月十二日が、私の誕生日である。閔家の長男として、はじめてこの世の太陽の光を浴びた。出生地は、黄海道信川郡温泉面鉢山里九石洞という所である。小高い山が屏風のように三面を取り囲み、山のはるか向こう側には、霊気を帯びた九月山が望見された。村は、殆んどが閔姓の人たちばかりの、四十戸程度の小さな部落であった。一九四五年の解放の時までにも、たいして大きくもない瓦ぶきの家がたった二棟に止まり、残りの家はあげて藁ぶきの農家であった。私も瓦ぶきの家の子孫ではなかった。

村の西北方六キロばかりの地点に、信川邑があり、北方約二キロばかりの所に、有名な信川温泉があった。信川温泉は硫黄分を多量にふくむ、温度の高い温泉が湧く名勝地である。

農地は、水田と畠が半半ぐらいであったが、地味が肥えていたので、それだけ暮しよい農村でもあった。先祖から伝わる村の格言に、

『怠けなければ飢えない』というのがあるほど、ともかく野良に出て土を掘り、タネをまけば、多くの収獲が約束されたのである。

私が生まれた時には、祖父母もまた生きておられた。父には、八人の兄弟姉妹がいたが、みなよそへ嫁いだり、あるいは分家していた。三男の父が、とくに祖父に望まれて、家を継ぐことになり、祖父といっしょに暮した。

私たちの一家は、とりたてて裕福な暮し向きではなかったが、働き者の祖父は相当多い農土を所有していた。しかし、勤倹貯蓄の気風が一家を支配していたので、父も小学校を出ると、さっそく、家の仕事を任かされ、上の学校には行かなった。小学校に通うときも、布製の運動靴をはかされたことがなく、弁当も粟飯だったという。

八名もいた父の兄弟は、若死にした人、他郷へ出かけた人などが多くて、私たちの一家は親戚の数が多いわりにはいつもひっそりとしていた。祖父がこの世を去ったのは、私が五才の時である。

私の家は、今の説明でも想像がつくように、他人を苦しめたことのない、つつましい自作農に

すぎなかった。日本統治の終りごろ、農産物をその農地がある面事務所で処理する制度が新しく設けられた。それで、一家も土地の所在地である信川郡加蓮面へ引っ越した。

父は加蓮面に来てから、ますますはげしくなってくる日本政府の徴用を避けるために、面事務所の書記になった。解放後、この面書記を勤めたことが、大きな不幸の源になろうとは、神ならぬ身の誰が予想し得たことだろうか。

感激の解放が訪れた。八月十五日。

解放の年に、私は加蓮面四見里の私立小学校一年に入学した。この学校の名前は、北韓カイライ集団治下で、「加蓮人民学校四見里分校」と改称された。

解放後にやって来た共産主義者らは、『人民を解放し、過去の地主階級と搾取階級を根こそぎにする』と宣言した。変革の嵐が吹き始めた。前に、小作人であった「太郎の父」「正子の母」が、村の指導的な幹部にのし上がり、にらみをきかした。

私たち一家は、このような変革の嵐をまともにかぶることはないだろうと、安心し切っていた。たとえ、ほかの地主の下で、小作をやったことはなかったけれども、貧しい人々をないがしろにしたり、あるいは小作人として酷き使った覚えのない、平凡な自作農にすぎなかったからである。

それところではない。素朴な親戚の大人たちは、共産主義者らのいわゆる「人民解放運動」を、内心いけないことだとは考えていなかったほどである。解放前は他民族の支配のもとで暮らしてきたし、日本の権勢をカサに着た「親日派」からは、言うに言われぬさまざまな侮辱を受けてきた。

わが国の歴史を貫いてきた「両班」(文武の士族)と「常民」(庶民)の階級意識を正しい意味において打ち破り、農地を公平に全農民に分配するというのだから、むしろ歓迎したといって言いすぎではない。人間の価値が、本人の能力と努力を基準にして、定まるのではなくて、馬鹿息子が親の亡光で出世し、社会を動かし、貧乏人をしいたげ、そしてますます肥えふとるさまを、いやというほど見せつけられてきたからである。

一家の大人たちの考え方は、素朴なものであった。私たちばかりではない。その当時の北韓の農民たちは殆んど全部が、同じように考えていた。皆は新世界が幕をあけるのだとひそかに喜んだ。新しい世界では、士族と平民の階級も、貧富の差もなくなるにちがいないと、ある程度は希望に胸をふくらませたものである。

それだからこそ、中には善良な地主が十把ひとからげに扱かわれて、強制移住をさせられても、大して深刻には受け取らなかった。

「移住」という言葉を、こゝで簡単に説明しょう。(大韓民国では、このような術語を始めて耳にする人が多いことを知り、私は実はいささか驚いているのだ)。これは、先祖代々地主階級として生きてきた家の家族を、故郷から山奥の辺地に強制追放することである。もちろん、彼らはいわゆる「人民の敵」であり、とても赦すことのできない「ブロジョア階級」なので、このように強制追放(移住)をさせられても、誰一人として同情する人がないのはおろか、かえってさげすみ、苦しめたものである。共産主義社会の賤民階級に転落せられたのがすなわちこの人々であった。どのような集まりでも、「移住させられた人間」であることがばれると、とたんに相手にされなくなるかと思えば、手いたい侮辱をこうむったりするのであった。

ところで、このような移住制度が落度なく、実施されたわけではない。中には、あいまいな人たちや対象外の人が、移住させられる例が相つぐようになった。小作人や従僕の身分から、一夜にしてにわかづくりの要職についた者の中には、馬鹿や性悪も少なくなかったので、個人の感情に左右され気にくわない人に移住命令を出したりしたのである。

一九四七年四月、私たちの一家にも移住命令が出された。移住先きは、黄海道奉山郡新渓面の草ぶかい山奥であった。私たちに移住命令は、まったく寝耳に水であった。

解放直前まで、父の名儀になっていた農地は、田畠を合わせて、約七千坪に過ぎなかった。こ

の農地面積は、祖父が八名の息子と娘に公平に分配した広さで、父の兄弟は全部、それぞれ七千坪程度の農地を所有していた。

ところが、おじやおばは移住命令を受けなかった。一人、父だけが移住させられるようになったのは、解放直前に面書記をつとめた「親日派」だったからである。父が面書記の真似をしたのは、日本の徴用から逃れるためにやむを得ずに取った非常手段であったが、そのような言い開きは通るはずがなかった。好むと好まざるとにかかわらず、私たちは移住せねばならなかった。たとえ、「親日派」でないことがはっきりしていても、共産主義の法律がそのように定めてあるのだから、どうしょうもないと諦めてしまった。

移住当時の家族は、両親と私、三人の妹と弟一人、合計七名であった。私たちは、移住先きの奉山郡新渓面に行くふりをして出発したが、途中までついてきた監視員をうまく丸めこみ、海州を新しい生活の場にえらんだ。

海州清風洞に落着いてから、私は海州第六人民学校（小学校）三年に編入した。父は「移住させられた人間」という成分をかくして、「国有建築物管理所」に就職した。

その当時はまだ、南北の分断がながつづきしないと考えられていた。それで海州市の人口は急にふくれあがった。ひそかに南北を行き往する人、北韓の共産政治を逃れる人が、南に向ってど

っと海州市に押し寄せた。それと、私たちのように故郷を追われた機会に、思い切って都会に出て来た人の数も決して少なくなかった。私はまだ子供であったけれども、不安におののく当時の海州市民の姿と、猫の目のように急変しつづける情勢に右往左往するさまや目の玉を光らせて民家に押し入り乱暴をはたらく「ロスケ」(ソ連軍人)たちの顔が、今もはっきりした記憶となって残っている。

一九四八年、大韓民国政府が樹立されると、北韓でも公然と、いわゆる「朝鮮民主主義人民共和国」という長ったらしい名前で、国土の分断を表面化した。こうして、南韓へ行く人の数がますますふえ、海州市は混乱の度を加えた。

親戚の中からも、韓国の方へ行く人が、ふえはじめた。北韓カイライ集団の政治は、いよいよその正体を露骨に現わしはじめたが、私たち一家は南への大移動に加わろうとはしなかった。家族が多くて三十八度線の警備をうまく突破できそうでなかったし、元来、縦順な父が近いうちに大韓民国による統一ができると信じていたからである。それに父には職があった。

私たち一家は土地を耕やす純朴な百姓で、政治情勢を判断する眼識を欠いていた。善良な農民にありがち態度でなんとか、うまく行くだろうと、手を拱いて考えていた。

共産主義というものも、天真らんまんに理解していた。

それが「偉い人たち」の言葉どおりにさえなれば、パラダイスがやって来ると簡単に信じ込んでいた。

その理由はこうである。私たちは、解放前は、日本人から見さげられ、圧迫され虐待されて、小心翼々と暮してきたが。解放と同時に、共産主義社会を迎えたので、果して共産主義なるものがどんな主義で、その政策がどのような形で現われ、また共産主義がヨーロッパとソ連で、どういうふうになっているかを知るよしもなかったのである。ただ、熱狂的に宣伝すれば、それが本当なんだなと信じ込むのだった。

しかも、当時の「赤たち」(共産主義者)の気焔は、すさまじかった。わずか一、二年後には、理想的な地上のパラダイスが来ると宣伝に躍起となっていた。現在の苦しみは、この楽園を建設するまでの、やむを得ない過程だと述べた。もちろん、彼らが云うように一、二年のうちに楽園が来るとは信じなかったが、それでも遠からず暮しよい世の中になるだろうと、おとなしく待っていることにしたのである。

当時、「人民学校」の五年生であった私が学校で教えられるのも、全部そんな内容の宣伝ばかりである。教師は、まだ固まってもいない学童の頭に、マルクスとレーニンと、そしてスターリンを詰め込み、わかろうがわかるまいが、お構いなしに、夜も昼も共産主義の理論を教えた。子

供たちには分別があるわけでもなければ、物事に対する判断力があるわけでもなかった。

共産主義者らが六・二五動乱の戦争準備をいそいでいた時なので、暴政は想像に絶した。人々はあげて、軍需資材の生産に動員されたのであるが、それでもかかげるスローガンは、お決まりの「地上の楽園」建設であった。

動乱が起こった一九五〇年、私は「人民学校」を卒業して、海州第一中学校に入学した。しかし、中学校の生活は、わずかに一週間で終った。戦争のおかげで、学校はおろか、すべてがおじやんになってしまった。

骨身にしめている六・二五動乱記憶のかずかず――。しかし、その話ははぶこう。全同胞がひとしくなめた苦痛を、今更話してみたところで、何の役に立とう。

たった一つ、頭に浮かびあがるのを書きとどめる。父は、戦争真っ最中の、その年の秋（ちょうど、「人民軍」が盛んに敗走していたとき）、「赤たち」が罪とがのない良民を反動の罪名のもとに、手当り次弟に、虐殺するさまを見て、身辺の危険を感じ、山の中に隠れ住んでいた。私は、人目につかないように注意しながら、山中の父のかくれ家に食事を運んだものである。

国連軍入城近しの噂が、海州にひろがりはじめた頃であった。山では、父一人だけではなく、反共思想を抱く多くの人々が、時機の来るのを待っていた。太極旗をこしらえ、武器を準備し

た。国連軍が海州を回復するのと呼応して、市内に入り、「赤掃討戦」を行なうためであった。

しかし、彼らは、国連軍がすでに入城したというデマのさそいに釣られて、太極旗を振り、万才を叫びながら山を下り、近くの保安署(警察署)を襲ったが、強い反撃に会い、再び山へ逃げこんだ。保安署員らは討伐隊を組織して、山狩りを始めた。ちょうどその時、父の弁当を持って、山を登っていた私は、彼らに出くわした。私は素早やく、弁当を草むらに投げ捨てた。成り行きをさとったからである。彼らは、私をその場で殺しかねなかったが、まだ子供であったし、山中の「反動」と接触した物的証拠があるわけでもなかったので、留置場にぶち込んだ。

留置場には、約三十名ばかりの反共闘士と、われも知らずに引っぱられてきた良民たちが、身動きも出来ないほどひしめきあっていた。署員は、次から次へと留置人を呼び出し、短かい罵声といっしょに質問を投げたかと思うと、その場で帯劔で刺し殺すのだった。

私が入れられた最初の日に、こうして命をおとした人が、五名に上った。私もそこで死ぬのかと思った。「赤たち」は、退却するまえに、皆殺しにするに違いなかった。

このあと、私たちは刑務所に送られた。刑務所には、数千名に上る人たちが、血だらけになってうめいていた。死にかかっていた。

私が生き残ったのは、奇蹟である。ちょうど、上空にさしかかった国連軍の爆撃機が、知って

か知らずでか、その理由はともかく刑務所の塀を爆撃した。厚い塀が吹き飛んでしまった。警備のカイライ軍が不意をつかれて右往左往しているすきに、私たちはなだれのようになって、外へ出た。

警備のカイライ軍は姿を消してしまった。私は一目散に、家に逃げ帰った。家では私が死んだものと諦らめ、すでに悲しみの涙もかれはてていた。

その翌翌日の十月十七日、海州は韓国軍と国連軍の手中に入った。

国連軍が撤退するとき、一家がそれについて行けなくなったのは、本当に運命のイタズラだというほかには、言うようがない。一家の七人家族が、荷物をかつぎ、子供の手を引いて、南への道をたどり始めたのは、十二月六日であった。車の便があるはずがないので、テクテクと歩いた。

ところが、いくらも行かないうちに、病後の母の容態が急に悪化し、道ばたに倒れてしまった。どうせ死ぬならば、住んでいた家に帰ろうということになってしまったのである。

こうして、再び共産主義の世界になった。

戦争の爪先きが引っかいた跡に残されたものは、悲惨それだけであった。あまつさえ、「赤」の支配地区では餓死と凍死が日常茶飯事であった。

数カ月間にわたって、彼らは、いわゆる「反動」狩りに血眼になった。私たちの家も捜査の対象になり、父も数回呼ばれて行ったが、具体的な証拠を摑めなかったので、父に強迫を加えるだけで釈放してくれた。

飢饉は、暴威をふるった。産業施設はすっかり破壊されてしまったが、それでも昼夜の別なく、空襲警報が鳴りつづけた。何年間も農作に手をつけなかったので、米どころか、小麦粉をつくったあとの滓を拝むことさえも難しいほどであった。

婦女子も、防空壕堀りと架橋工事に狩り出された。

私も、年がかわって、海州第一初級中学校に入学したものの、勉強どころのさわぎではなかった。勤労動員に引っぱり出された。それでも、不幸中の幸いは、父が前の「国有建築物管理所」にどうにか復職できたことであった。

5、「成分調査・成分除隊」

一九五一年から、一九五三年までの四年間、鉄のカーテンを一層厚く引きおろした共産カイライ集団は、社会のあらゆる部門を通じて、前代未聞の独裁と暴政をふるいはじめた。

戦争を行なうかたわら、共産独裁体制を固めるために、罪なき良民の命を奪い、粛清を進めた。

「偉い人たち」は、彼らなりに、勢力争いにうき身をやっした。こうして、昨日までに天下を号令した人物が、今日は命を奪われたりする始末であった。

上の連中らのことは、さておこう。平凡、素朴な一般人の上には一層きびしい苛烈な粛清の嵐が見舞った。組織の網の目が引きしめられ、なにかにつけ、重箱の底をほじくるようなしぶとさで、成分の調査が行なわれた。

甘いキャプセルに包まれていた共産主義の毒薬は、今や、そのキャプセルさえも脱ぎ捨て、酷

毒な正体を現わした。

その時までも、純真素朴に、いわゆる「共産主義的な理想社会」というものを、頭の中で想像し、一沫の期待さえもかけていた人々は、すでに余りにも遅すぎはしたけれども、共産主義がどのようなものであるかを、いやになるほど体験するに至るのである。

それまでの宣伝が、初心な人々をあざむくための詐欺手段であったことが、そしてそれ以外の何物でもなかったことが、はっきりしてきた。

階級の差別が無くなり、また貧富の別なく、皆が平和な営みを行なうことができるどころか、もっと露骨な社会階級がつくられ、特権階級と被支配階級の相違は一層はっきりしてきた。

まだ子供であった私も、その成り行きをさとることができた。それればかりではない。私自身が被害者の一人になった。

戦争まえまでは、まだ共産社会の組織が完成していなかったせいなのかも知れないが、私は学校で優等生になることができたし、模範生に選ばれもした。「人民学校」では、級長になり、少年団長でもなった。このおかげで、海州第一中に、無試験の「推薦入学」さえできたのである。

中学校でも、将来を嘱望される前途有為の生徒に選ばれた。勉強でも、全学年を通じて、殆んど首席を占めたし、校内の組織的なサークル活動でも、指導的な位置を与えられたものである。

私にはじめて悲劇が訪れたのは、一九五二年の春であった。各中学校は、二名の海外留学生を、政府に推薦した。留学先きは、はっきりしていなかったが、おもにハンガリーとポーランドへ派遣された。

学校の推薦した、二名の留学生の中に私も入っていた。正直に言ってとても嬉しかった。興奮もした。留学したら、もっと一生懸命に勉強しようという野望が、胸を熱くした。学校当局でも、将来を祝福してくれた。クラスメートたちも、私の幸運をよろこんでくれたし、また、うらやましがった。

私の留学推薦書は、海州市に送られた。海州市がそれを認めると、次は中央に送られ、そこの審査を受ける順序になっていた。

私の喜びは、しかし、ほんの束の間のことにすぎなかった。海州市当局が、留学推薦を却下したニュースは、手痛い衝撃であった。

その理由は、たった一条である。家の成分がいけない、ただのこれだけであった。『日帝時代面の書記を勤めた親日派の息子であり、先祖代代農民を搾取した悪徳ブロジョアの子孫であり、移住家族の一員である』。これが、留学まかりならぬの理由であった。

ショックは、大きかった。野望にふくれあがっていた少年は、意外の挫折感に打ちくだかれ、

絶望の淵に沈み込んだ。
私は、何日間も、学校を休んだ。
自分の将来に、容易ならぬ、黒い雲が、覆いかぶさって来るのをひしひしと感じた。
「階級を打ち破ること」を、あれほど熱烈に叫んできた北韓カイライ集団であったが、政策の理論と実際が余りにもかけ離れている事実を、私は骨身にしめて知った。
あまつさえ、私の一家は、彼らの主張するような、悪徳「ブロジョア階級」でも、あるいは「親日派」でもなかったのである。
どうして、私たちがブロジョアや親日派になり得ようか。所有農地が、わずか七千余坪の人間は、ブロジョアではない。父が日本政府の徴用から逃れるためにやった面書記のおかげで、親日派呼ばわりされてはたまらない。それは、まるで運命が理由になるなら理由をもって、利を瓜はじきしようなものであった。
私は、事態を明瞭にさとった。この社会ではどんなに学問をしても、役に立たないという真理を、はっきりとさとった。
それでは、将来はどうなるのか。
私は、中学校を退学し、家でぶらぶらして過ごした。育ち盛りの少年にとっては、まことに貴

重な年月がこのように何の意味もなく過ごされたのである。

両親は、私に面と向かっては一切口を閉ざし何も言わなかった。おそらく、私よりも大きなショックを受けたに違いなかった。私の退学さわぎではひそかに心配もしたようであったが、本人の私には一言もそれに触れなかった。

私は、外出することもできるだけ避け、部屋に引きこもって、漢文の「千字文」の学習を行なった。それが、私の唯一の勉強になった。

このいうふうにして年月を送りながら、私は自分の将来の問題については、できるだけ考えないことにした。考えれば、心がふさぎこむだけで、これという見通しは少しもなかったからである。

『君がしたばたしたところで、どうにもなるというものではない』。これは、ちょうど、封建李王朝時代奴隷の子に生まれた者が持ったに違いない、みじめなあきらめに似ていた。

海州第一中学校では、何回も、家に来ては、そうぶらぶらしないで学校へ出るようにとすすめてくれた。おそらく、模範生であった私の不幸な運命に同情したからであろう。しかし、私は、最後までねばり抜いて、学校へは行かなかった。

こうして過ごした年月が、なんと二年間にもなる。一九五二年冬から、一九五四年二月まで

の、ながい年月の間、私は、失意のドン底をさまよった。

この期間は、北韓の社会にも、大きな変化をもたらした時期である。休戦が成立し、共産主義の独裁社会が、固まった時期に当る。

人々の暮しは、悲惨をきわめた。戦争に痛みつけられ、疲労こんぱいした心と肉体に、休息は与えられなかった。もはや気力を失ない、人の死ぬのは数限りなく眺めても、まゆ一つ動かさない人々の目の前で、性こりもなく人殺しの場面が見せつけられた。

新しい不幸は相ついで起こり、「自己批判」や「群衆裁判」のように、悪意と殺気を帯びて開かれる白昼の殺人劇は、拡がるばかりであった。

中でも、黄海道がいちばんひどかった。戦争まえにも、黄海道は三十八度線にいちばん近かったので、韓国へ脱出した人が多かった。それで、戦争中には、反対の考え方を持つ人に対する殺人劇が、もっとひどく展開されたところである。戦争が終ってからは、戦争処理の美名のもとに、すさまじい粛清の嵐が吹き荒れた。

男の数が、とても少くなった。戦争未亡人と子供が圧倒的に多くなった。弱々しい女の人たちが、強制労働に狩り出され、飢えのために道ばたにばたばたと倒れる例は、日常のこととなり、その死体が、いたるところで目についた。死体は、その場に打ち捨てられ、悪臭を放った。とて

も、片づけられないほど、かずが多かっのである。
飢餓にあえぐ人々は、はじめのうちは山の松葉を煮て食べたが、最後には、木の皮さえもはいで食べた。重苦しく、冷たい風が吹きすさぶ無慈悲な時代であった。人々は、人間というよりも、動物になり下がっていた。それも、もはや、どんな感情も持ち合わせない、動物になっていた。

何もかもすっかり諦めて、学校へでも行こうかと考えるようになったのは、一九五四年に入ってからである。その年にも明るい太陽の光はさして来なかった。

私は、すでに十九才になっていた。年を二才もいつわったので、書類の上では十七才であったが、復学するには年を取りすぎていた。

それに、海州第一中には通いたくなかった。その学校は、私に、なおすことのできない傷を負わせた学校なのである。

それで、海州第二初級中学三年生に編入学した。初級中学には一学年しか通っていなかったが、年が年だったので、三学年に入ることにしたのである。

私は、その年の六月卒業するときまでの五カ月間、学校に通いながら、本意でない学年飛び越えをつづけたわけてある。

その年の九月、海州高級中学校に入学した。（高級中学制度は、一九六二年度に廃止され、代りに、二年制の技術学校と、その上の段階にあたる二年制の高級技術学校がつくられた。）

高中（高級中学の略称）からは、いわゆる思想教育が強化され、軍事学と呼んで軍事訓練を行なった。それから、これは、すべての学校でひとしく実施することではあるが、一年に六十日間以上の勤労動員を課した。

私の高中生活は、約八カ月間で終りを告げた。満十八才になったので、軍隊に入らねばならなかったからである。

学校生活とは名ばかりで、夢多い若者たちのロマンチックな生活というものは、少しもなかった。北韓カイライ集団は、学生たちに到底たえることのできそうもない、はげしい労働を強要し、ちょっとの間だけでも、休息の時間を与えようとしなかった。

『常に緊張せよ。緊張をとけば、ブロジョア思想に染まる』

これが、金日成の「プロレタリア思想」である。この方針は、勉学途中の学生にも、掛け値なしに適用された。

なるほど、形の上では夏休みや冬休みがあったが、実際には、そんなものは有り得なかった。不足した授業時間を補なわねばならなかったし、そうでない場合は、労働動員に狩り出された。

夏は、農村に入って、農業を手伝い、冬は、なわをなう仕事が待っていた。
一九五五年六月、労働動員に引き出された時の話を、一つだけしょう。
その日は、ちょうど、六月二十五日であった。授業は午前中で終ったが、午後には「栄光の労働動員」があるから、海中高中の全校生は、一人残らず、「海州自動車事業所」の前に集まるようにと、指図された。
動員をさぼることなどは、とてもできない相談であった。簡単な洗面道具などを準備して、集合場所に出かけた。
ソ連製のトラックに分乗し、どこへ行くかも知らされないで、ただ自動車の動きに任せた。
世間知らずの少年である私たちは、それでも愉快であった。六月のさわやかな風をまともに受けながら、夢にまで見たソ連製のトラックに乗って走る気分は、とてもすばらしかった。どんな仕事が待っているかも知らなかっので、ただ楽しさのあまり、力いっぱい歌を歌った。
トラックは、一晩中走りつづけた。はじめのうちは喜んでいた私たちも、トラックが走る一方なので、少しこわくなった。載寧を通り過ぎる。安岳を走り抜ける。数十里は来ているはずであったが、トラックは停まることを知らぬげに、走りつづける一方ではないか。熊川を背にした。東の方が明るくなってきたのに、それでも走りつづける。

やがて、トラックが停まったところは、大同江をはさんで、鎮南浦を真正面に見る済島であった。海州は、はるかに遠いところにある。もはや、どうすることもできない。させるがままに、するよりほかには、どうすることもできない羽目になった。

私たちは、いわゆる「済島国営農場」に到着した。十間四方になるかならないかのせまい宣伝ホールに、二学級百余名の生徒が収容された。足をまげて坐ってもなおかつせまい、小さな広間であった。その翌日から、田植えが始まった。

一日七百グラムの食糧配給を受け（これも、半分はとうもろこしである）午前五時から、午後八時まで、照りつける太陽の下で、働きつづけた。

私たちは苦かった。最初一日二日は、それに堪えることができた。しかし、三日目からは、体の自由がきかないほど、疲労がはげしくなってきた。

高校の生徒を、こんなに容赦もなくこき使えば、かわいそうだと思う感情ぐらいは湧きそうなものであったが、その連中らは、人間のつくりが特別にできているようすであった。一方では、恐喝と強迫でおどしつけながら、その一方では、生徒たちをお互いに競争させた。各学級を一単位にして、どの学級が『いちばん立派に、社会主義のために奉仕しているか』、『どの学級が、愛国的な発揚を、もっとも忠実に示しているか』を、まるでけしかけるようにわめきたて、いちば

ん能率をあげた学級には、子供だましの紙きれで、表彰状を与えるのだった。

競争意識にかいたてられ、数日間は、歯をくいしばって働く。背中の皮はむけ、すねの筋肉ははれあがって、傷だらけの体は疲労と激痛を訴えつづけた。しかも、そこは大同江の下流にあたっていて、午後になると、乾ききった突風が吹いてくるのだった。皮膚はヒビ割れし、田の水にやられて皮膚疾患者が続出した。

苦しい労働と粗末な食事、それに加えて、飲料水がよくなかったので胃腸病、風邪、肺病患者まで出てきた。しかし、病気になると、かえって大変な目にあう。休ませてくれ、治療をしてくれるのはおろか、いわゆる「愛国的な発揚」が足らないから病気などにかかったと、攻めたてられ、かえって罰をくらうのが万千である。

私たちは、疲労しきったが、それでも毎日牛馬のように引き出された。怠業などは想像さえもできないことであった。

作業の能率が、少しづつ低くなるとその連中らは、また悪知恵を働かせた。それまでは、男女の生徒が別別にわかれて働いたが、今度は、男女をかきまぜて、また競争をさせるのだった。男女の生徒をまぜて、ひと組をつくり、ほかの組と争そわせるのである。

それで、またしばらくの間は、枯れつくした力をふりしぼることが出来た。

このような労働動員を一ヵ月間も続けたのであるから、病気にかからない生徒は、一人もいないありさまであった。もはや、それ以上は、働かせることができないことがハッキリしてから、ようやく海州へ帰された。

すでに説明したが、このような酷い労働動員を一年に六十日以上、はたさねばならない。いわゆる「内閣決定」によって、金日成が公布したことなのである。

たとえ、労働動員がなくても、学校生活の苦しさは同じことであった。軍事学といえば、きこえはよいが、本を勉強する学問ではない。例をみないくらいはげしい軍事訓練を行なうのである。軍事学の教員は、殆んどが人を多く殺したことをハナにかけている悪質な退役軍人で、生徒を無慈悲に扱うのだった。

なにかといえば、ありとあらゆる肉体的懲罰をかけ、気分しだいで強行軍をさせたりした。

北韓では、特別の新兵訓練所の必要がないほどである。毎年、春と秋には「軍隊招募事業」というのがはじまる。ここで入隊の形式を取るのであるが、その細かい手続きたるや、まことにお笑い草である。

「民青」(今は社労青)の会議を開く。あらかじめ指名されている学生一人が演壇に上り、しかつめらしく、いわゆる「社会主義と党と国家」について、熱弁をふるい、このあと、必ず例のいわ

ゆる「人民軍」を讃える言葉をわめきたてる。目的は、いわずとも知れている。最後に、自分が軍隊に、志願入隊するため嘆願書を出すことにした、と述べる。それから、ほかの人たちも、いっしょに嘆願書を出そうではないか、と呼びかけるわけである。

これに応じないで、嘆願書を出すのはイヤだとは、誰も云えない。好むと好まざることに関係なく、誰も彼もが、軍隊に入れて下さいという嘆願書を、出さねばならない羽目になる。

このような卑劣きわまる手管を使って、学生たちの「志願入隊嘆願書」が、前もって中央に集められている。

今は、事情が少し変った。すなわち、私のように成分のよくない者は、軍隊に入る資格さえも奪われた。軍隊に出なくてもよいのだから、嬉しいはずであるが、問屋はそうたやすくおろしてはくれない。北韓社会では、軍隊に出なかった人間は、その理由はなんであれ、全ての社会活動から、徹底的にしめ出される。そういう人には、農村で最低の下づみ生活か、炭鉱勞働しか待っていない。

北韓カイライ集団が、青年を入隊される方法も、また巧妙にできている。いわゆる「内閣決定第なん号により、軍隊招募事業に対する命令」を下せば、それだけで入隊せねばならなくなる。

もちろん、入隊するご本人は、どこへ行かされるのか、わからない。「軍隊招募事業」の命令

ある。

こうして、私も、軍隊に引っぱり出された。ご多分に洩れず、「国営旅館」に二日間、滞留させられた。二日目の夜十時頃、将校が現われて、簡単な身体検査を行ったのち、上衣のカラーをつけてくれ、それから二時間の自由時間を与えられた。私は、自分が軍隊の配置を受けたことをさとった。

どこでどういうふうにしてわかったのか、母が面会に来ていたので、一時間をそれで過ごした。

その夜中に、車に乗せられ、配属部隊へ連れて行かれた。

その時は、まだ九月の蒸し暑い時期であったが、綿入れの冬服を着せられた。夏服ではすぐ冬服に替えなければならないので、「国家的な損失」だとされた。蒸気風呂に入っているようなひどい汗を流しながら、私が到着した所は、平安南道順天にある「人民軍最高司令部偵察局」の第五部であった。

私は、無電手になった。階級は戦士（二等兵）。

偵察局第五部の仕事は、さまざまな無電を盗聴することで、少しでも間違って聞き取ると、責任追及が厳しかった。

いちばん下っ端の私は、くわしいことは何も知らされず、ただ毎日を面目くもない無電の盗聴にすごした。

いろいろな無電が傍受された。その中で、どれが重要な内容の無電であり、どれが重要でないかということが、私にはわかりようがなく、ただ命令どおり、その内容を報告すればよかった。

それでも、ときどき、ものすごい「自己批判」をさせられ、サボタージョをしていないのに、サボッたとおどかされたりした。

それでも、幸いに思ったのは、出身成分をいつわっていたので、成分に対する追及は、受けなくてもよかったことである。

このような軍隊生活には、ホトホトいや気がさした。楽しみがあったとすれば、ときどきかくれ聞く大韓民国の北韓向け放送であった。

この放送では、とても信じられないような、一般国民の自由な生活にともなう、さまざまな娯楽番組を流していた。率直に云うと、私は、その放送の内容が、北韓向けの宣伝であって、実際の国民生活は、そうでないだろうと信じていた。

私がよくきく番組の中に、連続ラジオ・ドラマが二つあった。ドラマの主人公たちは、ソウル

の明洞（中心街名）を自由に歩き回り、きいたことも見たこともない食べ物を取りながら、甘い恋をさゝやくのであった。

それが面白くてきくにはきくけれども、そのドラマは、いわば大韓民国がこれだけ自由な国である、ということを北韓同胞を相手に宣伝するための、プロであって、実際はそうでないと考えたものである。私としては、そのような環境、そのような恋といったようなものが、どんなに想像力を逞しくしても、とても理解できなかったからである。

女を炭鉱に送り込み、男の力にもかちすぎる坑夫の仕事をさせながら、それこそ自発的な愛国心の発揚であるとラジオドラマで放送するのが、北韓カイライ集団の政策である。これに馴らされた私にとっては、無理もないことであった。

しかし、それでも、私は、韓国がどんなに自由な国であるかを、少しづつさとりはじめた。夜十二時を過ぎてからきこえてくる北韓向け放送を通じて、それを知ることが出来た。声の美しい女子アナウンサーは、北韓の実情を私以上によく知っていて、くわしく教えてくれたし、韓国のいろいろなできごとを説明してくれた。私は、連続放送ドラマが、嘘ではないことを知り始めていた。

こんな楽しみを除けば、軍隊生活は悲惨を極めた。北韓の軍隊の実情は、ひどいの一言につき

る。その組織が悪棘にできている上に、組織を動かす人間が疲れるだけ疲れているからである。

ひどい目にあうのは、下っ端の者たちである。上の連中らは、したい放題である。横領によって、ぜいたくさんまいにふけりながら、下の者に対しては、次から次へと任務を与えるのである。それだけならば、まだ我慢もしよう。彼らは、思い出したように「自己批判」をさせ、私たちを怒鳴るのであった。

私は、成分が何時ばれるかとビクビクしながら暮すので、その部隊で勤務することは、死ぬほど辛かった。全北韓を通じて、いちばんひどく酷き使うのが、こゝに違いないと考えた。

一週間のうち、五日間は夜ふかし勤務であった。夜ふかしをすれば、その翌日は休ませてくれなければならないのに、またほかの仕事をおしつけ、それでも足らないと思ったのか、やれ思想教育だ、やれ何だと、殆んど二日に一回づつ、試験を行なうのである。

「政治上学」という教養時間がある。討論を行なわせ、演壇で自分の勉強したところを発表させる学習時間であるが、これもその一つであった。

ある日、私は、「政治上学」の時間に、演壇に上って自分の学んだところを発表せよ、という命令を大尉から受けた。私は、その前日と、その前前日の二日間を徹夜勤務し、昼間は昼間で、ほかの作業をさせられたので、充分な学習準備をしていなかった。

私の発表がいゝかげんなものなので、大尉はカンカンに怒った。
『同志は勤務を怠けるばかりでなく、もっとも大事な学習さえもろくにしていない』
と怒鳴り、悪罵をあびせた。
私は、黙っていた。すると大尉は、上官の言葉に服従しないと一層荒れ、私を重営倉にぶち込んだ。その時は、すでに十一月で、ひどく寒くなっていた。
重営倉から出てきた私は、勤務だけは前どおりにさせられたが、「要注意人物」になっていた。いちどにらまれた私は、それ以後というものはたびたび、してもいない怠業の濡れ衣を着せられ、てっぴどい「自己批判」をさせられたものである。その上に、成分がばれてしまった。
その当時は、カイライ集団の「対民制度」が新しく組織しなおされ、皆の成分が徹底的に洗われ、確認される最中であった。
私は、軍隊から追い出された。いわゆる「成分除隊」をさせられたわけである。「成分除隊」は北韓社会での人間失格を意味する。
どんなに有能な人間でも、「成分除隊」をさせられると、もうおしまいである。公職につく資格を奪われるのはもちろん、働く場所さえも与えられない。
北韓カイライ集団は、あまつさえ、女性にも軍務を負わせている。服務期間は、六年から七年

間である。この務めを果さなければ、一人まえの人間としての待遇を受けられないように、制度化してある。どんな書類にも、たとえば食糧配給書類にも、この服務記録がついてまわる。「成分除隊者」は、食糧配給においてさえも、何やかやと制約を受ける仕組みになっている。「成分除隊」は、禁治産宣告に似たようなものである。私は忘れることができない。私は、「総参謀長指令〇二一〇号」によって、「成分除隊」させられた。一九五八年十一月のことである。除隊にはなったものの、一向に面白くない、ゆううつな気持を抱いて、両親のいる海州へ帰った。

一九五八年は、まことに陰惨な一年であった。「反革命分派分子の粛清」とやらで、金日成を中心に、派閥間の勢力争いが行なわれ、その直前まで党の要職にあった多くの人々が、逮捕されあるいは殺害された一年である。

一般の人々の間では、成分調査が行なわれ、あらゆる職場と家庭を通じて「階級」の相違を、はっきりさせたのもその年である。

成分調査は、徹底的に行なわれた。さかのぼっては、家庭の過去が三代にかけて、細大洩らさず調べあげられ、現存する家族のどんな誤ちも、重箱の底をほじくり出すように、洗いざらい調べあげられた。

重い気持を抱いて、家に帰って来てみると、もっとゆううつな事件が待っていた。父が、以前に勤めていた「国有建築物管理所」から、強制退職させられていた。成分が悪い、これがその理由であった。

父は、土木工事場で土運びの労働をしていた。成分のよくない父に、北韓カイライ集団が与えた仕事が、それである。すでに、五十をこえた父は、不平を云うことさえもはばかりながら、重労働をしていた。

それに、私が「成分除隊」のウキ目にあったということは、泣き面に蜂のようなもので、父と母の心配ごとがもう一つふえたわけである。両親は、

『年取った私たちが、なが生きしたところで、どれだけ生きるだろうか。若いお前が心配だ』と言い、

タメ息ばかりついいた。除隊した息子を迎える一家の姿にしては、それは余りにもうら悲しい光景であった。

6、海州綜合機械工場

その年の冬は、例年に比べて、ひどく寒かった。

食い物がろくなものでない上に、着るものもなく、それに燃料にもことかいた。（煉炭が実生活に使われるようになったのは、はるかにのちのことである。）

私の年は、すでに二十三才になっていた。平和な時代の、その地方のしきたりからすれば、すでに結婚していなければならない年であった。結婚はしていなくても、独立して、一家をなしていなければならない年ごろであった。

しかし、私は、その冬、失意のどん底で、灰色の毎日をすごした。

働きたくても働く場所が見つからなかった。すべてが、手の届かない、はるかに遠い所にあった。

私は、ひょんな具合いにして逸れ始めた、幼い時代からの過去をふりかえってみた。そして、

共産主義が支配している現実を、考えてみないわけにはいかなかった。そもそもの不運のはじまりは、共産主義体制を受け入れ、子供の白昼夢のような共産主義を、理想として信じ込んでしまったところにあったのである。

北韓カイライ集団の毎日宣伝し力説することが、住民を酷き使うための、体のよい方便に過ぎなかったという事実を、いち早く知ったならば、こんな目にはあわなかっただろうに、と私は後悔した。私の自覚は、あまりにも遅れてやってきたのである。

なぜ、解放直後に、南韓へ行かなかったのだろうか。故郷の信川から強制移住させられたとき、これをさとり、実行せればよかったのに。

彼らの正体を知らないで、共産主義者の理想論を、たとえうわべだけでも信じてしまった失態が、こんなにむごい現実となって、現われてきたではないか。

ああ、すべては遅すぎた。この境遇は、明日の運命を予測させるに足る、哀れな状態以外の、なにものでもないではないか。

その当時の、わが家の家族は、九名であった。この大家族が、生命をたくしている収入というのは、年とった父が、土木工事場で土運びをして貰う、雀の涙のような配給だけであった。一家の生活のみじめさは、言語に絶した。

しかも、北韓カイライ集団は、軍備の拡張だけに血眼となり、一般住民が飢えようが、死のうが、そんなことは気にもかけなかった。それこそ、打ち捨てられた、訴えようにも訴えるところのない、あんたんとした生活があるのみであった。

私たちは、粟飯からきび飯を食べるようになり、しまいにはそれもなくなって、小麦粉のカスでつくったお粥で飢えをしのぎ、遂には食事を抜かすのを、日常茶飯事のこととした。全家族がひもじさの余り、冷たい部屋の中で、身動きすることもできずに、寝て暮すみじめな状態になった（話が横道にそれるが、私は大韓民国に来てから、食糧事情に関する質問を受けた。それは、こうである。北韓の人々は、それでも飢え死にすることはないだろうというのである。私は、このような質問に対しては、返事をするまえに、とてもぜいたくな質問だと考えた。実際、北韓の惨めな状態を語りきかす勇気がなかった。こんな状況を、どんな言葉で説明すれば、納得して貰えるだろうか。）

私にとっては、これ以上のむごい刑罰がなかった。年取った父が、あんなに働いているのに、私はなにをしているのだ。

これは、野心に燃えていなければならない青年期の私にとって、とても堪えられない大きな試錬であった。そして、私はこのとき始めて、化けの皮をはがされた真相を、まともに見たのであ

る。

どんなに後悔しても、それはどうすることもできないことであった。こうして、私の心の中では、一つの姿勢がつくられはじめた。それは、不動の信条となった。

たとえ、いち早く、化けの皮を見破ることができず、また取りかえしのつかないほど、ときが遅れてしまったとしても、私ははっきりと心の目を開き始めたのである。

ここは、人間の住む場所ではない。ここは、生き地獄である。どんな手段をとっても、ここから脱出せねばならない。私は、悲惨な状態に置かれた時、こうして始めて、真実を知ったのである。

冬は、うとましくなるほど、ながかった。しかし、刑罰の土地、北韓にも春はきた。青葉が芽をふき、ひばりは忘れていた歌をうたいはじめた。

私は、歯をくいしばって考えた。まず、この瞬間の苦境を切り抜けることが、現在においての最善の策である。

子供の時から、何かより高いものへのあこがれに充ちていた私は、その瞬間から、脱出を計画するようになった。失なわれた私自身を取り戻し、自分の幸福を追求するための脱出は、真実を求める心の命令であった。

私は、一個の成人として、あるいはどんなことでも自分でやらねばならない一人の人間として、忍耐と根気強さをもって、八方ふさがりにふさがった現実を、片づけていかねばならない年になったのである。

おそらく、その時期からではないだろうか。共産主義の目かくしの呪縛を解き放つ自分を感じた。最初のうちは、それを漠然と感じたのであるが、少しづつはっきりとさとるようになった。私は、勇気ある人間を、頭の中で思いえがいていた。

勇気ある人間――彼は、屈することを知らないばかりか、自分を主張しようとするために、数多くの試錬と苦しみを、堪え忍ばねばならない。しかし、彼は最後には、ほっする自由を、手に入れるのである。自由――多くを望もうとしているわけではない。最少限度の自由、人間の生存にとって無くてはならない最少限度の「生きる理由」、あるいは、よりよい理想を求める努力の形態、または現実に満足せず、常に反抗しつつ誠実な探求を怠らない姿勢――これは、あまりにも抽象的な言葉のように響くかも知れないが、抽象的な話でない一つの叫びが、私を拒む北韓カイライ集団の体制の方から、私の方に向かって、押し寄せてきた。

私は、二つの相異なる体制、すなわち北韓カイライ集団の社会が私に加えてくる圧迫と、それに反抗しつつ心の中で拡がる「人間の叫び」に、少しづつ目を開き始めたのである。

今や、私には、こわいものか無くなった。私は、切実な要求に忠実に従がい、もっと次元の高い自分をつくりあげ、こうして形成された自分自身の中に苦難に打ちかつ信念を育てはじめた。一つの信念をもって、世の中を生きるということは、信念なしに生きることよりも難しく、また苦しみをともなうことかも知れない。それでも、信念をもって生きねばならないということが、どんなに貴重なことであるかをさとったのである。

始めに、しっかりした信念を持たなかったためになめるのが、現在の悲惨であるならば、この悲惨が、もっと大きな明日の絶望となるのを防ぐためにも、信念は必要なのである。

苦しみは、すでに忍耐の限度をこえていたが、私は貴重な真実をさとったのである。こうして、冬が去り、春が訪れたときには、私の心の健康は、すでに回復していた。精神のしっかりしている人は、たとえどんな苦しみがやってきても、優に打ち勝つことが出来ると信じた。

私は、外へ出て、すでに禁治産宣告を受けたに等しい自分を、堂堂と主張してはばからない気持になった。働くクチを求めた。幸い、心のかよう同窓たちがいた。彼らは、私の立場を理解してくれた。彼らの斡旋と、私の根気でよい努力のおかげで、どうにか就職することが出来た。

一九五九年二月、私は、海州綜合機械工場の機械組立工（彼らの用語では完成工）になった。日当、一日に一円四十銭也。お休みの日は、日当を貰えないので、一ヵ月の給料になおすと、ざ

っと三十円ほどである。三十円は、男の靴下四足を買える程度の金額である。生活必需品で計算すると、闇米一斗程度にあたる。(北韓では、個人がお米を売ったり買ったりするのを禁止しているので、お米の値段は一定していない。これでもわかるように、北韓では、靴下のたぐいは、ぜいたく品の一つなのである。)

海州綜合機械工場は、東海州駅の向い側にあるが、従業員が約五百名、三千坪の敷地に建坪五百坪の、比較的規模の大きい工場である。

その工場には、旋盤部、操機部、鋳物部、製罐部、組立部の五班に組織されていた。私の属する組立部は、おもに機械の面倒をみるのが仕事で、工場の中でもいちばん陽のあたらない職責の場であった。

私は、就職すると熱心に働き始めた。就職するとき、成分をうまくいつわったので、いつそれがばれるかもしれないので仕事だけは一生懸命にしておきたかった。たとえそういう心配がないとしても、自分の仕事は、大事にするにこしたことはないと考えた。

北韓の技術労働はつらい。月給が少ないのはさておき、朝七時半に出勤して、約一時間を軍事訓練を受け、続いて「党の学習」をしなければならない。軍事訓練と「党の学習」は、勤務評定の対象になるので、おろそかにすることが出来ない。

彼らはなるほど一日八時間労働を原則にしている。しかし、「生産目標超過一三〇パーセント達成」「生産計画量達成」などのスローガンが矢つぎ早やに発表されるので、実際には十一時間労働になる。それればかりではない。ややもすると、夜間作業である。党と社会主義を鳴り物入りに囃し立て、「人民」の名をかりて、とても耐えることのできそうもないほどの作業を押しつけ、こき使う。

私は、歯をくいしばって、がんばった。

心に信念が生まれてからは、すべてに堪え、すべてを忍ぶことで、これを超越しょうという意志を持つようになった。仕事を熱心にすることで、その結果が私に有利に展開すれば、それを土台にして、次の段階への飛躍の手がかりにする。そして、万事がうまく運べば時を見はからして、大韓民国へ脱出する、これが私のスケジュールであった。北韓カイライ軍にいたときから、私は大韓民国がどういう国であるかを、誰よりもよくはっきりとつかんでいた。

ただ、現在の立場では、どうすることも出来ない。死なずに、生きるということだけで、せいいっぱいなのだ。

そうこうしているうちに、その年の四月、私は、中央党の地区本部に呼び出された。不吉な予感を抱いて、そこを訪れた。

党地区本部の責任者は、私を摑まえると、まず罵声から始めた。私は、ポカンとして聞いていることに決めた。私の反応が予想を裏切ると、その男は、さっそく、私の成分をあげつらい始めた。いつわっていた成分が、ばれたのであった。

責任者は部厚い書類をめぐりながら、相変らずはげしくまくし立てた。まず、私の祖父が、「地主階級」で、良民を搾取した「士族階級」だったと述べた。閔姓は、すべて李王朝末期の閔皇妃の親戚に当るから、元来「ブロジョア階級」だというのであった。

韓国へ行った親戚のことにもふれた。私たちが、いわゆる「反動の家族」だというのである。そして、介川炭鉱で「反動」の烙印を押され、ついに堪えきれず、自分の命を断った叔父のことにもふれた。そうしたのち、再び私たち一家の成分を検討した。私が、軍から「成分除隊」されたことも、もちろんその中には含まれていた。

私は、何もかも、すっかり諦めてしまった。きっと教化所（刑務所）に送られるだろう。おそらく、重刑に処されるだろう。無実の良民にも、無条件に罪名をおっかぶせる彼らではないか。私こそ、うまいぐあいに引っかかった、もってこいの、重犯罪人にちがいながった。

こう考えると、私はあきらめた者のみが持つ落着きとでもいおうか、かえって肚がすわった。

私に関する調査を、得意然とまくしたてたその男は、

『君は、もっともタチの悪い反動分子だ。最後に訊ねるが、なぜ事実を事実どおりに告白しないで、成分をいつわったのかね』

こう言ってから、私の口をじっと眺めた。

その瞬間、私はどういうふうに返事をしょうかと、迷ったすえ、すっと口を開いた。

『成分をいつわったのは、たしかに私の過ちであります。しかし、私は、国家と党のために、誠意の限り、一生懸命に働きたかったのです。成分が悪いというそれだけの理由で、国家と党に奉仕する機会を奪われてはいけないと思ったのです。何もはじめから、嘘の成分を申し立てるつもりではなかったのですが、本当を書くと、仕事をすることも出来ないかも知れないと、浅はかな考えにしばられ、つい嘘をついでしまったのです』

『君の返事は、なっていないし、どうも怪しい。国家と党は、成分の別なく、全国民に勤労の機会を与えている』

責任者は、私の誘導に、こうして引かかった。私は、心の中で溜飲をさげながら云ってやった。

『もっともです。国家と党は、国民を成分によって差別することはないと、私は信じています。私たちの基本法である憲法の中にも、そのことははっきりと示されています。私は、この若さをうんと働くことに捧げたかったので、つい成分をいつわる過失を犯してしまいました。』

これで、責任者も私の誘導に引っかかったことに気がつき、苦笑いをうかべた。いや、これは一人、その責任者だけの失態ではないだろう。

北韓カイライ集団の根本的な矛盾、根本的な自家撞着は、このように簡単な話を通じてでも、その正体をさらけ出す。共産主義の根本的な理論が、平等にあるとするならば、彼らは、その簡単な平等さえもふみにじってしまった。従って、彼らのやっていることは、共産主義でもなんでもない。それは、歴史上例を見ない虐政、この一言につきる。すなわち、次のように云うことが出来るのである。『共産主義者のもっとも重要な特徴は、その理論と実際が、必ず異なる形で現われる点にある』と。

まして、共産主義の理論にも、はかり知れない弱点があるにおいておや。

とつさのトン知で、どうにか危機を切り抜けたが、心配のタネが、すっかり無くなってしまったわけではなかった。すでに烙印をおされた、「要注意人物」になっていたので、眼の前は、いつも真暗闇であった。

しかし、彼らも、私が仕事には熱心であることを知っていた。そして、私が彼らによって、必要な人間であることも知っていた。組立工として、私はすでに必要な技術をすっかり身につけた、一人前の熟練工だったからである。

おそらく、私が教化所送りにならなかったのも、そのせいだろうと思う。

これだけで、すべてが終ったわけではなかった。また、試練がやってきた。彼らはお決まりの、そして悪意に満ちた手段である「自己批判」を、私にも強いたからである。

一九五九年四月二十日、ついに、私は「自己批判」を行なうことになった。それも、海州綜合機械工場の幹部だちの前で行なう「自己批判」ではなくて、五百名をこえる全従業員が集まった講堂で行なうことに決まった。彼らの用語を借りれば、「群衆をまえにしての自己批判」というやつである。

群衆の威力、これは彼らがよく利用する武器である。群衆は、煽動しやすく、感情の爆発が早いからである。熱狂党員数名が群衆の間にまぎれ込み、『やっつけろ!』の叫び声を五、六回上げれば、それでよいのである。群衆は、血を見た野獣のように興奮し始め、いっせいにわめき出すからである。

もちろん、このような群衆の生理を、心理的に分析すれば、そうならざるを得ない理由がちゃんとある。群衆を構成している個個人は、大きな不安感を抱いている。この不安感は、群衆一人一人の心の片隅に、いつかは自分もやられるかも知れないという恐れを植えつけている。

そういう時に、一つの身代り、一つの餌が投げられるわけである。「自己批判」を強いられて

いる哀れな人間が、すなわち、彼の身代りとなってくれる。はじめのうちは、自己批判犠牲者に同情する気持も動くが、それはすぐ無くなり、一種の憎しみと嫌悪感を抱くようになる。なぜかといえば、いつ自分も、あのように見るも哀れな格好で、立されるかも知れないので、ゆがめられたわが身の自画像に対する一種の自虐観念が生まれる。

人間には、誰にも、自己保存の本能がある。他人はどうなろうとも、自分は安全な所にいなければならないし、自分は幸せに包まれていなければならないという、本能がある。「自己批判」をさせられる人に対する複雑な感情は、さつそくこの自己保存の本能と打っつかり、火花を散らす。

そして、今度は安賭感を覚えるようになる。あんなみじめな状態に、現在の自分が立たされていない、ということから来る安賭感である。この安賭感は、そしてとても愉快な自己肯定になる。この自己肯定が、自己批判対象者から、完全に、自分を切り放してしまうのである。

いわば、「自己批判」対象者は、群衆一人一人の不安感を映した鏡であり、哀れな身代りの羊である。こういうとき、群衆は、一種の卑劣な、そして自分ではどうすることもできない怒りをおぼえる。

共産主義者は、この心理状態を利用して、群衆を煽動する。群衆は、弱弱しい羊の群れのよう

に、すぐ敏感な反応を現わす仕組みになっている。これは、現在の自分が、安全圏にいるという安賭感を、一層強く、確認するために、である。

この日、「自己批判」を受ける人は、私を入れて三名であった。

いちばん最初に批判される人は。四十過ぎの中老の旋盤工であった。

工場の党細胞委員長が、まず演壇に上り、その男の略歴と罪名を、一つ一つ読み上げた。

まず、その男は「南韓巨済島捕虜収容所」に収容されていたのち、北韓へ送還された人間であると、過去の経歴が暴露された。群衆は、好奇心にかられた。

続いて、党細胞委員長は、言葉するどく、その男に詰め寄る。

『なぜ、最後の瞬間まで戦かわずに、おめおめと捕虜などになったのか。それは、人民軍にとり、全世界的な屈辱である』

『あなたは、まさしく捕虜になることで、党を裏ぎる結果になったとは考えないのか』

党細胞委員長の口から、火のような非難攻撃の言葉が吐き出される。それは、一種の恐喝である。

まくたてられた旋盤工は、機先を制せられ、言葉に窮し、身の置き場もないほどうろたえるが、結局は『成程、たしかに自分は、党を裏ぎった』と認めた。

党細胞委員長は、わが意を得たりとばかり得意然となり、『しかし、それくらいのことは、人民の広い度量によって、大目に見てやることができなくもない』と、今度は手綱をゆるめた。それは、まるで大変な慈善を施こしてやるといったような態度である。実際、こんな雰囲気の中心は、それが大きな恩を蒙むることでもあるように錯覚させられるのである。

続いて委員長は、なぜ捕虜収容所では闘争を行なわなかったのかと、攻めたてた。党細胞委員長は、このくだりで「巨済島捕虜収容所」で共産党熱誠分子が行なった「闘争」のかずかずを、いちいちかぞえあげ、それがどんなに無慈悲な闘争であったかを群衆に向かって説明した。捕虜収容所で行なわれた、針をさしても血の出そうでない共産党こり固りの連中らの非人間的な「闘争」の過程は、群衆に一種の退廃的で自虐的な快感を与える。

この時分には、旋盤工は、もはや死人と同様になっている。細胞委員長は、そのときの報告書によれば、この旋盤工がアメリカ軍と通じた事実があると主張し始める。そして、とんでもない、デッチあげの報告書を読み上げる。群衆は、今聞いたばかりの無慈悲な闘争の話と、旋盤工の「反動的な行為」とを直線的に結びつけ、興奮し始める。

これに勢いを得た委員長は、いっそう声を張りあげ、

『同志が、アメリカ帝国主義のスパイであったか、なかったかを率直に白状せよ』と、冷たく

言い放つ。
旋盤工は、うろたえ、まごつき、
『ハイ、ハイ、とんでもねェ罪をおかしたです。あっしは、アメリカのスパイだったでがす』
と答えた。
哀れにも、周章狼狽のあまり、あれよあれよと思う間もなく自分の口で大それたことを認めてしまった旋盤工は、その結果が何を意味するかに気がついた瞬間、その場にぶっ倒れてしまった。
しかし、卒倒した人間を、そのまゝ放っておくほど、好意に満ちた雰囲気であるはずがない。冷い水を頭にかけられた旋盤工は再びわれにかえった。
今度は、スパイ行為をどんな具合いにしたかをくわしく説明せよと、追い打ちをかけられた。旋盤工は、返事に窮した。実際に、スパイ行為をやっていないのだから、返事に困るのは、当りまえである。
従がって、この瞬間から、委員長の一人舞台が幕をあけた。君は、こうこういうふうにしてスパイをやっただろうと問いつめると、旋盤工は、はい、たしかにそうでがす、そういうふうにやりましたと、録音機のようにくりかえした。
今度は、北韓に帰って来てから、どういう方法で、スパイ行為を行なったかと訊ねた。訊ねる

のではなくて、威力をもって強迫し、こっぴどくやっつけてやるのに似ていた。
やっと、旋盤工の自己批判に対して、結論を下す段階になった。ここで、自己批判をさせる目的が、果してどこにあったかがわかる。
もし、委員長が『誰それは、到底見のがしてやるわけにはいかない。人民の名において、追放せねばならない』と云えば、刑務所行きか、炭鉱送りに決まっている。
しかし、この年取った旋盤工に対しては、そんなことは云わなかった。
『寛大な人民と党は、これ以上、あなたの過去をとがめないだろう。あなたは、自分の行ないが悪いことだったと気づき、悔い改めようとしているのか』
委員長はこのように訊ねた。
旋盤工は、気もそぞろな中でも、ようやくわれを取り戻し、『まったく、自分は悪いやつで、その罪は百ぺん死んでもつぐわれない』と告白した。
委員長は、わが意を得たとばかり、慈悲ぶかそうな微笑をうかべた。そして、最後に、次のような宣告を下した。
『あなたが、これから怠業をこととするか、どうかを私たちは監視するだろう。人民と党は、あなたの過去を一旦は赦すが、これからあなたがどのような態度に出るかを、断えず見はって

いる』
こうして、旋盤工の自己批判は終った。
次は、私の番である。私は、ここで私の「自己批判」の場面を書く気にならない。とても、そんな勇気がない。それを、ありのままに述べるには、まだ私に残されている屈辱感が余りにも大きいのだ。
私が属している組立部の班長は、当時の年にして、三十をこえたばかりの、宋希南という男であった。彼は、昔の物語りに出て来る豪傑のような大男であった。鼻が大きく、目つきがぎょろりとしていたので、見た目には、とても恐い人のようであったが、つきあって見ると、心のやさしい善良そのものの人物であった。
大へんな力持ちだったので、辛い仕事は自分の受け持ちのように片づけ、また仕事そのものにも熱意をこめてやった。
彼は、もともと載寧食糧工場の機械工であったが、熱心に働くことと、能率をあげたことを認められ、工場の上申によって、道(県)の表彰状を受け取ったほどである。
それで栄転し、私たちの工場の作業班長に任命されてきた。私は、その下で働くようになったおかげで、彼とは随分親しくなった。好人物の彼は、私の言うことを全部認めてくれたし、機械

のこともこまかく教えてくれた。

宋希南は、私が就職してから、いくらもたたないで、結婚した。結婚式には、私も参席した。（北韓の結婚式の模様については、くわしく書く余裕がない。ただ、一つだけ云いたいことは、結婚式では花婿花嫁の間のプレゼント交換などはない。わずかに、食糧切符を数枚よけいに貰えることで満足せねばならない。）私は、宋希南の新婚家庭にも、数回訪れたことがある。

宋希南は、工場の中でも、人気者であった。仕事熱心で、好人物で、大した欠点もない人物であったが、ただ一つ、悲しいかな彼は非党員であった。

ある日のこと、作業の真っ最中であったが、グリーンの幌をかぶせた「カス六九型」ソ連製ジープが、作業場の前にとまった。皆が、ドキンとして、いっそう熱心に働くようなふりをしながら、それとなく見ていた。「安全員」（警察）二名が、武装して作業場に入って来た。

彼らは、一言も云わないで、宋希南に手錠をかけ、外へ連れ出すと、ジープに乗せた。私たちは、あっけに取られたまま、ホコリの中に消え去る自動車の後姿をしばらく見守ったものである。

その後は、再び、宋希南の姿を見ることが出来なかった。

宋希南が、なぜ、どのような過失から、あんな目にあったかを知っている人は、一人もいなか

った。

正体をつかめない、墨のような恐怖の雲が、雰囲気を包んでいるだけだった。

それから、約一ヵ月ばかりして、ある群衆大会で、次のような短かい発表が行なわれた。

『元来、宋希南は資産階級の生まれで、とんでもないことを考えていた。彼は、党に不満を抱き、南韓へ逃げようとした。本名は、宋達宝であるが、南を希望する気持から、宋希南に名前を変えるほどの、最も悪質な反動分子であった。』

これだけであった。しかし、この報告書なるもの自体が、無責任きわまるものではないか。「反動」とか、「南韓へ逃げようとした」などといった修飾語は、彼らが無実の人に罰をかぶせるためにいつも使う単語である。宋希南が処罰されねばならなかった具体的な犯罪内容については、一言も触れていないではないか。

これがどういう意味を持っているかといえば、宋希南ははっきりした犯罪事実があって逮捕されたのではないのである。罪があったならば、鳴物入りに発表したことだろう。

その後、宋希南の夫人に会い、彼のニュースを聞くことができた。

性が李氏であるその夫人は、背がすらりとして、二重瞼の魅力的な女性だった。私が会ったときは、愁いに包まれていて、わっとせきを切ったように泣き始めた。

宋希南の財産は、すでに没収されていた。家も取り上げられたので、夫人は親戚のところに身を寄せていた。

夫人も、自分の夫が一体、なんの罪で逮捕されたのかを知っていなかった。彼女は泣きながら

『離婚せよと云われたのですよ』

と言った。

面会のため、「安全部」(警察署)に行くと、面会はさせてくれないで、彼らが云う話がせいぜい、離婚の勧告だったそうである。宋希南は、悪質な反動分子であるから、あなたのような女性(彼女は成分が立派で、実家の父は党員であった)が、彼の妻になっているのは恥であると。

彼女が、その言葉をおとなしく聞き入れようとしなかったら、今度は半ば強迫的な口調で、詰めよられた。あなたが、離婚をしないということは、宋希南の反動思想に同調しているいうことと、何の違いがあるかと言われた。

受刑者の離婚手続は、すこぶる簡単にできている。離婚の意思表示さえすれば、受刑中の夫の意思は全く無視されたまま、離婚が成立するのである。こゝで受刑者は、人格を持つ、人間としての待遇を受けられないわけである。

私は、慰めの言葉に窮した。それでも彼女は、誰かにこんな辛いことを訴えることかできるだ

けでも心が安まると、私をつかまえて喜ぶのだった。彼女は、どんなことがあっても、あの人とは離婚しないつもりだと、私の前で誓うのだった。あの人が、懲役をすませてから出て来る時まで待つつもりだと言った。どんな罪なのかは知らないが、もし懲役に処せられるならば――。

それから二年ほどして、彼女をもう一度海州駅前で会った。軍隊に出ている妹に面会するため、汽車に乗ろうとしていた。私は、再び宋希南の消息を訊ねた。

彼女は、今度も涙をうかべながら、自分もわからないと答えた。面会はさせてくれなくても、熱心に安全部通いをつづけたが、夫が逮捕されてから二カ月後には、すでに「安全部」に居ないことがはっきりしてきたというのである。

裁判を受けたのか、殺されたのか、それともどこかの流刑地に流されたのか、皆目わからないというのだった。

私は、太っ腹でいつもよく笑った宋希南を頭の中で思いえがき、もし生きていれば幸せにいてほしいと、心の中で祈った。

私は、夫人に再婚したのかと訊ねてみた。

彼女は、あいまいな微笑をうかべて答えた。

『あの人を、なんのアテもなしにこれ以上待つのも苦しいことですけれども、だからといって、

さっそく再婚してしまう気にはとてもなれませんわ』

彼女の実家では、両親がとてもうるさく再婚をすすめるそうであった。それもそのはずである。彼女が再婚を拒みつづけると、実家全体が反動扱いを受けかねないからである。それは、生死にかかわる深刻な問題である。

私たちは、海州駅で別れた。私がその後、宋希南に関する話を聞いたのは、脱出直前のことである。偶然、新義州で、同じ工場で働いていた人に会った。

彼女は、実家のさいそくに居たたまらず再婚をした。宋希南の生死のほどは、まだ誰も知らなかったが、彼を逮捕させた男の名前は、明るみに出た。

その男は、宋希南が載寧食品工場にいた時の同僚で、いつも宋希南をねたんだ奴だったというのである。

これが、宋希南とその妻に関して、耳にした全てである。その後のことは知らない。

北韓の職場生活はつらい。生活は最低で労働は日ましに苦しくなる。

北韓カイライ集団当局は、手段と方法をえらばず、労働者を牛馬のように酷き使うことばかり考えている。やれ何の計画だ、やれ何の運動だ、やれ何の超過達成事業だと、さまざまな口実と名目をかりて、アブラを搾り取る。

一例をあげてみよう。「八・一五解放記念日」を迎えた。この日は公休日になっているが、それは名ばかりである。『八・一五解放記念日を迎え、日本帝国主義と闘かった独立闘士を思い出そう』とわめき立てる。あらためて、金日成の名を引っぱり出し、彼が＜「八・一五の解放者」＞だと根も葉もないスローガンをかかげ、仕事場へ追いまくる。当時の独立闘士に比べて、今の私たちはどんなにぜいたくに暮し、そしてなんとひどい怠け者になってしまったことだとなげく。

群衆大会を開き、＜「八・一五特別作業」＞を果敢に遂行しようと呼びかけ、嘆願書を受け取る。いわば、全労働者が志願して「八・一五特別作業」を達成することにしたという形式を取り、思いきってこき使うわけだ。

ヴェトナムの事態が悪化した。ヴェトコンを支持しようとわめき立てる。北韓カイライ集団は、ヴェトコンを援助するために、ヴェトナムへ行こうと煽動する。皆が、どうすることもできずに、志願書を差し出す。ヴェトコンを援助するために、ヴェトナムへ行かせてほしいという志願書である。

工場では、ヴェトコン作業班というのが生まれる。しかし、実際にはヴェトコン作業班には、一名の人員も配置されない。その秘密はこうである。五つの作業班があったとすれば、六つの作業班が行なう分量の仕事をやらされる。これが、ヴェトコン作業班である。

悪知恵のかぎりをつくして、最後のアブラを最後の一滴まで搾り上げる仕組みになっている。
この苦痛を耐える術が、どこにあるだろうか。
そんな職場生活にもピリオドを打つ時が来た。苦しい目にはあったけれども、都会の生活はそれでも農村生活よりは、ましであった。私の都会生活が幕をおろす時が来た。それは、ある朝突然、寝耳に水のようにやって来た。寝耳の水にしては、あまりにも冷たい水であった。

7、「赤い都市」

その日の朝も、いつもと変らず、朝食をすませた。私は私で、父は父で、それぞれの職場へ出かけた。

忘れもしない一九五九年十月二十九日のことである。

父は、出勤するやいなや、事業所の党委員会に呼び出された。こんなことは、始めての経験なので、父はとても緊張した。ともかく、逃げ隠れすることはできないので、出頭した。

それと全く同じことが、私の方でもあった。私も工場につくと、工場の党委員会へ出頭を命ぜられた。（北韓カイライ集団では、各職場単位に、党委員会が組織されている）

同じことは、家でも行なわれていた。父と私が、出勤したのち、しばらくしてから、「安全員」二名がやって来た。

殆んど同時刻に、家族の者全部が、それぞれ異った場所で受けた命令は、一つであった。

『内閣の決定によって、海州市を「赤い都市」とすることにした。同志とその家族は、党の命令により、海州市から退去せねばならない。明日中の立ち退きのために、家に帰って引っ越荷物の準備をせよ。』

父も、私も、そして家でも、始めのうちは、これが一体どんなことを言うのか、見当さえもつかなかった。

海州市を「赤い都市」にするという「内閣」の決定もさることながら、なぜ、私たちに海州市からの立ち退きを迫るのか、すぐに納得することができなかった。

しかし、私たちはしばらくしてから、ふりかかった事態を十分に理解した。事情が一夜にして激変したのである。それは、まるで雷が落ちたようなものであった。

海州市を「赤い都市」にすることにしたという、「内閣の決定」とはどういうことなのか。

それはいわば私たちの一家のような、成分のよくない家族を、都市から農村へ追放するようカイライ集団の計画を、裏返しにしたものにほかならなかった。

無条件追放では、どうしても名分がなさすぎる。そこでずるくもかかげた看板が「赤い都市」である。それがすなわち、海州市を「赤い都市」にする「内閣の決定」だったのである。

北韓カイライ集団は、海州市が由緒ぶかい「共産主義の都市」であると、とたんに讃えはじめ

た。日本帝国主義時代には、「反日の根拠地」であったとこじつけて、歴史をデッチあげ、解放後は、殆んど自発的に「もっとも熱心に共産主義運動を展開した都市」であると解説した。そして、六・二五戦争中には、「反動分子を大量に摘発した都市」であり、戦後には「社会主義路線を忠実に進んでいる都市」だと、口を極めてほめそやした。

こんなに由緒ぶかい海州市に対して、カイライ集団当局はとくに、「赤い都市」という名誉ある称号を与えることにしたと宣伝した。これは、唯海州市のほまれであるばかりでなく、共産主義の全ての都市がうらやんで止まず、そのあとに続くべき称号であるとつけ加えることも忘れなかった。

だから、海州市は浄化の必要がある。反動分子を追放せよ。

こうして、私の一家は不純な反動家族として、引っ越さねばならない羽目となった。まず、家族全員の「公民証」が「安全員」に回収された。こうして、海州市で受けていた全ての職位を自動的に奪われた。父が失業したのはもちろん、私も自動的に職を召しあげられた。

私たちが家に集まったのは、九時少しまえである。わずか一時間足らずの間に、世の中がひっくりかえってしまった。涙ながらに、わが身の運命を歎く余裕などはなかった。すぐ明日にでも引っ越しをせねばならない。荷づくりもしなければならない。整理したい事は山ほどあった。

私たちは、さっそく仕事に取りかかった。

町には、早くもビラが張り出された。海州市が「赤い都市」になったことは、彼らにとってはまことに歓迎すべきニュースに違いなかった。

それと同時に、一千四百世帯が農村へ強制移住させられるという噂が、パッとひろがった。ビラには、もちろんそういうことが書かれているはずはない。

午後には、いち早く、「安全員」が私たちの家に配置された。「安全員」は、荷づくりを、そばでいちいち監視した。もはや、一人前の人間扱いではない。

些細なことにも言いがかりをつけ、怒鳴りつけては、荷づくりさえもろくにできないようにしむけるのだった。すぐ必要な着物類とフトン包み、それに少しばかりの醤油と味噌だけ持って行けと言われた。それ以上は、荷づくりを差し止められた。

すでに、一度故郷の信川から強制移住の体験をなめた私たちではあったが、彼らは強制移住者には荷物も制限する。理由は簡単である。「反動分子」は荷物が少なければ少ないほどよいということである。

こうして残された家財道具は、まるで差押のように没収となる。家はもちろん没収だ。家に対する適当な補償を貰うことなどは、想像することさえも出来ない。

『それで、一体どこへ行くのか、行き先ぐらいはおっしゃていただけませんか』

行き先さえも教えてくれないので、気持は不安と焦慮にかられる。居たたまらなくなった母が、

「安全員」になん回も訊ねた。

『教えてはならないことになっているんだ』

『行き先も知らなくては、荷物が送れませんよ』

『荷物は明日送ることになっている。明日になればわかることだね』

『まあまあ、そうおっしゃらないで、お願いです。云って下さいよ』

『そうだな、同志たちは信川へ行かされることになっているよ』

『信川ですって？』

そこは、故郷ではないか。これはまた、なんと皮肉な運命のいたずらだろう。

故郷から追い立てをくって出て来た人たち。

その人たちが、今度はまた追放されて、故郷へ帰ることになったのである。

私は、はじめのうちは、運命のめぐり合わせにあきれ、げらげらと笑った。一度は追い出され、今度はまた追われてふるさとへ帰るのか。しかし、故郷をなつかしむ感情は、いささかも湧かなかった。信川、その名を聞いただけでも、身ぶるいをおぼえ、かたきが住む土地のように響

くのだった。

もちろん、苦しい目に会った時や、つらい羽目に立たされた時は、はるかに故郷のことが思い起されたものである。故郷で、なんの心配も不幸もなく、楽しく暮していた遠い昔のことが思い起されたりしたものである。

しかし、これから追われて入る故郷は、昔の故郷ではない。見たことも聞いたこともない土地よりも、いっそうひどい故郷だ。そこには、移住を強要されて海州へ来た時に受けた、屈辱とはくらべものにならない、差別と迫害が待っていることだろう。

昔の知り合いと、記憶に残る土地が、千金の重みをもって、私たちの心を抑へつけることだろう。そのような魔の巣窟と化したわが故郷へ、追われて帰る身となったのである。

その夜は、一睡もしないで明かした。心のゆとりがあるはずもなく、親しくしていた人達に、最後の別れを惜しむ気持の余裕などがあるはずもなかった。

訪ねてくれる人もいなかった。同情してくれる人もいなかった。とくに親しくつき合っていた人も、遠くの方から私たちの家をそれとなく眺めるのが、せいいっぱいの餞別で、「安全員」の姿がちらついていると、顔をしかめて素早く姿をくらましてしまうのだった。

海州の最後の夜は、あまりにも物悲しかった。無言の父は、つとめて涙をこらえていた。いっそのこと酒でもあればと思ったが、酒なども個人がほしい時に自由に買える所ではなかったし、たとえ買えたにしても、「安全員」がそれを許してくれるはずがなかった。

幼ない弟たちはわけも知らずに、引っ越しが楽しいのかむやみにはしゃぎ立てていたが、母と妹がひっそりと涙にくれているのを見て、とたんに大声で泣き出す始末であった。早くも冬が目の前に来ていた。秋の間、あんなに美しく鳴いていたコオロギの歌声も聞かれなくなり、冷たい風がわが世の春を誇るかのようにシンとした夜のしじまをひっかきまわしていた。

考えれば考えるほど、前途は真暗闇であった。そして、北韓カイライ集団の政治のやり方に、憎しみがたぎった。たとえ、いくら政策的に行なうこととはいえ、今朝、やぶから棒に強制移住命令を出したかと思うと、明日中に立ち退けとは、これは人間なみの心を持った人であれば、とても真似の出来るしわざではない。

ながい夜が明けた。そそくさと朝食をすまし、安全員にせきたてられ、荷物を貨車便で送るために、海州駅へ行った。

海州駅は、修羅場と化していた。一千四百世帯、これだけの大人数がいっぴんに荷物を送ろうとひしめあっているのだから、大変な騒ぎであった。海州駅の貨物取扱所は、露店ばたのように

騒ぞうしく、罵声と怒鳴り声が乱れ飛んでいた。

私たちは、三時間もかかって、やっと荷物を送ることが出来た。荷札には、「信川駅止め」と書いた。

家に帰って来たが、何もすることがなかった。刑務所の中にでも居るような気持になった。「安全員」と「監視員」(これは、ご丁寧にも職場から派遣されてきた)が、歩哨に立っていた。出発さえすればよいようになった。いっそのこと、早く立たせてほしかった。

私は、いっそう強く、早く行ってしまいたい気持に駆られた。もはや海州市を見るのもいやになったし、これ以上悪くはなりようがないという気持から、肚もすわってきたからである。君たちがやりたいことは、どうぞ思う存分お気に召すままにやって見よ。しかし、私は、挫けないだろう。こんな度胸が腹の底から湧いてきた。

私の友人の中には、党員も多いし、成分の立派な人も少なくなかった。だが、その日からは、彼らが友人だとは考えられなくなった。何かが、彼らと私の間を裂く物がある。私は、力づくで分離させられているものに合わせて、私自身を改造せねばならない運命にあったのである。

それでも、勇気だけは失なわなかった。それどころかかえって、逆境にあると思ったので、勇気をふるい起こした。自分を見失わず、信念と意思の力さえしっかりと持っていさえすれば、た

とえどのような迫害、どのような環境に落ちても、これに打ち克つ自信が、若い私にはあった。私は内心、こんな小手細工の政策を弄する、北韓カイライ集団指導部に向かって、冷たい嘲笑を送ってやった。

北韓カイライ集団は、「階級」の間に、厳格な線を引いている。前科者や反共思想の持主と考えられる人（いわゆる、最低の賤民階級にならねばならない部類の人たちである）は、阿吾地などの炭鉱へ送り込んだ。

もちろん、炭鉱に引っぱって行かれる人の中には、高位幹部の権力争いに敗れた者もいれば、学者、薬術家、文人などもまじっていた。

その次のクラスとしては、少しでも成分がよくないように見えるか、少しでも疑がわしく思われる人たちがあるが、全部、農村へ逐い出してしまう。

これは、戦後の社会で、独裁体制を固めるためであった。一人一人の人間から、人格と個性と、そして生命の尊厳さを取り除いた残りの部分だけを、彼らの体制にしばりつけておくための策略なのである。

こうすることで大きくみると、「四つの階級」に分かれる中世紀的な封建社会をつくり出すつもりなのかも知れよい。いや、それは古代印度の「四カースト」に似たものなのかも知れない。

このような「現代版封建主義社会」における第一階級は、党員証を持っている階級だ。党員の数は、ざっと百三十万名に上り、人口の約十分の一くらいである。

その次の階級が、都市居住者である。

この次が、農村で協同農場（当時は農業協同組合）の組織に組み込まれた人たちである。そして、最後の階級が、炭鉱や流刑地で生存している人たちである。

「四つの階級」は、お互いに厳しく分けておく必要がある。そうすることではじめて思う存分、独裁をふるうことができるし、「封建社会」を建設することができるからである。

＜「赤い都市」＞などと言いながら、私たちを追い出すのは、この点を、独裁君主である金日成がさとったからである。「ふとった王様」の金日成は、いつ、どこで王位を追われ、簒奪されるかも知れないので、恐怖のあまり自暴自棄に落ち入り、現代版の士族平民制度を設けたに違いない。各階級を厳格に区別し、お互いにおかさないように壁を築いておけば、ある程度は枕を高くして寝ることができるだろう。

私の一家は、その日の夕方、海州駅へ出た。海州駅は、阿鼻叫喚の修羅場、と化していた。強制移住者を運ぶために、列車が総動員されていた。そのために、ほかの輸送業務はすべて中断される有様であった。

ところが、一千四百世帯の人数は決して少ないかずではない。もともと汽車の事情はよくなかった。それに、突然、こんな騒ぎを引き起こしたのだから、前もって計画などをたてておくはずがなかった。

たとえどんなに手あたり次第に詰め込んでも、客車の数はどうしても足らなかった。

信川へ行く人たちだけが、一ヵ所に集まった。六時ごろ出発すると云われた。

私たちは、すっかりつかれてしまい、足を投げ出して坐った。六時になったが、汽車は出なかった。待ちに待った末、翌朝の午前四時に、ようやく汽車に乗ることができた。汽車の中でまた待つこと数時間、こうしてやっと出発した。

人間をまるで貨物のように詰め込んだのであるから、身動きさえも自由にできない。北韓カイライ集団の汽車は、ソ連から輸入した、いわゆる「クーペ車」と呼ばれる代物であるが、椅子ごとに囲いができている。窓は窓で、厚い二重ガラスになっているので、思うように開けたり閉めたりすることもできない。寒い国の気候条件に合わせてつくった客車を、こちらの事情に合うように改造もしないで走らせるのだから、夏の客車内の暑苦しさは何とも表現のしようがない。

それに、いつも超満員になるのが北韓の輸送事情だ。そんなところへ、部屋のように囲いのできている客車は、とても不便である。五名が坐ればちょうどよさそうな場所に、二十名ないしは

三十名がギュウギュウと押し込まれたのだから、とても立ったり坐ったりする余裕などありようがない。

それだけではない。女は涙をしぼり、子供は暑苦しいようで、火がついたように泣き通しである。

「安全員」と「監視員」は、断えずわめき散らし怒鳴りつける。そもそもろくでなしのなっていない奴らだけの集まりだから、しようがないといったふうの、憎しみとあわれみのこもった非難をあびせる。

中では、たまに顔見知りにも会うが、親しみのこもったあいさつどころの騒ぎではない。二言三言、どこへ行かされるのかを訊合うのが、せいいっぱいである。

信川へ、安岳へ、銀律へ、松花へ……。彼らは、まるでさすらいの旅に立つようなものであった。胸いっぱいに、言葉では云い現わせない悲しみを抱いて。

汽車は、九時ちょっと過ぎに、沙里院のホームに入った。信川方面の人人は、ここで汽車を乗りかえねばならない。

私たちが、息がつまりそうな客車からようやく解放され、出札口の外へ出た。待合室の壁にはダルマのようにまるまると肥えふとった、金日成の大きな肖像画が、微笑をうかべて、まるで私

たちを嘲け笑うかのようにかかっていた。ところせましと張りつけてある宣伝ポスターとスローガン、このすべてが私たちとはまったく無縁の、ちょうど外国に来て見る珍しい奇妙な風物のようにうつるのだった。

すでに数日間も思うように寝ていない上に、ひと晩中超満員の汽車の中でもまれつづけたので、疲かれと睡眠不足が重なり、おなかはひもじさをこえて、痛みさえもおぼえて来るのだった。すぐにでも、ご飯を食べたかった。

しかし、大して慈悲ぶかい人人とはいわれないその連中らは、被追放家族にたったの一枚の「糧券」(食券)さえも渡してくれなかった。ご飯を食べることもできない。

北韓では、糧券がいちばん貴重な、生活必需品である。これについて、少し説明を加えた方が、読者の理解を助けるだろう。食糧事情がひどく悪化したので、北韓カイライ集団は奇想天外な制度を発明した。その一つが、各職場でくれる食糧配給表であり、糧券なのである。食糧配給表が無ければ、穀物を手に入れることができない。北韓では、自由売買は行なわれていない。全てがいわゆる「国家の配給制」になっている。もちろん、農村の集団農場では食糧配給表の代わりに、現物の分配を受けるようになっているが、まさにこのような都市と農村の食糧制度の違いのために、農村の人は都会へ進出できないのである。これについては、また次に述べるだろう。

いわゆる糧券制度というのはこうである。旅行をするとか、外地生活をするとかの特殊な事情のために、家で食事をしなくなった場合、韓国では食堂でお金を出して買って食べればすむことであるが、北韓ではこの糧券というやつが無くてはならないのである。北韓では個人経営の食堂がない。全てが、いわゆる「国営事業」の一つである。だから、必ずこの糧券を差し出し、五十銭ないしは一円近くのおかず代を払わないと、食事にありつけないのである。

糧券の発給所は、北韓カイライ集団当局で、それを手に入れることは容易なことでない。糧券一枚一枚の価値は、殆んど現金のそれに匹敵する。糧券さえあれば、まるで宝物の山の中に坐っているような気持になる。

この糧券は、男女の交際でも無くてはならないものである。往来で好きな女性に、

『今、糧券を持っているが、海州第三国営食堂に行って食事でもしませんか』

とさそえば、彼女は忽ち喜んでデートに応ずる。そんな代物を自由世界では想像できないだろう。

糧券には、種類が二つある。上級品は、もちろん白米の糧券である。真白なお米のご飯が出るが、これを持つ人は党の要人で、いわば一等席の汽車に乗る人たちである。その次がお米と雑穀を半分ずつ混じった下級の糧券だ。

糧券の絶対量は、いつも足らない。郡の党委員会や市の党委員会は、この糧券のことで再三、頭を痛める。今すぐにでも必要なのに、手元にはいつも糧券がないからである。それで、中央に糧券送れの電話をかける、無電をとばす、電報を打つの大騒ぎを演じて、糧券を早く送れと催促する。一方、中央は中央で、こちらも糧券を充分に持ち合せていないので、かえって青筋をたて、受話器に向かって下級機関をガンガンに怒鳴りつけたりする。

北韓では、お金はむしろ、第二次的な価値しか持っていない。現金が必要な場合が、制限されているからだ。この糧券こそ、千金の威力を持つ現金にひとしい。人間が生きるためには食べねばならないという法則に修正でも加えられない限り、糧券の威力は消え去らないだろう。私は、こちらに来て、「パンのみにては生きるにあらず」という小説を読んだが、これは少くとも北韓の実情を基準にして考えると、とてつもない感傷論だ。北韓では、「糧券さえあれば生きることができる」のである。

話が横道にそれだが、私たちの九人家族は、空っ腹をかかえて、沙里院駅の待合室に立っていた。それは、あまりにも悲惨である。

荷づくりやその他に追いまくられて、手軽い弁当のようなものを準備することさえもできなかった。大人の父と母、それに私は、がまんのしようもあったが、まず十才にもなっていない弟だ

ちが、空腹を訴えるのには参った。

私は、駅を出て、一面識でもある人の家を探しまわった。手当りしだいに訪ね回った末、ようやくあいさつ程度は交わす間柄の知合い一人に合い、乞食をする思いで、握り飯いくつかを貰った。それを貰っても、知人の温情に感謝する気持よりも先に、かえって済まない気持の方が強かった。私たちのために、いくらかのお米を消費したその家族の誰かは、食事を抜かさねばならないからである。

それで、どうにか飢えをしのいだ私たちは、汽車の来るのを待った。汽車は、正午近くになって、ようやく入って来た。

その汽車が、まだ大変なのろんぼであった。沙里院から信川までは、わずか八里（約三十二キロ）の距離に過ぎないのに、実に四時間もかかった。

午後四時ちょっと過ぎに、信川駅に着き、汽車から降りた。なつかしい風景。山や河や家が現われるごとに、私たちの心臓は縮みあがり、気が気でなくなった。

郷里の土地をふむ思いは、重苦しく暗かった。一歩一歩が、まるで泥沼の中を歩いているような気がした。駅を出ると、すぐ前に、「社会安全部」（警察署）の建物が立っていた。「安全員」が、偉らそうに威張りながら、三十余世帯の追放者家族を、まるで荷物でも扱うような態度で、そこ

まで護送した。
私たちは、昔の知合いに合うのではないかと、ハラハラした。幸い、誰にも見つからなかった。それだけでも、助かる思いであった。
私たちは、まるで乞食のようにみじめな思いで、うちしおれ、しょんぼりと「安全部」庁舎の前に、行列をつくって立った。しばらくすると私服の「安全員」が現われ、聞くに堪えない侮辱的な言葉で、あざけり、罵しった。
私たちは、行列をつくり、順番に世帯主の名を登録した。それを持って、「安全員」は建物の中へ消えた。それから、また大分待たされてから、世帯主の名前が、一人一人読み上げられた。呼ばれた人は、中へ入り、配置されることになった里と所属される協同農場の名前を教わって、出て来た。
十一月一日、冬は忙ぎ足でやってきたことを自慢でもしたい気持なのか、風が冷気を含み、肌をさした。枯っ風である。寒かった。空腹がいっそうこだえた。西空に没し去ろうとする太陽の最後の光を惜しみながら、私たちはしゃみ込んで待ち続けた。
思い出したように、気にかかることが波のように押し寄せた。なによりもまず、昔住んでいた村へ行かされるかも知れないのが、大きな心配のタネであった。ことがひよんな具合いに運び、

昔住んでいた故郷のその村にやらされた時は、その憎しみと屈辱をどのように堪えていけばよいのだろうか。

北韓カイライ集団は、その当時行政区域を変えていた。郡単位の下にあった面単位を無くしてしまった。郡単位の下には、すぐ里があるようにできていた。だから、里は、以前の面よりは小さくても、里よりは大きくなっている。こうすることで、命令の伝達速度を早め、搾取の系統をもっと能率化したわけである。

ようやく、私たちの番になり、父が「安全部」の中に呼ばれて行った。しばらくして出て来た父の顔色に、元気がなかった。私たちは、信川郡月成里へ行くことになったそうである。信川郡月成里といえば、そこは昔私たちの住んでいた加蓮面四見里のすぐうしろ側の村ではないか。

距離にして、わずか三キロほども離れているだろうか。運命の女神が意地悪く笑いころげる声が、まるで聞こえて来るような気さえした。

万事休す。昔の知り合い、どれだけ残されているかは知らないが、彼らが私たちに「うしろ指」をさし、あざけり、唾をかけ、笑うさまが目に見えるようであった。明日からでも、このような事態が、現実となって現われるに違いない。

夜になったが、私たちはしやがんだままはてしなく待たされた。
協同農場から、人が来ることになっているそうである。その案内員が現われたのは、夜九時近くなってからである。
案内員は、私たちの哀れな姿に、さらに視線を走らせただけで、一言も云わずに、肩をそびやかすと、いっしょについて来るようにと合図をした。
月成里に配置されたのは、全部で六世帯であった。頭に荷物をのせ、背に子供をおんぶした人間の物悲しい隊列が、冷たい野道をとぼとぼと進みはじめた。
秋の刈り入れをおえた畦道は、雨が降ったせいか、よく滑った。うの道がうねうねと折れ曲がり、はてしなくつづいていた。殆んど一時間歩いてから、やっとしばらく休むことができた。
私たちは、月成里協同農場について、あれこれと案内員に訊ねて見た。よかれ悪しかれ、これから、そこで暮す運命なのだから、早く知りたいことは山ほどあった。
その時になって、案内員ははじめて、自分の職位を明らかにした。自分が信川郡月成里協同管理委員会の副委員長であると答えた。
返事はそれだけであった。相手はまた口を閉ざし、先頭に立って、黙もくと歩く。
祖母がよろめく、祖母に両親と私、それに妹二人、弟三名を入れて、家族は全部で九名であ

る。いちばん年下の弟は五才になったばかりで、父と弟が交代交代におんぶした。

信川邑から月成里までの距離は、わずか一里半（約六キロ）に過ぎなかったが、そこまで歩くのに相当の時間がかかった。到着した時は、もはや夜半であった。

ほかの人たちはいざ知らず、私たちはその道、その山を余りにもよく知っていた。昔、故郷に住んでいた時、しょっちゅう歩いたところである。しかし、月成里の模様は、昔とまったく違っていだ。協同農場の建物が新しく建ったからである。

私たちは、協同農場の宣伝室（講堂）に収容された。大根のおつゆにご飯をまぜて、おそい夕食をそそくさと取った。子供たちは疲れきって、早くもあちらこちらにころがって、イビキをかきはじめた。

しばらくして、党委員会から来たという男が、ひとくさりしかつめらしい演説をおえると、姿を消した。その日の晩も、一睡もし得なかった。

8、「北極星協同農場」

あたりがまだ暗いうちに、鍾の音がはげしく鳴りひびいた。大砲の弾皮でつくったのか、鍾の音はにぶかった。私たちは、いっせいに起きあがった。真夜中と変りなかったが、再び仕事を始めねばならない朝がやって来たのだ。

電灯もランプもない。(北韓の農村には、全部電気が入っているだろう、と想像するこちらの人々の態度に、私は苦笑を禁ずることができない。南韓の人々は、少くとも発電量においては、北韓が十分にこれを消費していると考えがちである。ところが、実情はその反対である。水豊ダムの出力の半分は、中共に持って行かれる。

都市においてさえも、昼はもちろん、夜も電気の使用を制限しているありさまだ。昼間に電気を使っているところを見つけると。電球を取り上げ、「人民班会議」で「自己批判」をさせる。電球は全部、百二十燭におさえられている。百二十燭以上の電球はごく限られた量しか生産しな

いが、それもいはゆる「国家の配給制」になっているので、とても一般庶民には手が出ない。それは、ちょうど空の星を取ることにもひとしい。公共の建物に、螢光灯が使われるようになったのも、一九六四年ごろからである。)

私たちの一家は、まず住居からさきに定めねばならなかった。私たちに与えられた部屋は、ある家の離れであった。それが四畳半そこそこの小さな部屋で、気が滅入った。そこに、九人家族がどうにか坐りこんだ。壁がはげ落ちて、泥がむき出しになり今にも崩れてしまいそうな部屋、それにお勝手もついていなかった。

彼らは、とくべつに便宜をはかってくれたのだろう。その日一日だけは、仕事をさせなかった。それで、父と私は生れてはじめて、にわか左官屋になり、お勝手をつくった。

次の日から協同農場の仕事を始めた。

私たちの協同農場の正式の名前は、「黄海道信川郡月成里北極星協同農場」。ふだんは、「北極星協同農場」で通ずる。

協同農場は、大抵、里単位に一つづつつくってある。「北極星」というのは、いわば私たちの里にできた協同農場の固有名詞である。

協同農場の仕事は、およそ似たようなものであるが、その苦しさたるや、都会で工場に通った

ときの類でない。工場では、形ばかりではあっても、勤務時間制度というものがあるが、農場にはそんなものさえも無い。二十四時をぶっとおしで、立ち働かねばならない。

協同農場にも、組織体がいろいろとつくられている。党から伸びてきた組織、「社労青」（昔の民青で、正式の名称は「社会主義労働者青年同盟」である）の支部、それに婦女同盟、分組などががんじがらみにしめつけ、身動きさえもできないようになっている。

協同農場とは別に、街にはまた里の行政組織があるし、信川郡「安全部」から派遣された駐在所には駐在員がいる。

北極星協同農場には八つの作業班がある。作業班は、おおよそ自然部落単位にできている。この作業班の下に、いくつかの分組がある。私たちは、第三作業班に属したが、分組の方は、それぞれの能力と技術に従ってわかれた。

私は、海州綜合機械工場に勤めた経歴にてらし、農機械修理分組に配置された。私の仕事は、スキ、クワや脱穀機、トラクターなどを修理し、これを運転することである。

私たちの家族は、働き手が四人もいた。

父と母、そして私と妹である。働く人の数によって、食糧の分配が決まるので、労働グループから抜けるとか、怠業をはかるということは、とても不可能である。

食糧配給事情はどこでも似たようなものであるが、仕事をすることのできる人には、一日あたりは七百グラム、働けない非労力者（学生をふくめて）には四百グラムである。

その時はちょうど脱穀の真最中だったので、わき目もふれない物すごい仕事の洪水の中に投げこまれた。

ここで、ざっと協同農場の構成員を紹介すると、殆んど半分以上が婦女子である。戦争中に戦死したか、南韓へ脱出した人の殆んどが男たちなので、戦争未亡人と独身女性が必然的に多くなった。

とくに黄海道は、ほかの地方に比べて、戦争未亡人が多かった。

北韓カイライ集団は、婦女子だからといって、とくに面倒をみてくれるわけではない。それどころか、仕事の点においては、まさしく男女同権、いやむしろ女男同権だ。女性は家庭で家事労働に追われ、それを理由に、協同農場の仕事を少しでも怠けることは認められないから、男よりももっと多くの労働力を提供するわけである。

日が経つと、私たちも知らず知らずのうちに、協同農場の生活に融け込んでいった。気も狂わんばかりであった怒りも、そして悲しみも、少しづつ静められたが、それでも絶海の孤島に似た孤独を噛みしめねばならなかった。

すでに予想していたことが、予想したとおりの苦痛をともなって、私たちを襲ってきたからである。

私たちは、協同農場の幹部から、完全に村八分にされた。彼らは、私たちを同等の人間としては対してくれなかった。そればかりではない。農場の全員が参加することになっている総会にも、最初のうちは加えてくれない有様だった。

私たちの参席していない総会の席で、里党委員長の李敦秀と協同農場管理委員長の呉俊鶴は、私たちのことで全農場員に厳しい命令を下した。私たちは、成分の悪い「反動分子」であり、またきわめて危険な人物であるから監視を怠ってはならないばかりでなく、どんなに細かいことでも、一挙手一投足のどこかに怪しげな点があれば、時をうつさずに報告すること、これは言わずとも知れた彼らの命令である。

人の心は、変転きわまりないものである。皆が、私たちを避けようとした。その中でも、昔故郷にいた時に親しくつき合っていた人たちの態度が、もっともひどかった。

彼らは、私たちが日帝時代に汚ない親日派であったと悪口雑言をふれ回り、根も葉もない嘘をまことしやかにデッチあげて、昔は「悪徳地主階級」であったと宣伝した。

おそらく、それは彼ら自身が抱いている不安感のためではなかったのだろうか。五十を少しす

ぎた寡婦で金徳順という女がいたが、この女は共産主義路線に反する過去を持っていた。もちろん、私たちは彼女の過去については誰にも何も云わなかった。その女が、とりわけ私たちをいみ嫌い苦しめたのは、自分の過去がくさいからであったに違いない。自分の経歴よりも、私たち一家の過去がかえってきれいなことが、気にかかり、不安にかられたことだろう。

私たちは、その女を怨もうとは思わなかった。北韓カイライ集団の社会では、人間関係の不信感が、基本的な原則みたいになっていたからである。他人を引きずりおろさねばならない。他人を取り除かないと、自分が生き残る余地さえもない社会なのだ。結局、私たちのように、すでに烙印をおされた一家は、どうなってもよかったのである。

もちろん、そこの人たちの皆が皆、一人残らず、そうだったわけではない。中には、言葉や行動の表現を避けながらも、それとなく同情を寄せ、温かい人情のまなざしも投げかけてくれる人もいた。

その人たちは公式の集まりでは、真向から私たちを非難し、「ブロジョア意識の残りかす」が、完全に清算されていないと、はげしくなじったが、公式の場から離れたときには、云われたとおりに行動するほかには生きのびる方法のない汚ない社会のありさまをなげき、慰めの言葉をかけてくれるのだった。

引っ越して来たばかりの暮しなので、何かと不便なことばかり重なったし、生活に慣れていなかったので、たびたび、ヘマをやらかした。そういうときには、この人たちは、ひそかに忠告もしてくれたり、少ないながらも大根の二、三本を分けてくれたりした。

取り入れが終ると、すぐ冬が迫って来た。

冬は、冬でも仕事が山のようにあった。凍りついた田畠を熱心に掘り起こす作業が何回もくりかえされる。こうしておかないと、来年の生産量が多くならないというのである。

それから、畠に稲をまいて育てる。いわゆる「冷霜苗」というのが、これである。その周りに桓根を張って、風が吹けばしっかりしばりつけ、風が吹き止めば開けておくのである。

一方では、なわをなう仕事のほかに、党の学習に出席する義務もあって、とても農閑期だとのんびりしてはいられない。

ヒマができると、「ブロジョアという名の病気にかかる」という「大原則」に立った、彼らの政策が、すなわちこれである。

とくに、その年の冬は、私たちに苛酷な試練を下した。そのように辛く苦しい目にあうのは、両親にとっても私にとっても、生れて始めてのことであった。協同農場には、いろいろな仕事があったが、その中でもいちばんつらい仕事、皆のいやがる仕事が、私たちにおしつけられた。

こんな目にあっても、不平や不満を云うことはゆるされないし、仕事の手を抜くことなどはとても考えられないのである。もちろん、私たちの一家は、人一倍熱心に働くわけであるが、それでもなおかつ、資本主義的な意識がまったく清算されていないから、手さぼるのだと手きびしかった。

それればかりではない。仕事が余りにもつらく苦しいので、私たちが体中を汗にして働いていると、ご苦労さんといたわりの言葉くらいかけてくれてもよさそうなものであるが、彼らときたらかえって憎憎しげにあざけるのだった。

『昔は、おいしいものを食い、らくをしたおかげで、腹にあぶらがたまっているのだから、働くのは健康によいだろう』私はこのように虐げられながらも、歯を食いしばってがんばった。奴らこそ、私たちが精も魂も疲れはてて、倒れるのをひそかに願っていたのかも知れない。そこで「反動分子」が一人いなくなったので、世の中が清められたと、まるでクズを片づけたあとのさっぱりした気持を味わうかも知れない。

彼らがそう思えば思うだけ、かえって屈服してはならないのだった。

とくに、若い私は、できるだけ朗らかな態度で振舞い、暗い気持になっている家族に希望と勇気を与えようと努力した。

私にしても、別に前途に明るい希望を抱いていたわけではなかったが、それでも全く絶望していたのではない。私は挫けなかった。過去は、どうでもよいことだ。それに、現実がこのように惨めな方向へ進んいるとしても、決して屈服してはならなかった。

挫折感に居ても立ってもいられない気持であったけれども、私はかすかながらも差し込む未来への希望の先を見失なわなかった。

春がまだ完全に去っていない晩春だったけれども、配給食糧を食いつぶした絶糧農家がぽっと現われ始めた。ぜいたくに暮したからではない。無計劃に、穀物を消費したからでもない。死なない程度に、節約に節約を重ねたにも拘らず、春が過ぎるまえの端境期に、早くも食糧が底をついてしまったのである。

ここで、しばらく協同農場の分配方法を紹介しよう。いわゆる「協同農場の分配」は、共産主義者が打ち出す理論によれば、「労働力を質と量によって、正確に評価し、それだけのものを分配すること」なのである。協同農場の全収穫量を正確に評価し、党が持っていく分と控除する量を全部差し引いた残りのものを、協同農場の全員に分配するということなのである。

ところが、こににも落し穴がある。

金日成は云った。

『黄海道信川郡では、愛国者（赤）が多く死んだので、信川が共産国建設の模範にならねばならない』

金日成は、私たちに大大的な生産突撃戦を展開せよと命じた。

信川郡に対して、穀物十万トンの生産を強要した。信川郡は、行政区域の改編によって、一つの面がほかの郡に編入されてしまい、農地面積かそれだけ小さくなっている。ここで、穀物十万トンを生産することは、とても不可能に近かった。それにも拘らず、彼らは十万トンの生産をおしつけた。

「生産物判定」という奇妙な制度がある。

六月か、七月ごろになると、中央から判定官がやって来る。判定官は、いちばん豊作になりそうな代表的な田を選んで、そこからどれ位の収獲が上るかを判定する。そして、この判定の結果を、地質の悪いほかの田の収獲量にも機械的にあてはめ、信川郡全体の生産量をはじき出すのである。その計算によれば、十万トンの生産が可能かも知れないが、実情は決してそういうわけには行かない。実りの悪いところ、地質の悪い田の収獲は、当然少ないものである。判定官は、こういう事情などは一向におかまいなしに、一律的に押しつけるわけである。まるで、無茶苦茶である。

面白い話がある。都会から来た手の白い判定官は、実りのよい田の収獲量を計算するときに、実際に田の中に入り、稲の穂一つ一つに何つぶの稲が実っているかをクソ真面目に、馬鹿丁寧に数える。それで、農村には「稲のつぶを数える判定官殿」という言葉が流行している。

このような判定を行なうのだから、実際に脱穀を行なったときは、十万トンどころか七万トン程度にでもなってくれれば、よい方なのである。私たちの農場が、ちょうどこういう風になった。収獲が七万トンしかないのは、判定官が間違った判定をしたからだという論理は通用しない。結論は、ちゃんと決まっている。協同農場自体の失敗と怠業のせいである。

稲の管理を怠たって、成長を妨げたと追及される。それから、穀物の管理をおろそかにしたために、鳥が食べ、ねずみが食べ、脱穀場で家畜が食べたとなじる。党の穀物を食べてしまった鳥やねずみや家畜はどんな厳罰に処してあきたらないが、こうすることができないので、責任の追及を受けるのは哀れな人間どもと相なる。

かくして、収獲が少ない責任の全ては、当然、協同農場自体にあり、農民たちの失敗にあるとされる。責任の追及が、言葉だけに止まってくれれば有難いが、そうは問屋がおろさない。現物税、トラクター税、肥料税、水税など数えあげればきりのない税金と供出が、すべて十万トン生産を既成の事実にして、賦課されてくる。

その残りが、協同農場の組合員に分配される。こんな有様なので、彼ら自身が定めた勞働者一日あたり七百グラムの配給量にならない場合さえも、往々にしてある。ことが、これだけで済めば極楽だ。家畜を囲いの中で飼育しなかった家は、家畜が地に落ちた稲粒を拾って食べても、いわゆる「国家の穀物」を食べて大きくなったとみなして、それに相当する年間の飼料量を計算、賦課する。それに、南韓の同胞が飢餓線上でさまよっているとねつ造宣伝し、そこへ送る穀物を貯めるというまことしやかな口実を設けて、吸い上げる。それから、去年の春に借りて食べた貸付穀物を返さねばならない。

あれこれ差っ引かれてしまうと、実際に農民の手元にかえって来る分配量は、実質生産高の半分にもならない。この状況は、毎年悪化の度を加えているが、カイライ集団は一向に改善策をとろうとはしないのである。

ボロをまとわせ、餓死すれすれの線上で文字どおり死にきれなくて生きている状態にしばりつけておくためである。こうするのが、酷き使うのに一番手っ取り早い効果的な方法だと思っているらしい。

カイライ集団がはじめて、協同農場制度を設けた時もそうであった。すでに云ったことであるが、一九五三年ごろに、想像もできないひどい飢饉が北韓の全域を見舞った。生やさしい飢饉で

はなかった。ひと冬の間、木の皮をはいで食べ、松の葉を煮て食べるのは、あたりまえのことであった。ちょうど、この飢饉の真つ最中に、カイライ集団は全農民に対して、自作農をやめて、協同農場に加入することを強制した。

どんなに純朴な農民でも、協同農場に加わることが、何を意味するかは知りすぎるほど知っていた。それが、昔の小作農時代よりも、ひどい惨めな生活に通じていることは、想像にあまりあることであった。農作に従がう奴隷、あるいは農業を行なわせる刑務所の囚人と同じ境遇になることを感じ取っていた。

農民たちは、粘りにねばって、加入を拒み続けた。個人の農地を、全部いわゆる「国有の農地として没収する」ことに、賛成する農民のいるはずがなかった。しかし、飢饉の力は自分の土地への愛着と、自作農としての自由への執着よりも強かった。北韓カイライ集団は、これを利用した。協同農場に加入した人には、数日に一回づつではあったが、とうもろこしの配給があった。そのとうもろこしだけで、飢えをしのぐことはとてもできない相談ではあったが、それでも全くないよりはましなわけで、とうもろこしの誘惑の力は大きかった。

飢え死にするよりは、それでも貰おうというわけで、一人それからまた一人と、涙をのんで加入するに至った。こうして、農民の殆んど半分以上が組合員になると、次には強制的に農民をす

っかり抹殺してしまった。

それは、私有農地の抹殺だけに止まらず、人間愛の抹殺でもあった。平和そのものであった田園風景は一朝にして吹き飛び、殺伐な空気が農村を支配した。民家には火をつけられ、その代りに、いかにも不格好な倉庫や長屋のような建物が立った。そして、少しでも不審な言動のある者は、情容赦なく炭鉱へ送り込まれた。

私たちの上にも、しかし試錬の歳月はよどみなく流れて行った。私たちが協同農場に来てから、早くも年が変り、一九六〇年を迎えた。

憎悪のこり固まりとなって、ありったけの力をふりしぼり、挫折と屈服を拒むところから生れた緊張感、これに打ち克たねばならないというねばり強い信念も、日が経つごとに冷めていった。

しかし、それでも私は、この生き地獄から、どんな手段と方法に訴えてでも、抜け出ねばならないと、ひそかに自分に言い聞かせていた。たとえ、脱出は不可能であっても、息だけでも自由に呼吸しなければならないではないか。

四月になった。春のきざしはいたるところにあふれ、裸木の枝にも次々と青葉がつき出し、かげろうたなびく野原のあちらこちらにも、新緑の気はいがただよった。青春を永遠に象徴する季節、その春を迎えながら、私は自分の青春を謳いあげることよりも先に、自分の青春の暗さと重

さに打ち克つ思案をころさねばならなかった。

私は、四月初旬のある日、里党委員長の李と、野のあぜ道で出会した。まず、彼にあいさつをしたのち、丁寧な言葉で、前まえから考えていたことであったが、トラクターの運転技術を学ばせてほしいと、自分の希望を申し入れた。

「北極星協同農場」には、古物のトラクターが一台あったが、運転手が居ないので、倉庫でねむっていた。私は続いて、トラクター学校の学習期間がおよそ三カ月であるから、もし今そちらへ行くことができれば、おそらく七月ごろからは協同農場のために熱心に働くことができると云った。李は、私をふんと見おろし、しばらく考えていたが、その返事の口ぶりではどうやら承諾しそうな気配であった。

私は、元気が出た。私の計画では、どんなことがあってもトラクター学校へ入り、卒業する時分に、どこかよそへ飛んでしまうことであった。北韓カイライ集団治下では、個人がどこへでも自分の行ぎたい所へ行けない仕組みになっていたので、ともかく、どこかへ移るためのイトグチだけはつくり出さねばならなかったわけである。

その機会を最大限度に利用して、才覚の限りうまく立ち回り、飛んでしまえばよいと考えた。

それで、私は必要な書類をつくり始めた。まず、履歴書をつくった。それから、四・六倍版大

の白紙四枚にぎっしりと小さな字で書き込むしきたりの自叙伝をつくりあげた。

あとは、里党委員長の推薦状さえあればよい。私は、党委員会事務所を訪れ、李委員長に会った。

その席には、協同農場の幹部が全部、揃っていた。私が書類を差し出すと、里党委員長は、ろくに見ようともしないで云った。

『推薦することはできないね』

それは、まるで揶揄するような口ぶり。

私は、体中の血が、いっぺんに顔に上って来るような興奮と怒りをおぼえた。もはや絶望である。それで、なぜ推薦して貰えないのかと訊ねた。

『それを、知らないのできくのかね。同志の出身階級はなんだったのかね。同志にトラクターを任せるわけにはいかないのだ』

これだけで、おめおめと引き下げるわけにはいかなかった。私にも言分がある。私は、云ってやった。共産党の政策は、明らかに父母の過去と、現在の息子とは、何の関係もないと云っている。解放当時の私の年は、わずかに十歳であった。それなのに、私にどんな過ちがあるからと、勉学の道さえもさえぎろうとするのか。

理論的には、私の話が正しすぎるくらい正しかった。彼らは、言葉につまったらしく、私の態度がなっていないとか、成分の悪い奴らは救いがないとか言いながら頭を振り、はげしく叱りつけた。

この事件があった二日後に、協同農場の総会が開かれ、私は「批判」の集中攻撃を受けるに至った。

里党委員長は、まず報告書を読み上げた。彼は、党の幹部と行政幹部にさからうことは、法律にそむく行為であるとクギを差した。あまつさえ、不純きわまる反動分子の息子の分際で、公公然と抗らったのであるから、とても見逃すわけにはいかないと私をなじった。

それから、私を立たせ、「自己批判」を強要した。

やむを得なかった。私は、自分が悪かったと述べた。しかし、このあとで私はつけ加えてやった。私が学校へ行きたかったのは、自分個人の利益のためというよりも、技術を学んで、いわゆる「国家と党」のために、いっそう役に立つ人間になりかったからであった。

協同農場に来てからは、日はまだ浅かったけれども、正直に仕事だけは陰ではなくまじめに働いたし、皆にできるだけ親切におとなしく対したので、評判だけはそんなに悪い方では無かった。

里党委員長は、修理分組長を立たせた。
『彼の仕事ぶりはどうかね』
と訊ねた。
これは、私にとっても、危機一発の瞬間である。修理分組長の報告いかんによっては、サボタージュをこととする人間にされ、もっと重たい罰をくわねばならない。
『ええ、仕事は熱心にやっています』
修理分組長も、多少緊張ぎみで答えた。
『そうかね。自分の成分が悪いことを考えてでも、仕事だけは熱心にするのが当然だろう』
里党委員長は、修理分組長から思ったとおりの返事をきくことができなかったせいなのか、いかにも不快げに述べた。このあとは、恐かつと強迫が続き、これからはもっと厳しく監視するだろうと言渡された。
私は、いくらかホッとした。どうやらこれだけで済むらしい。しかし、こう思ったのは、私の浅慮であった。会議が終ると同時に、私は駐在員に引っぱられて、駐在所へ行った。駐在員は、ひどく下品な言葉で私を罵しり、ほっぺたを張りつけた。それから、私自身さえも分らないような、細かいことをいちいち数えあげて、強迫した。こうして、五、六時間はたっぷりと油をしぼ

られたのち、ようやく解放された。

家に帰って来たが、数日間は睡眠を忘れた。その時の経験は、いわば一種の貴重な教訓だったのかも知れない。

そんな目に会えば会うだけ、いっそう強く脱出の決意を固めた。ただ、これからはもっと綿密な計画と細心の注意を怠ってはいけないと思った。

いいかげんに行動したら、かえってこちらが傷つくだけだとさとったのだ。

いっそう誠実に働き始めた。夜や昼の別なく、脱穀場に出かけて、機械を丁寧になおした。こうして他人の殆んど二倍くらいは働いた。

しかし、ふっふつと燃えあがる活火山の炎のように、心中の怒りは消えなかった。このまま生ける屍となってしまうわけにはいかないという気持、この鉄格子から一日も早く自分を解放させてやろうという気持は、いっそう強く根を張った。

こういう考えの一つの現われとして、今考えれば余りにも前後の見さかいもない、無茶なやり方ではあったが、私は一つの大胆な行動を取った。

青春は、大胆なことを実行することができ、また自己実現のために盲目的に突進することができるところに、大きな意義があるのかも知れない。（あとでも述べるつもりであるが、言葉の本

当の意味において、私は自分が自由人であることを知っている。人間を身動きもできないように、がんじがらみにしばりつける北韓の社会から脱出できたのは、心の中で力と意志と勇気が一つに固まり、自分を開拓してみたいという自由への追求があったからである。これを貴いものと思う)。

ともかく、その年の五月、金日成あいてに手紙を差し出した。宛先は∧平壌市　朝鮮労働党中央委員会　委員長　金日成∨と書き、発信人は∧黄海南道　信川郡　月成里　北極星協同組合内機械修理分組　閔庚泰∨と自分の名前と住所をはっきり記した。

この手紙で、自分の云いたいことを洗いざらいぶちまけた。党の政策、とくにいわゆる党の「群衆路線」は誰でも現在の仕事を立派になしとげていればその過去を問われず、皆が社会主義の建設者として、それぞれの要求と能力に従がって働くことができるとされている点を指摘し、この線にそって、理論を展開した。

私は現在なん歳であり、こういう経歴を持っている人間だ。私の成分が悪いということはよく承知しているが、しかし、これは私の責任ではない。この点については、法律もはっきりとうたっているではないか、両親の過去のために、子供が責任を負わされることは無いと。

私は、「党と国家」のために、熱心に働きたいし、そのような心の準備もできている。それな

のになぜあなたはその機会を与えてくれないのか。それだからといって、私は決してとてつもない高望みをしているのではない。卑近な例をあげよう。私はトラクター学校に入学して、運転技術を学びたかった。私は、それを学ぶだけの才能を充分に持っているし、その技術が身につけば仕事をもっと能率的に行なうだけの自信もある。それにも拘らず、私は成分が悪いことを理由に、推薦を拒否された。このような事実こそ、共産党の理論と実際が異なって現われていることの実例ではないのか。私にも、働くことのできる機会を与えてほしい。そして、私の成分が悪い点だけを一方的に強調して、権利をうばうことだけはしないでほしい。

ざっと、こんな内容の手紙であった。

この手紙を出したあと、多少恐くないわけではなかった。しかし、それ位私も窮地に追いつめられていた。もっとひどい刑罰を受けて見たところで、これ以上悪くなることもないだろうという肚もできていた。心の中に積もったうっぷんを吐き出してしまいたい気持もあった。

物ごとがうまいぐあいに運んで、私の手紙がなんらかの効果を現わすとは、考えてもいなかった。これくらいの手紙で、動く連中らでないことはとっくの昔、こちらもちゃんと承知していた。

予期したとおり、なんの返事もなかった。こうして私は、手紙を出したことさえも、すっかり

忘れてしまった。

手紙を出してから数カ月後の、十月に変なことが起こった。

私は、里党委員長の呼び出しを受けて、出頭した。里党委員長の李は、薄気味の悪い笑いを浮かべながら、一通の手紙を手渡してくれた。その手紙は、即時、信川郡の党委員会に来ることを命じた出頭命令であった。

私の背すじに冷たい汗が流れた。なにかどう間違ったのかは知らないが、これで死ぬまで阿吾地炭鉱行きの運命になったらしいと思った。

私はまっさおになった。突然の出頭命令の理由はなんだろうかと里党委員長に訊ねてみた。里党委員長の奴が私にぬれぎぬを着せ、粛清を上申したに違いないと考えたからである。里党委員長は、一言のもとに、わからないと答えた。

その日はおそかったので、次の日、早い朝食をすませ、歩いて郡党委員会のある信川邑まで出向いた。足どりも心も心配で重かった。私は、いろいろと不幸な事態を予想しなから、郡党委員会の玄関をくぐった。

名前を告げると、郡党委員の一人が私を呼んだ。その男の前に立っと、彼は苦虫をかみつぶした顔で言った。

『このごろ、働き具合いはどうかね』

と訊ねた。私は内心、もう間違いなく引っかかったと考えながら、

『国家と党のおかげで、熱心に働いています』

と答えた。

『そうかね。同志はどんな仕事についているの』

私は、自分の仕事を説明した。すると相手は、仕事に不満でもあるのではないかと畳みかけてきた。

私は、そういうことはないと答えた。今度は、私がまじめに働かないという噂を耳にしたとおどかした。

私は、そんなことはないと答えた。自分は一生懸命になって働いているし、その点については協同農場の人たちが全部知っているはずだと語気を強めた。

『わかった。ところでどこか、別のところへ行って働きたいわけではないだろうね』

彼は、このように訊ねた。いわば、炭鉱へ行きたい気があるのではないだろうな、という質問、強迫である。

私は、とんでもないと答えた。

『実を云うと、党中央委員会から同志について調査依頼がきている』

彼はこう云うと、その時始めて、一枚の封筒を示した。もちろん、封筒の中味は見せてくれなかった。

ようやく、私は全てを知った。前に、前後の見さかいもなく、金日成に出した手紙の返事に違いなかった。ところが、抜け目のない彼らは、その手紙を直接私あてには送らないで、郡党委員会あてに出したのであった。私は、うまいぐあいに、彼らのワナにかかったのである。こう考えるととても口惜しかった。

『同志は、教化所がどういうところであるかを知っているだろうね』

カイライ集団は、こういって私を高飛車におどしつける計画なのである。

恐れおおくも金日成に手紙を出すとはもってのほかだというわけだ。

彼らは、私の手紙の内容が、余りにも正しいことを、ちやんと知っている。それが、どこまでも正しいことであるから、おどかしをかけるのである。間違ったことを間違っていると指摘するのは、不届き千万であり、そのこと自体がすでに大きなあやまちなのだ。しかも、私が、公然と手紙で、それを憶面もなく主張したのだから、捨ておけないと考えたことだろう。

おそらく、はじめのうちは私の手紙など握ぎりつぶしてしまうつもりだったに違いない。それ

を考えなおした。黙殺するよりは、一つおどしつけ、あぶらをしぼって二度とそんなふらちな真似ができないようにしてやろう。

それで、中央から郡党委員会にきた手紙にはそんなことが書かれているだろう。誘導訊問で窮地に追い込み、あぶらをしぼってやれと書いてあるに違いない。

前に坐っていたデブの男は、中央の指示を私に対して実行しているのだ。こちらがどんなにやきもきし、不安に駆られていても、そんなことは彼らのあずかり知らぬところである。ただこちの側がおろかにも、カイライ集団の矛盾点を衝いたことだけが、大きな罪なのである。

カイライ集団の「法律」の定める手続に従って、こういう行為に出たことと、その手紙でいわゆる「国家と党」のためにもっと能力を発揮させてほしいときわめて正当に要求した事実は、少しも罪にならない性質のものであるが、その態度をとること自体に問題があったわけである。いったい全体もっと働かせてほしいと頼むことが、どうして罪になるのか。

しかし、私はその男から、じわりじわりと問いつめられ、おどかされ、怒鳴りつけられた。身も凍る思いであった。これはひょっとしたら、本当に教化所行きかも知れないぞと思った。

こうして、手紙を差し出したことは、私に危険人物の烙印をいっそうはっきりと押すことで幕をおろした。私には、どんな方法も、手段もそして希望も残されていないように思われてきた。

9、第一次脱出

「協同農場」の生活は、ほんとうにつらかった。それは悪夢であった。

私は、一生懸命に働きながら、ひそかに脱出する方法を思いめぐらした。

元来、仕事の性質上、あちらこちらを歩き回らねばならないようになっていたが、そういう機会を利用して、できるだけ多くの知合いをつくることにつとめた。そうすることで、外部の情勢をつかみ、どこかにあるかも知れない脱出への抜け穴を見つけ出したがったからである。

再び一年が流れ、一九六一年になった。私の年は、すでに二十六才になった。普通の世間の常識からすると、一家を持ち、人生の明日のプランをたて、安定した生活をきづいていなければならない年である。

私は、機会あるごとに、せっせと信川邑に出向いた。機械の附属品を買いに行くというのが、大抵の口実になったが、私には別の思惑があったのである。

幸い、信川邑には親しい友人が一人いた。彼は、郡代表水泳選手であった。私は、ひょっとしたら運動選手になれば、脱出の道が開けるかも知れないと考えた。

私の体つきは肥満型ではなく、どちらかと云えば、敏捷な方である。運動神経もにぶい方ではない。それに、バスケットならばしたこともある。初級中學校に通っていた時と、軍隊にいた時、実際の競技場に出て、コートで活躍した経験もある。

水泳選手の友人を通じて、私は信川邑のバスケット選手たちに会った。私は、かってバスケットをした経験があること、もう一度コートにカムバックしてみたいことを述べた。最初半信半疑の体であったが、ともかく一度いっしょに練習をしてみようということになり、テストを受けた。結果は、まんざらでもなさそうであった。

彼らは、ひと肌ぬいでみようと云った。

私は、バスケットの選手らといっしょに、信川邑の「体育指導委員会」を訪れた。バスケットのコーチは、私が選手として、なくてはならない実力者だと、体育指導委員たちを熱心に説いた。その当時の、信川郡体育指導委員会は選手ひでりで困っていた。それに、信川郡は黄海道の中でも、スポーツに強い地区だったので、選手の登用は、これと決まればスムースにはかどるはずであった。それに、五月には「黄海南道」の体育大会が予定されていた。

信川郡の体育委員会では、私をおろそかには対しなかった。内心とても嬉しかっだが、表面上は冷静にかまえ、問題は協同農場が私を手放したがらないかも知れないので、体育指導委員会が正式の公文で要求してほしいと頼むのを忘れなかった。

指導委員会ではさっそく承諾してくれた。スポーツマンはやはりほかの人たちとは違い、決断が早く、こせこせしなかった。男らしくて、人つきあいでもよしみというものを知っていた。

私は、すっかりいゝ気持になって、農場に帰ってきた。それからというものは、首を長くして連絡の来る日を待っていた。しかし、どういうわけなのか、来るはずの連絡が一向に来なかった。それだからといって、こちらから里党委員会にこのことを出向いて、詮索してもよい性質のものでもない。

忙しさに取りまぎれて、信川邑へ出かけることができず、気ばかりもんだが、十日ほど過ぎてから、やっと口実を設けて信川邑へ行った。一体、どうしたことなのか。一度、約束をしたならば、それを果さねばならないではないか。公文を出すと云っておきながら、なぜ出さないのだ。私は、きびしく云いつのってやった。

『なんだって？　公文は、すでに二回も出してあるんだ』

今度は指導委員の方が、あきれる番であった。彼は、私にこう問い返しながら、公文の写しを

見せてくれた。明らかに、郡書記長の名前で、前後二回にわたり、公文を送ったことがちゃんと書かれてあった。

私もあきれてしまった。月成里党委員会が、私に連絡をしてくれなかったことがはっきりした。ひどい人たちとは思ったけれども、私としてはどうすることもできなかった。

『それでは明日、私が直接出向いて、談判してやりましょう』

私よりもかえって、体育指導委員の方がふんがいした。

私は、まっすぐ協同農場に帰って来た。

郡の体育指導委員はその翌日、案にたがわず、自分の方から協同農場に出向いて来た。その足で、里党委員会に赴き、はげしくなじったようである。

『郡書記長の公文をなんと心得て握りつぶすのか。君たちは郡書記長の指示をあくまでも無視するつもりなのか』と。

このあと、私に出頭命令が出た。私は内心、ほくそ笑み、快哉を叫んだ。

こうして、農場からしばらくの間ではあったが、解放された。信川邑に出て来ることができただけでも、至難のわざであった。

私がどんなに神出鬼没の才能を持っていたとしても、スポーツを利用しなかったならば、とう

ていた農場から脱出することはできなかっただろう。

私は、まっすぐ練習に飛びこんだ。道大会が終れば、また農場へ帰らねばならないことになっていたが、それは当分間すっかり忘れてしまうことにした。

五月初旬、道体育大会が海州市で開かれた。海州を見る気分は、決して愉快なものではなかったが、感傷や感情に溺れてはいけないので、私は全力をつくして競技に臨んだ。背が高い方ではなかったが、すばしこいという評をされていたので、力いっぱい走り、飛び、投げ、そして受けとめた。

この大会で信川郡は、総合成績第一位となった。信川郡体育指導委員長がすっかりほころび、えびす顔になったのも無理ではなかった。スポーツにも「党性と階級性」がついてまわるからである。

私たちは、信川邑に凱旋した。しかし、私は喜びも束の間のことで、新しい心配のタネがふえた。道体育大会も終ったので、再び協同農場の方へ引っぱられて行くかも知れなかったからである。

それで、邑に帰るとさっそく、いっしょにコートで競技した選手たちに、事情を訴え、相談をした。農場へは死んでも行きたくないこと、どんな方法をとってでもこのまま邑に居坐ってしま

いたいことなどを打ち明け、助けてほしいと頼みこんだ。コーチと指導委員にも、相談を持ちかけた。

信川高級中学校の教職員にも近づいた。その学校にバスケット部があった。それで、もしやコーチが必要かも知れないと誰かが云ってくれたのである。

八月十五日になると、北韓の全域にかけて、体育大会が開かれる。参加チームは五月から準備を始める。私はこれを利用した。

私は、信川高級中学校バスケット部の無報酬コーチに納まった。

家からそっと通ったりあるいは友人の家に泊り込んで通ったりした。まったくあいまいな、不安だらけのちゅうぶらりの生活であった。

父や母が注意するまでもなく、「北極星協同農場」側から私を見る目は冷えびえとしたものとなった。

言いがかりのスキさえ見つければ、私を引きもどしたい気配であった。これに対しても、気をくばらねばならなかった。

私は、もがきにもがいた。学校側に対しては、私が誠実で真面目な人間としてうるよう努力した。一方、郡の体育指導委員会にもせっせと通った。脱出のイトグチをつかめる場所がそこしか

なかったので、死にものぐるいであがかないわけにはいかなかったし、どうせやり始めたことで、結果はどういうふうになっても、不真面目な人間には見られなくなった。

こうして、私はある程度の信用を得た郡の体育委員会では、審判部に役員として働かせてくれた。それは、私を信任してくれている証拠であった。

スポーツマンの世界はやはりさっぱりしていて、気持がよかった。運動をしている時は、それに打ち込んで、全てを忘れることもできた。

久しぶりに、若さを取り戻したように、思われた。二十六才という年は、運動するにはおそすぎたが、私は疲れを知らなかった。

夏が去り、「八・一五」慶祝体育大会も過ぎた。学校は夏休みに入った。こうして私はもう一度、身の振りかたを考えねばならなくなった。

夏休みとはいっても、生徒たちを遊ばせるのではなくて、労働動員に駆り立てることになっている。スポーツどころの騒ぎではないので、私はその日から失業状態におち込った。郡体育委員会でも、当分は大きな体育行事がないので、時間をもて余すようになり、私の位置は宙に浮いた。

明日にでも、協同農場から呼び出しがかかるような気がして、私はおちおち眠ることさえもで

きなかった。夏の農繁期で、農場では猫の手も借りたい程忙しいはずであった。
そういうある日のこと、私は徐成禹に会った。彼は、信川高級中学校の教師で、私とかくべつ親しい間柄であった。私は、自分のおかれている立場を説明し、
『どうしょうもないから、高級中学校の三年生に編入するつもりだ』
と、相手の反応をそれとなく見ながら言ってやった。
『三年生に編入だって？　君はもう二十六才だよ。その年で高中三年生？　十年も年を取りすぎているんだぜ』
徐成禹はまるで、うまい冗談でもきいたように、ゲラゲラ笑い出した。
それは、私自身が考えて見ても、おかしな話ではあった。二十六才で、それも勉学のためではなくて、農場から逃げる死にものぐるいの手段として、高級中学校の二年生になろうとしているのだから、考えて見れば、そぞろ哀れをもよおそうというものであった。
しかし、ことは急を要した。ぜいたくを言っていられる身分ではなかった。
『笑はないでくれよ、僕は本当のことを云っているのだよ』
『しかし、君、あそこは十才も年下の生徒だけの世界なんだよ、そこは』
『そんなことは、どうだっていい。是非とも校長に話してみようと思うんだ』

私は、彼をなだめ、説きふせた。徐もはじめのうちは相手にもしなかったが、結局は、私に引きずられ、校長に話だけはしてみるところまでは折れてくれた。

私は、バスケット部のコーチだったので、校長の顔は知っていた。徐成禹は、校長室の方へ歩いて行きながらも、やっぱり自信がないとつぶやくのだった。バスケット部のコーチといえば、いわば先生と同じようなものである。その先生様が生徒になりたいと申し込むのだから、校長もおったまげてしまうだろうと、彼は云った。

校長の反応は、予想とおり思わしくなかった。学齢というのがちゃんとある上に、私の場合のような編入は法律違反だと云われた。

それからというもの、私はしょっちゅう校長室へ出入りし、庶務課と学生課の人たちとできるだけ親しくなろうとした。

彼らは、ついに私の熱心さに打たれたのか、それとも根負けしたのか、抜け道を教えてくれた。

『そんなにまでおっしゃるなら、いいでしょう。編入の方は、なんとかやってみましょう。ただ、協同農場の承認書がいりますね』

『それがなんの役に立つのですか』

『それがなくてはどうにもなりません。協同農場から文句が出た場合、逃れようがありません』
学校側では、それ以上の便宜をはかることはできないと、きっぱり言いそえた。
一難去ってまた一難とは、まったく私の場合をさしていうことかも知れない。協同農場の方で、私におめおめと学校へ行けと云ってくれるはずがなかったからである。
どんなに脳味噌をしぼってみても、うまい知慧はうかばない。就学承認書どころか、こちらの内心がばれれば、すぐ襲いかかって来るだろう。どんな目に会うか、知れたものではない。
しかし、学校へ入るためには、どうしてもその承認書というやつがいる。私は、ついにあたって砕けるの気持になった。
信川邑から家に帰って来た。外を出歩いてよい身分でもないので、部屋に閉じこもったまま、思案を重ねた。
里党委員会には、それでも人間的に話の通ずる人がいた。洪大杓という人である。私は、この人が一人になっている時をねらって、そっと会うことにした。ほかにこれという方法がない以上、彼に会って、なんとしてでも頼んでみるのが最善の策であった。
私は、ある日の夕方、ひそかに洪大杓に会い、事情を打ち明した。学校へ行って勉強をしたいと訴え、承認書を書いて貰えないだろうかと、その心中をはかってみた。

『それはとてもできないことだよ。君だって、よく知っているだろう』
洪大杓はいかにも、つらそうに答えた。
それ以上せがめば相手を苦しめるだけだとは知っていたが、私はすでに背水の陣をしいた男であった。もうひと押し、あともうひと押しとねばりにねばった。ついに洪大杓がかぶとをぬいた。彼はしばらく考えた末。
『承認書はとても駄目だ。しかし、どうしても承認書でなければならないということもないだろう』
と云うではないか。
私は、その場で考えてみた。承認書が難かしければ、ほかの、それに似たものをつくるよりほかに方法はない。
『それでは、僕が学校へ行ってもかまわないという認定書をおねがいします』
これは、私の云ったこと。
『そらあ、かまわないけれども、あとでとんでもない騒ぎでも持ち上がれば、どうしよう』
『そんなことはありっこありません。表沙汰になった時は、学校の方で私を無条件に編入させてくれたと云うつもりです』

私はもっと説明した。学校側がこんな書類を要求するのは、形式を揃えるためであり、事件になどなる性質のものではないと、納得がいくようにつけ加えたのである。

私は、このような経路を通じて、どうにか認定書を手に入れることができた。認定書は、管理委員長が留守のとき、洪大杓がハンコをおしてくれたものである。

おそらく、彼の助けがなかったならば、私は今ごろ辺地のどこかの炭鉱で生ける屍になっていることだろう。

北韓カイライ集団のその組織をつき破った私——。

ひそかに私を援助してくれた善意の人たち。

人間が組織をつくったことは事実である。その人間自身のためにつくったこともまた事実である。しかし、組織はそれ自体がすでに、余りにも非人間的である。組織はかえって人間を抑圧する。組織は人間を非人間化する、人間は、自分がつくった組織にしばられ、自由を失なう。

これが、北韓カイライ集団の社会においては、とくにはなはだしい。人間は、がんじがらみにされ、自由を失なうばかりでなく、無力化する。その反面、組織は、いっそう生々しい威力を持つに至る。実際には、とても信じられぬ程の大変な威力を発揮するのである。

もちろん、私は取るに足らない学校編入工作を通じて、北韓カイライ集団の組織を相手に、あ

あしこうしたと自慢たらしく述べるつもりはない。ただ一つ、これだけのことをするために、私がはらった努力は並大抵のものではなかったこと、これを言いそえたい。

私は、人間が意志と勇気、そしてゆるぎない信念さえ持てば、決して屈服しないという貴重な体験を得た。

これは、わずか一年まえ、行きあたりばったりに、トラクター学校へ入ろうとしたため、ひどい目にあはされた時とはよい対照になる。人間の勇気と意志は、手段と方法を教えてくれる。

こうして、二十六歳になった男のとほうもない夢、そんな年柄で丸坊主の高級中校生になるという異常な夢が、ついに実現をみたのである。このささやかな成功をまえにして、楽しさを味わうよりもさきに、いっそう強い緊張感をおぼえるのだった。

煙草をやめ、机にしがみついて勉強をはじめた。なにはともあれ、これからの学校生活で落伍してはならないと思ったからである。

新学期になった。今は制度が変ったが、当時は六月ごろに終業式を行ない、九月に新学期を迎えた。

私は、頭を丸坊主にし、制服制帽を着用した。こんな自分の姿を鏡にうつしてみた私は、そぞろあわれをもよおした。それは、まるで昔の私ではなかったからである。

協同農場の組織から、学校の組織へ――。

私は、一つの組織からもう一つの組織への移動を行なったわけである。私がここで「学校組織」という言葉を使ったのは、偶然の思いつきからではない。学校は青少年を教育する場所ではない。青少年に組織がなんたるかを教える「組織」であるからだ。

北韓カイライ集団は、とくに教育を重視する。それにも拘らず、それは学問を教える教育制度ではない。なんとなればなにかを教えるということは北韓の現実が、ひどく愚民化された社会のそれであることに気づかせ、反発感を刺戟するおそれがあるからである。

そのために、北韓カイライ集団は教育を行なうというよりも、条件反射にうまく適応する人間モルモット、あるいは人間機械の大量生産を行なっているだけである。

人間性の開花、あるいは自己実現の理想を学生たちが持つようになれば、一大事だからである。こうなれば、いったい誰がみすみす北韓カイライ集団の政治を認めようとするだろうか。

それ故に、北韓カイライ集団は学科中心の教育を行なうのではない。学科の勉強はアクセサリーで、新聞を読める程度でよいと考えているかも知れれい。学科はこの次で、まず共産主義思想の教育に熱中する。それこそ、思想の真赤な人間だけが共産主義に忠誠をつくすからである。

彼らは、このような考えから、一九六二年には高級中学校制度をなくし、技術数育の名目で全

部を技術学校に改編してしまった。その理由は？　人間を特殊機械の部品のように使いこなすためである。

これは、すでに教育の名に値しない。それは、殆んど本能に似た反応をつくり出す「肉体的な訓練」を行なう制度だといった方が正しいかも知れない。あるいは、毎日同じ薬を投与して、もはやその薬がなければ生きて行けない、一種の阿片中毒患者のような生き物をつくり出す制度であるとでも云おうか。

唯物論は、精神の否定から生れた理論ではなかったのか。しかも北韓では、愛を否定し、人間関係のほのかな温かさを無視し、思索と人間の尊厳性を拒否する方向へ発展してきた。皆の考えは、カラカラに乾からび、殆んど道徳的な不毛の地をつくり出した。

残っているのは、苛酷な現実、殺伐な適者生存、弱肉強食の動物的な現場だけである。北韓カイライ集団の教育方針は、このすさまじい現場を学生たちに示し、その現場をつくり出した「党」への無条件の肯定を理念としているのである。

党という神聖にして侵かすべからざる存在に対する畏敬の念、これを詰め込むためには、相手の自由な納得を待つ方法ではとても不可能なのである。

ハンマーで、頭をガンガンとたたいてやるのと似たような方法で、党を詰め込む。一日も休ま

ず、一時間も休まず、詰め込みを行なう。頭が割れそうになるが、そんなことはおかまいなしに、規則正しく、条件反射的に詰め込む。

たしかに風変りな動物学者の実験方法に似たこのような訓練が、北韓では堂堂たる教育の名において、人間に対して行なわれている。

こんな訓練を受けるのであるから、北韓の青少年は、「党」と「思想」に関する限りにおいては、盲目的な同感、あるいは剝製の信念を持っているといっても言い過ぎではない。

人間形成期の最も重要な思春期を、北韓の不幸な青少年は、このようにして浪費してしまう。それは、人間の尊厳性と歴史の名において、罪状を問いたださねばならない行為である。それは、わが民族の次の世代を、あげて白痴化する作業であり、人間機械に去勢するむごい陰謀なのである。

私が、このように極端な表現を行なうのは、大韓民国に来て、こちらの青少年教育方針と比較検討した結果、余りにも感ずるところが大きかったからである。もちろん、大韓民国の教育制度にも二、三の矛盾を感じないわけではないが、それでも、これこそ正しい意味の教育だという深い感銘を受けたからである。教育とは人間の良心と、社会的な条件の中で個人を啓発、自覚させ、目を開かせてやる仕事ではないだろうか。こうして得た開眼こそ、最も偉大な洞察力と判断

力、ひいては信念を生み出してくれる要素だと思う。

私は、海州高級中学校で共産主義の教養、軍事学、いわゆる〈金日成回想記〉を学んだ（これを学ぶことだといえればのことであるが）。

とくに、北韓カイライ集団は金日成を神格化することに、血眼になっている。いわゆる「金日成命題」というのがある。金日成が行なった主な演説の内容のことをいう。「金日成命題」は、絶対的な真実であり、宇宙をも創造し得る神通力を、少くとも北韓の社会では持っている。中共の「毛沢東語録」は、その比ではない。金日成の言葉が、「命題」という名前で呼ばれているのを見てもわかることではないか。

「金日成回想説」は、装幀が特別豪華版のしろ物である。これといっしょに、「回想記研究ノート」というのが配られる。「金日成回想記」の研究用にだけ使う赤い表紙のノートである。第一頁には、原色刷りの金日成の肖像画があり、一頁ごとに金日成「命題」が印刷されている。

もう一つ、重要な学科に「党文献学習」というのがある。もちろん、「金日成命題」と同じように、「党文献学習ノート」もある。これは、一九六一年九月にあった、その当時のいわゆる「朝鮮労働党第四次全体大会」の諸文献を研究する科目である。学生たちは、北韓カイライ集団の高位層がしゃべった言葉たちを、面白かろうがなかろうが、読経を唱えるように全部暗誦せね

ばならない。

学生の組織体としては、まず各学級ごとに「社労青」の初級団体委員会がある。「社労青」は、いわゆる「挙国的」な組織体で、学校と職場単位にその支部を持っている。

これは、学生たちの政治活動の中心で、党の指示と干渉を受け、一人一人の学生がとても脱線できないように監視する。

そのほかに、初級団体「学級単位」総会などがあって、全学校単位の総会と「社労青」会議が、二、三日に一回づつ開かれている。

北韓の学生たちは、本当に同情に値する。まだ、骨もろくに固まっていない少年に、軍事訓練を行なっているし、これに劣らず、精神的な虐待を加えている。

言葉では、北韓カイライ集団治下、というけれども、そこは大きな刑務所、刑務所の中でもひどく規律のやかましい、刑務所の一つである。

北韓に生まれたという、たったそれだけの理由で、囚人になっている少年たちに、夢のような童話を聞かせてやる方法はないものだろうか。

金日成が一度行幸遊ばさるということに相成ると、夜中の午前二時に引っぱり出され、道路を水ぞうきんでふくようなはげしい仕事をさせられる幼ない被害者に、この世界がそんなことだけ

ではなく、もっと美しく楽しいこともあるという事実を、教えてやる方法はないものだろうか。

二十六歳から二十七歳になった年寄りの高級中校生の私にも、ついに卒業式の日が近づいてきた。一九六二年五月から、私はまた別の心配ごとに悩まされた。

卒業すれば、また協同農場へ引っぱられて行くのではないだろうか？

私は、自分の気にくわない運命は、願い下げしたかった。私は、運命を自分の気に入るようにつくり変える準備に没頭した。

これは、卒業まえの高級中校生が持ちそうな野心や抱負などとは、おそろしくかけ離れた話である。抱負などというぜいたくなものは、はじめから持っていたことがない。私は、せめて泥沼にはまり込まないよう、あがくことでせいいっぱいだったのである。人間が、私が、それほど無力な存在と化する所、そこが北韓の社会である。鉄のカーテンとは、まさに鉄のカーテン以上のものでもなく、それ以下のものでもない、言葉そのままの鉄のカーテンなのである。

10、私の「大学推薦事業」

卒業期が近づくにつれて、學校の内部はそわそわしてきた。生徒たちは卒業後の深刻な将来の問題をおいて、やきもき気をもむのだった。

誰彼の別なく、皆が大學へ進學したいはずである。しかし、行きたいからといって、行ける大學ではない。成績がよいからといって、行ける大學ではない。特別な才能やすぐれた素質を持っているからといって、行ける大學ではない。

大學に入る当者は學生であるが、行く行かないの決定は、學生自身が下すのではない。あまつさえ当のご本人が意見を述べることさえもゆるされていない。學生は、大學という存在に対して、全く受身の立場に立たされる。

全てを決めるカギは、すなわち彼の家族状況と成分である。家族状況が悪い者、成分のよくない者は、大學へ入ることをゆるされない。いや、入學志願を行なうことさえも認められない。

いわゆる「大學推薦事業」というのが組織されだ。実にさまざまの奇怪なことが多いが、いったい「大學推薦事業」ほど、常識の理解を拒む奇抜な制度もないだらう。

もちろん、大學を象牙の塔や良心の殿堂、真理の住み家にたとえて、私は北韓の大學のことを云っているのではない。北韓の大學を、そのような言葉で、定義することはできない。彼らも、大學をそのように考えない。大學は、ただ共産党訓練を行なうための訓練場に過ぎない。そこで、始めて「大學推薦事業」という妙な制度が生まれる。これが実情である。

彼らは、學校差はないと主張する。しかし、學校差は厳として存在する。いわゆる「金日成大學」、「金策大學」などは、どんなに優秀な秀才でも入ることのできない共産貴族だけの大學である。學校差がないのではなくて、もっと高圧的な學校差を認めておくわけである。

大學推薦事業の名のもとに行なわれることは、卒業予定者の成分調査である。

學生は、受身の立場に立つ。自分の意思で、大學を選択する資格を持っていない。大學の選択志願は、學校当局が一方的に行なう。卒業予定者の希望にはおかまいなしに、高校当局が勝手に、選択した大学へ、その生徒の志願書を送るわけである。

私は「元山水産大学」へ行きたかった。水産大学であるから、そこを卒業すれば、船を乗るこ

とができるだろう。船さえ乗れば、脱出は容易になる。うまく行けば、脱出も夢ではなくなる。私は、心の中でこのように計算した。

しかし、これは全く私一人の思惑に過ぎなかった。

学校当局が、私の意思を聞き入れてくれるはずがなかった。成分調査の結果、私はきわめて、危険な人物だと規定されたからである。

学校では、私の入学願書を「江界畜産獣医大学」に出してしまった。

私がどんなにじたばたしても、それはどうすることもできないのだった。ところで、この「江界畜産獣医大学」であるが、ここはしばしば定員不足になる大学であった。大学というよりも、一種の講習所といった方があたっている。私は、彼らの手で、鋳型にはめこまれていく自分の運命を、遠くの方から眺めているよりほかには、どうすることもできないのだった。

それでは、私はなぜ、大学へ行こうとしたのだろうか。もちろん、学問をしたい気持がなかったわけではない。しかし、それよりももっと大きな理由が、別なところにあった。

協同農場からの脱出、これであった。

北韓カイライ集団の組織は、緻密に行き届いていて、なんらかのきっかけが無ければ、転出などはとても思いもよらないことである。ほかの地方へは、行けないような仕組みになっている。す

ぐにばれてしまう。たとえ、うまい具合に、よそへ転出できても、どんな活動もできない生ける屍になるのが普通である。

個人はただ、「国家」の附属品に過ぎない。個人は、自分の意思や考え方を持つことができない。たとえ持っていたにしても、それを公けにすることはできない。

組織と制度のつくりが、そのようにできあがっている。個人はただ、大きな歯車と噛み合ってぐるぐる回転している機械の中の一個の歯に過ぎない。その歯は、与えられた位置と任務を果たすことによってのみ、ようやく存在の価値を認められている。

それを、愚かにも拒んだり、忌避したら、立ちどころに大きな混乱が起こって、破滅がやって来るようにできている。

しかも私という人間は、その歯の中でも、いつも注目の対象になっている、ややこしい歯である。機械の歯車の歯としての自分を拒む道は、自殺以外にはない。

「大学」、これは私に、信川からよそへ行く唯一の大義名分を提供する。言いかえれば、大学へ行く人は、それにともなうさまざまな「書類」を手に入れることができる。これは、余りにも当然のことであったが、私にとってはその当り前のことが当り前でない。余りにも貴重な、是非とも必要なことだったのである。

まず、引っ越しを認める特権「書類」をつくることができる。それに、殆んどの大学が都市にあるものだとすれば、農村から都会の進出を認めた「書類」をつくる特権が与えられるのだ。北韓の社会では、並大抵の理由では、農村から都会への転出をゆるさない。私は、「大学」をふりかざして、この黄金の「書類」を手に入れることができる。

しかし、事態はお先まっくらであった。自由な実力競争によって、大学の入学が決まれば、どんなによいだろう。北韓ヵイライ集団の方針では、実力など問題ではない。実力などはどうでもよい大学の選択、ここに悲劇があった。

私の入学願書は一方的に、「江界畜産獣医大学」に送られたが、「合格通知書」が来ると期待するのは、身の程を知らぬ思い上がりというものだ。

成分が悪いから、「不合格通知書」が来るのは、火を見るよりも明らかであった。私の場合、不合格通知書は死刑の宣告にも似ている。私は、なすすべを失ない、泣き泣き協同農場へ引きづられて行かねばならないからであった。

時間が、日一日と経つのが、ちょうど刑の言渡しを受ける日を待つのに似た。あせりと、そしてもどかしさを感じさせるのだった。

あたう限りの方法を考えてみた。おいそれとうまいテが見つかりそうでなかった。「救われよ

うのない」絶望の深淵が、日一日と迫って来るような気がした。

ともかく、どんなことでもしてみることに決めた。このまゝおとなしく坐って待つよりは、どっちみち「もがいてみる」必要はある。どうせことは狂ってしまったのだから、最後のあがきでもしてみた上で、運命を受け入れてもおそくはないと、肚を決めた。それは、死にもの狂いの勇気であった。

「江界畜産獣医大學」の通知書は、本人に手渡されるのではない。合格不合格は、本人の問題であったが、通知書は出身高校の校長あてに送られる。

これが、まず一つの難関であった。

不合格通知書が舞い込んで来るのは、はっきりしているが、それを私が受け取るのではなく、信川高中が受け取る。じたばたしょうにも、できない仕組みになっている。

それで私はまず、郵便配達夫に近づきはじめだ。偶然に出会ったようなそぶりで、信川高中へ手紙を配達する彼に会った。煙草をすすめながら、それとなく話しかけた。

配達夫は、あっけに取られた。

私はすかさず、用件にふれた。私がこんど、「江界畜産獣医大學」に入學願書を出したので、近いうちに合格通知書が来るようになっていると述べ、それを少しでも早く見たくてだまらない

から、學校へ配達するまえに、まず僕に見せてくれないだろうかと、相手の反応を打診した。
郵便配達員は、びっくり仰天し、とんでもないことだと頭からはねつけだ。誰を殺すつもりで、そんな大それたことを頼むのかと、劒もほろろの返事であった。しかし、私は引き下がらなかった。
あなたが責任を負うことは何もないと、彼をなだめだ、それを少しでも早く見たい受験生の気持を察してくれとせがんだ。
その日は、通知書が来ていなかった。
その次の日も、郵便配達の時間を見はからって、横町で待っていた。配達員は、私を警戒するそぶりであった。
その日も、通知書は来ていなかった。私は、あせりで居たたまらない気持であった。配達員には、糧券二枚のそでの下を使い、次の日も横町でひそかに待っていた。
通知書が来たのは、四日目である。
横町で待っていると、
『今日は、閔同志のが来ましだよ』
配達員は、自分のことのように喜びながら、ニコニコと笑った。

私は、体中ががたがたと震えるのを感じた。配達員は私に封筒を渡してくれた。発信地は、江界市厚昌洞「江界畜産獣医大学」、受取り人は、信川高中教務課となっており、受取り人の下に、小さく私の名前が書き加えられていた。

私は、さっそく家にとんで帰り、封を切ってみた。

予想したとおりの不合格通知書であった。

体中の力が抜けた。不合格通知書が来るとは予想していただけれども、それでも実際に手にしてみると、いっそう気が滅入るのだった。

それは元来、合格通知書の用紙であった。「合格通知書」と大きな活字で印刷した頭書きの前に、「不」の字をインクでなぐり書きしてあった。

そして、その下に印刷された内容（合格者の注意事項）は、インクの線二本が引かれていた。

私は、これを見た瞬間、合格通知書を偽造してやれと心に決めた。インクで書いた「不」の字と、その下に引かれたいいかげんな斜線二本、これを消すことにした。

こうすれば、不合格通知書が立派な合格通知書としてまかり通る。これさえできれば、そこに押されてである大学の官印は、私のために殆んど奇蹟に近い威力を発揮するだろう。

すぐにでも漂白剤を求める方法を考えてみた。洗濯屋一ヵ所ない信川邑で、漂白剤を手に入れ

ることは、難しい話であった。

それでは、やむを得ない。まず、通知書を封筒の中に入れて、しわくちゃにした。紙をよごすためである。

次にゴム消しで、「不」の字を熱心にこすりはじめだ。「不」の字の上に、水気をおびだ石けんをなすりつけ、さらにゴム消しでこすった。

「不」の字でないほかの場所にも、わざとゴム消しを使い、石けんをなすりつけた。三十分ばかり続けると、よく調べて見ない限り、わかりっこなさそうな、立派な「合格通知書」一枚ができあがった。

これくらいならば、「退去登録証」を受け取ることはできるかも知れないと考えた。

合格通知書を偽造する目的は、なんとかして月成里の役場から退去登録証を受け取るためであった。大学に合格したので引っ越しをしたいと云えば、どんなに厳しくこまかい連中であっても、しぶしぶ退去登録証を出してくれないわけにはいかないだろう。

時間がない。運を天にまかせて、月成里役場に行き、あたってみることにしょう。

私は、ひっきりなしに煙草をすいつづけながら、歩いて行った。どうしても、興奮と焦りを抑えることができなかった。

ゆっくりと落ち着いて、しかしす早く、そして悠悠と、里の役場に足をふみ入れた。
すでに、退勤時間が迫っていた。そのせいなのか、それともどこかで大きな行事でもあったのか、役場には、職員が二名しか居なかった。
もっけの幸いだ、と私は内心ほくそ笑んだ。しかも、その二人のうちの一人は、私と仲のよい張泰武という男であった。
私は、張泰武のそばに近づき
『やあ、どうもごくろうさん』
と言葉をかけた。
『やあ、しばらくぶりですね。どんな用事でここまでいらっしゃいましたか』
『そのことなんですがね、今日、合格通知書が来たのです。協同農場のためには、畜産獣医大学がよいだろうと思って、願書を出しておいたところ（これは嘘だったけれども嘘も方便である）今日、合格の知らせが舞い込んだのです。それで、おわかれのあいさつのかたわら、退去登録証も出してもらおうと思いましてね。ここから出ている期間はながくて四年ですから、また戻って来るには来るわけだけれども、法律は法律なので……』
と私はしゃべりつづけた。

張泰武は、私の話をすっかり信用してくれるようすであった。私は、いっそう平然さをよそおい、合格通知書の封筒をちらと見せた。しかし、封筒を彼に手渡しはしなかった。私の表情は、のんびりとかまえていたけれども、内心は気が気でなかった。向こうが、通知書をくわしく調べにかかったら、万事は休する。私は、きわめて自然に、「江界畜産獣医大学」とゴム印の字を彼に示し、封筒を少し横へずらした。

張泰武は、少しも疑がうそぶりを見せなかった。引き出しから、退去登録証を出し、さっさと書き込みはじめた。

『えゝと、行き先は？　ああ、その通知書を見せて下さい』

私は、手に汗を握った。封筒を彼の方へ押しやった。彼は、鼻歌まじりで封筒を開き、通知書を引っぱり出した。

『江界市厚昌洞ですね』

彼は、こう云いながら、通知書をのぞき込むと、退去登録証にせっせて書きこんだ。

通知書は、いぜん彼の手にあった。もし、少しでも不審な点を発見し、通知書をのぞきこめば、カラクリがばれてしまう。

しかし、天は私に味方した。書きおえた張泰武は通知書を封筒に入れると、私に返してくれ

た。

『明朝、来て下さい。今は、委員長がいないので、ハンコをおすことができないのですよ』

『どうもありがとう』

こう云って、私はそこから離れた。

その夜は、私は一睡もできなかった。明日の朝、官印をおしてくれるはずの委員長が、なんだかんだと詮索するかも知れないと思うと、とても目をつぶれなかった。しかし、もはや矢は弦を離れたのだ。

翌朝、里委員長はいかにも不快げに、私をにらみつけたが、幸い、詮索がましいことは何も云わなかった。官印がポンとおされたとき、私はこの地球上で、まだ生きていてもよいという許可を得た気持になった。

外へ出ると、全てが別世界のような気持になった。しかし、まだ油断はできなかった。私は、信川邑に向かって走り出した。通知書を配達員に返す仕事が残っていたのだ。そうしないと、配達員が学校へ配達することができなくなる。

やっと、配達員に会うことができた。配達員も、相当に気をもんだらしく、私を見ると、プンプンに怒った。

彼は要するに、学校へ配達することはできないと断った。江界大学からきたほかの通知書は、昨日全部配達してしまったのに、今日私の分だけ別に配達すれば、怪しまれるだけだと突っぱねた。

彼の言い分にも筋は通っていた。

私は、ここで心を決めた。学校に通知書を配達するのはやめよう。どうせ、江界大学には行かない身分だ。たから高中でどういうことになろうとかまわないではないか。

手に入れたかった「退去登録証」はもらってあるではないか。これをつくるために必要だったのが、合格通知書ではなかったのか。私は、配達員とわかれ、そのままさっさと月成里へ帰って来た。

私は、ひと晩中思案に思案を重ねた。これからは、家を去るのだ。翼ができたような気持だった。翼にしては、余りに重たく、不便な翼ではあったけれども。

さまざまな感慨が、あとからあとからと湧き、私はしみじみとした気持になった。これからの私はどうなるのだろうか。どこへ行って、何をすることになるのだろうか。

しかし、問題はまだ残っていた。まず必要なのが、「食糧停止証明書」であった。これを持たないで出ることは、まるで銃を持たずに戦場へ出かける兵隊と同じようなものである。

まえまえから気にはしていたが、「食糧停止証明」は、どうしても必要な書類であった。

翌日、私はハンコ屋に勤めたことのある友人に会った。彼にいくらかのお金を渡し、偽造ハンコを作る仕事に取りかかった。「食糧停止証明書」をつくるためである。

それでは、この「食糧停止証明」とはなんであり、なぜ、それが無くてはならないものなのか。北韓には「配給通帳」というのがある。いわゆる「国家の食糧の配給」を受ける人は職場で働いている人たちである。

都会で職場通いをしている人は、雀の涙のような月給と、配給通帳を受け取る。この配給通帳がないと、食糧の配給を受けることができない。

配給通帳を持っていない人は、協同農場に集団収容されている農民だけである。協同農場で農業に従う人は、配給通帳の代りに、協同農場の穀物から現物分配を受ける。

なぜ、このような制度をつくったかは、はっきりしている。

農業は、天下のもといだと盛んに農民をはやしたてるけれども、穀物を生産している農民でありながら、お米のご飯よりもお粥を常食のようにせねばなりない有様なので、いっそのこと都会へ出て、電気の光りでも見て暮らそうとする人があとを断たないのである。この離農を防ぐために、配給通帳制度なる代物をつくり出しておいた。

すなわち、集団農場に所属している人は、たとえ都会に出て来ても、配給通帳を手に入れることができない。また就職も保障されていない。

「食糧停止証明書」は、配給通帳を持っていたということの証明書である。甲地の勤務さきから、乙地の勤務さきへ転勤になった場合、甲地の勤務さきで、それ以上の食糧の配給を受ける必要がなくなるので、「食糧停止証明書」をこしらえて貰う。これは、甲地の勤務さきから貰っていた食糧の配給を停止したという証明書であると同時に、乙地の新しい勤務さきに行って配給通帳を新しく交付して貰えるということの証明書でもある。

もう少しくわしく説明すると、穀物の絶対需要量がいつも不足がちな北韓においては、穀物は黄金よりも大事なものである。それで、穀物の自由売買は、想像することもできないのであって、全ての穀物はいわゆる「国家の食糧」か、あるいは「協同農場の食糧」であらねばならない。

協同農場の食糧は、いわゆる「国家」に供出した残りを、農場員全体に分配することになっているので、配給通帳がなくても、そのまま労力者と非労力者を計算して、分配にあずかる。

一方、いわゆる「国家の食糧」は、必ず配給を通じて、手に入れる仕組みとなっている。すなわち、「国家の食糧」の配給を受ける人の名前は、全部台帳にのっている。配給通帳を交付する

所は勤務さきでなく、その職場を通じてほかの役所がこれを出してくれる。

人間の頭かずを、食糧という生存に必要不可欠なものによって、ぴたりとおさえているのが、すなわちこの配給通帳制度なのである。

だから、私のような立場にある人は、とても都会へ進出することができない。ほかの協同農場にも、自分勝手に引っ越そうと思って引っ越せないわけである。これを奴隷といわずに、なんと呼ぼうか。

父が協同農場の組合員であり、私もまたそうなっているので、命の綱である「食糧停止証明書」を手に入れようがないのであった。

北韓に自由がないというのは、まさしくこの状態をさしていう。大犯罪をおかしていない限り、年から年中、鉄のクサリでしばりつけておくわけにはいかないが、それにも拘らず、奇妙な制度を取り入れて、身動きもできないように抑えつけておいた。

全てが、いわゆる「国家の所有」であり、とるに足らない行動一つ一つまでも、いちいち＜国家の許可」を仰がねばならない。こんな所に、自由があろうはずが無い。「国家」をつくったのは人間であるが、「国家」を左右しているのは人間だけではない。制度と組織が、「国家」を運営しており、人間は全くそのような組織と制度に引きずり回わされる羽目になる。

私が、どうしても「食糧停止証明書」を手に入れようとしたのは、このせいである。これが、とても生やさしい冒険でないのは、「国家」そのものへの反逆であり、「制度と組織」を無視することに通ずるからである。

私が望んでいる目的そのものは、たとえ単純素朴なことがらであり、それによって得る利益の大きさもたかが知れたものであっても、食糧配給通帳を偽造する仕事は、青春をかける勇気と決意がなくてはできないことであった。

その日の午後、私はハンコほりの技術屋さんを家にともない、部屋にカギをかけて、ハンコほりに取りかかった。

「食糧停止証明書」に必要なハンコは、実に七種にのぼった。あきれかえりたくなる話だ。

こうして、私はニセ証明書づくりに取りかかった。元来、「食糧停止証明書」の用紙は、印刷された所定のものがあったが、私の力ではそれを手に入れることは不可能である。幸い、その用紙はそう多く出されていないので、辺地では、往往にペンで書いたのを利用する場合もなくはなかった。

私は、人を通じて、その書式がどういうふうになっているかを、あらかじめ調べておいた。書式どおりに書き、記入した。

父が、いわゆる「国営機関」に勤務していないと、「食糧停止証明」が成立しないので、まず父の職場をデッチあげることから始めた。こうして私の父は、「国営果樹農場」に勤める人になった。(父が職場に勤めている事実だけをもってしても、私の食糧停止証明をつくることができる。それは、父の配給通帳の食糧を私が食べていたならば、私もその職場の食糧を食べたことになるからである。)

すっかり書きおえた書類にハンコをおす段階になった。その時、使ったハンコをあげてみると、

① 〈国営果樹農場の官印〉
② 〈国営果樹農場食糧責任者の印鑑〉
③ 〈信川郡人民委員会の官印〉
④ 信川郡収買糧政部長の印鑑
⑤ 食糧供給該当普及所の官印
⑥ 食糧供給該当配給員の印鑑
⑦ 父の実印
⑧ 私の実印

こうして、一枚のニセ「食糧停止証明書」がつくられた。

私は、大きくタメ息をついた。こうしておけば、どこへ行っても就職に必要な書類はできあったわけである。次の問題、すなわち就職ができるできないは、私の能力にかかっているだけである。

実力対実力で競争すること、または能力をふるってやりとげることには、ある程度の自信があった。問題は、私がどんなに能力をふるってみたくても、それを無条件に抑えつけるところから生まれた。

もはや、ぐずぐずしている必要がなかった。ながくもたついておれば、かえってことがバレルおそれさえも無くはなかった。

世間にハヤシ大鼓でふれ回る必要もないことだ。私が飛び出すということは、家族の者に心の痛みを与えた。私は、あいさつをせねばならない人たちの所には、いちいちあいさつに回り、それとなく別れを告げた。

こうして、いったん出て行ってしまえば、これからどのような運命の火の粉をかぶるかは、誰も知らないことだった。すべてが裏目に出て、からくりがばれる場合には、最悪の事態を覚悟せねばならないのだった。

父は、家宝のように大事にてしいた柱時計を手放した。いわゆる「国営受売商店」に持つて行き、約百余円のお金に代えた。日本製の腕時計が普通、四百円はしたのだから、大変な安値でたたき売ったことになる。

百円は、私にとっては大金である。私は、いくらかを家に残しておきたかったけれども、母は、よそを旅する人にはどんな苦しみが待っているかも知れないと、無理矢理に、全部を私のポケットにねじこんでくれた。

少なくとも、三ヵ月は放浪生活を行なうとすれば、たとえ旅館に泊らず、露宿をしても、これぐらいのお金は必要だという計算が出てくる。

次の問題は糧券である。糧券がなければ、ご飯を食べることができない。お金は役に立たない。

家にあった食糧が洗いざらいはたかれた。隣り村の、いわゆる「国営食堂」の従業員に知り合いがいた。その人に食糧をやり、その分だけの糧券を手に入れることができた。二百グラム分の糧券百余枚が準備できた。

時は、一九六二年七月十四日。

その日の夜、私は両親の前にきちんと坐り、深くふかく頭を下げて、最後のお別れを告げた。

次の日の明け方、私は小さな風呂敷包み一つをさげて、家を出た。見送りに出て来てもよい状態ではなかったのに、それでも母は二キロばかりついて来た。

母がハンカチを濡らしながらクビスを返した瞬間、私は一人ぼっちになった。この広い世の中で、私はまったく自分一人だけになった。

11、鴨緑江は濁っている

朝六時半ごろ、私は信川駅から長淵線の汽車に乗った。長淵線は、長淵と沙里院の間を往復する支線である。その当時までも、狭軌の路線がしかれていた。おもちゃのような汽車は、朝日が黄金色の光りをふりまく野原を突っきり、のろのろと走った。

乗客の殆んどは、協同組合と水産組合関係の人たちであったが、ところどころに、幹部職らしい人の姿も見えた。汽車の中は、すし詰めの超満員であったが、そんなことは一向気にならなかった。見慣れた山や野原に、ひそかな別れを告げながら、私は一人で、涯しない感慨にふけった。

おそらく再び、このふるさとを見ることはないだろう。二度とたずねて来ることができなくなるかも知れない。汽車は、載寧江をわたり、東の方へひたすら走り続けていた。終着の沙里院に着いたのは、朝九時を過ぎてからであった。

沙里院は、汚れた町である。交通の中心地として発達した都市なので、街路が黒くよごれ、人の性格もあらっぽい。「黄海北道人民委員会」の所在地になってからは、多少の発展のあとも見えたけれどもほこりっぽい道と、なんの飾りつけもない、駅前広場の寒々としたひろがりが、気に入らなかった。

心はいらいらして落ち着かなかった。沙里院までは出て来た。これからはどこへ行けばよいのか。行き先はどこだ。僕の安住の地はどこだ。

脱出計画と取っ組んでいた時には、飛び出すことだけに熱中し、そのあとのことは考えなかった。しかし始めて見る町、皆が私をかたきでも見る目つきで対する町、この見知らぬ土地に立つと、新しい不安と悲哀が胸を緊めつけた。

沙里院に知人がいないだろうかと考えてみた。はじめに家を出る時は、京義本線に乗って、平壌でもどこでも行きあたりばったりに行ってやろうと思った。しかし、それは余りにも雲をつかむように漠然としている。幸い、沙里院紡績機械工場の友人のことを思い出した。

私は、沙里院の市街を出はずれ、工場を訪れた。その友人は、仕事時間中だったが、あわてて出て来た。一別以来の握手を交わしたのち、私はその友人に、事情を話した。そういうようなわけで、就職口を探しているが、いいクチは無いものだろうかと聞いてみた。

友人は、私の無茶な行動にあきれたのか、苦笑を浮かべながら『新義州へ行って見たら?』と云った。

『ええ、新義州ですか?』

新義州は、私の頭の中でも、さいはての地になっていた。名前だけはどこかできいたことのある外国の地名のような珍しい土地であった。

『新義州水産事務所で、運動選手を募集しているらしい』

その友人は、このように答えてくれた。

『うまい具合いに就職ができるだろうか』

『それは、行ってみないとわからん。どこかで、そんな噂を小耳にはさんだ程度なんだから』

その友人も、思案に困った表情であった。

『うむ。それでは新義州に行くことにしよう』

『はっきりした目あてもないのに?』

『どうでもいゝや。行けばなんとかなるだろう』

私は、自信たっぷりで答えた。自信はあった。

しばらくの仮の定ではあるが、これで行き先も決まった。わずか五、六時間の間に、行き先が

現われたわけである。
私はあつくお礼を述べ、再び沙里院の駅の方へ歩き始めた。行きながらせっかちに振舞ってはいけないと自分に言いきかせた。新義州行きと決まったから、大船に乗ったつもりで、沙里院見物とでもしゃれてやれと思った。
公園に行き、約二時間を寝ころんで過ごした。夏だったので、公園は緑に包まれていたが、人影はまばらで静まりかえっていた。芝生に寝ころんで、将来のことを考えながら、自分自身を楽しくからかって見る程の余裕が出た。
その夜の十二時、私は新義州行きの京義本線の客となった。超満員であった。ソ連製の「クーペ」客車は、二重窓になっているばかりか、乗客が自由に開けたり閉めたりすることもできないので、その暑苦しさは想像をこえた。しかも、客車の内部構造が、十部屋ぐらいのコムパートメントに区切られているばかりか、超満員になっていたので、歩くこともできず、一カ所に釘づけにされていなければならなかった。
私は立ちどおしであったが、疲れは一向に感じなかった。真暗な夜が明ければ、現われるに違いない新義州が、果してどんな町なのだろうか、噂でしか聞いたことのない鴨緑江はどれくらい大きな河なのだろうかなどと、来るべき運命の地のことについて、あれこれ思いめぐらしてい

た。

検査を二回受けた。その都度、「食糧停止証明書」と「退去登録証」を示した。検査員は、「公民証」の提示も求めた。少くとも私の持っている証明書は、(それが偽造であることをのぞけば)完全なもので、少しも怪しい点を発見することはできなかった。検査員も、私という人物を信用する以外には、方法がなかっただろう。

平壌を過ぎた時分、東の空がぼんやりと明るみがかってきた。山嶽と平野には、ふかい霧がかかっていた。山と平野、ここの自然の姿は、黄海道のそれと違ってひどく険しく荒涼としていた。それで外国をあてもなく旅行している感じさえ抱かれた。汽車が終点の新義州駅に着いたのは、九時四十分ちょっと過ぎてからであった。私は、外に出た。人口二十余万の新義州の町が目の前にひろがっていた。

新義州は、鴨緑江を胸の内に抱き込んでいる町というよりも、鴨緑江にしがみついているような都市である。地帯が、鴨緑江の水位よりも高くない。かえって、鴨緑江よりも低いのだ。それで、河べりには、とても高い堤防が築かれている。

夏になると、白頭山から流れて来る水かさが増し、鴨緑江ははんらんする。洪水騒ぎが、殆んど毎年のように起こる。新義州の市民は、疎開し、町は黄色く濁った泥水の中に沈む。

駅の前には公園があり、安全部の庁舎があり、金日成の肖像があり、そして大きな宣伝幕がかかっていた。私は、通行人に水産事業所の方へ行く道を訊ねた。

その人は、けげんそうな目つきで私を見ながら、鴨緑江の方へ行けばよいと答え、忙ぎ足で駅の中へ消えた。私は、鴨緑江の方へ向かって歩き出した。

河のにおいが、強い夏風に乗って、私の鼻を刺戟した。魚くささがしみこんだ、あるいは長白山脈の山のにおいがただよっているような、河のにおいであった。これが、はじめて見ようとする鴨緑江という河へのふくらんだ期待を、いっそう強くかき立てた。

昨晩から一食もしていなかったが、空腹を少しも感じなかった。私は、堤防に立った。鴨緑江は、濁水をかかえ、ゆったりと流れていた。

少し下流の方に、国境の橋「安東鉄橋」が見えた。昔は、複線であったが、その一つは破壊されてしまった。巨大な橋の両がわには、軍服の色が異なり、物腰もどことなく違う北韓カイライ集団と中共の警備兵が歩哨に立っている。

はじめて見る鴨緑江は、私にとっては海のようであった。その幅約一千五百メートル、この河を渡ったところは、中共治下の中国本土。私は生まれてはじめて、外国の土地を見つめているのだった。

河の向こうに、鎮江山がそびえている。安東の市内も目に入った。霧を貫いて、ががとした山脈が東西に連なっている。

今度は、頭をかえして、新義州の町の方を見た。水産事業所は、私の坐っている所から右の方の河岸一帯をいうのだろう。大小さまざまな船が停泊しており、百五十トン級の船等も岸の近くで、岩のようにがんばっていた。

私は、船を見ていた。船に乗ることさえできれば。そうすれば、鴨緑江をわが家の庭のように自由に出入りし、海に出ることができるだろう。

海、それは私にとり、あこがれの「母音」であった。この海は、砂浜だらけの海州一帯の海と違はった海だろう。若い魂を強くかき立ててくれる海、まるで鴨緑江という大きな乳ぶさをおいしそうにしゃぶっている大きなけだもの、うごめく竜のような海だろう。

ややあってから、私は新義州水産事業所に向かって、歩きはじめた。私の目に、新義州の市街地が入り、その向こうには広広とした平野がかすんで見えた。私は、まるでわが半島全体を見下ろしているような気分であった。

私は水産事業所につき、そこの守衛に云った。

『ここのバスケット部の選手たちに会わせて下さい』

ごつごつした平安道なまりの返事がかえってきた。合宿所の方へ行って見なさいといわれた。魚くさい空気に頭のシンまで重たくなるような埠頭場を横切って、合宿所に入った。合宿所は、がらあきになっていた。

やがて、お昼時間になると、各種別の選手たちが、どやどやと入って来た。私は、バスケットの選手をさがし出し、自分を紹介した。バスケット・チームをつくるという噂をきき、「黄海南道」くんだりから、はるばるやって来たことを述べた。

相手はとても喜んでくれた。バスケットの選手のメンバーが足らないので、困っていたところだと云い、うまくやってみようと乗り気になった。その選手といっしょに、コーチに会った。

コーチは、お昼時間が過ぎてから、いっしょに練習をしてみようと言った。要するに、いちどテストをしてみようということであったが、その口ぶりや態度には、早くも私を同僚の選手として遇しているところがあって、私は気持がよかった。おひるも、ごちそうしてくれた。

私は、練習に加わった。コーチは、私のプレイがとてもよいとほめてくれた。テストには合格したわけであった。私は、新義州水産事業所のバスケット部に所属する身となった。

「八・一五解放記念体育大会」に参加するため、あわてて組織したのが、バスケット・チームだったので、チームワークが全然取れず、水準も高い方ではなかった。

水産事業所からきまった仕事をやらせられたことはない。ちょうど雨季に入り、材木が上流から流れてきたときには、それを引き上げるのに動員させられ、ひどい目にあった。そして、どしゃ降りの雨の中で、岩のようにでかい氷を船に運ぶ仕事もやらされた。船には冷凍施設がなかったので、夏場は氷が必要であった。

もちろん、室内バスケット競技場などはありつこなかった。私たちは、新義州高等医学学校のコートを借りて、練習をした。八月十五日が近づくにつれて、練習ははげしくなった。荒らっぽい運動選手たちとは、ウマがあった。私は、成分をいつわっていたが、もはやそんな心配はしないことに決めた。

八月十五日がやって来た。体育大会は、新義州「十月競技場」で開かれた。「十月競技場」の名前は、ソ連の十月革命にちなんでつけたものである。

第一次戦を亀城紡績チームとの間に持った。

亀城紡績チームは、とても弱いチームであった。しかし、私たちの方は、チームワークがなっていなかった上に、コーチの作戦が悪かった。私たちのチームは、わずかのポイント差で惜敗の番狂わせを演じてしまった。

第一次戦で負けちゃったのだから、バスケット・チームの運命は、いわずとも知れていた。北

韓では体育大会が終ると、選手たちを追い出してしまう場合が少なくないのに、あまつさえ第一次戦であっけなく負けたのだから、文句の言いようがなかった。

果して、予想どおりの事態が訪れた。競技が終り、数日を経過したが、事業所からは一向に就業命令が来なかった。月給さえもくれない。要するに、さっさと出て行ってくれと、口では云わなくても、そうして欲しい態度である。

心配ごとがどっとふえた。どこへ行けばいいのか。故郷へ行くことはできない。それでは?たよれる所も無い一人者だ。しかも、ほかの社会とは異なって、息も自由にすえないほど、鉄の組織が行きわたっている共産社会のまっ只中に投げ出されている。私は、大海で遭難した船の船客に似ていた。どうすればよいのだ?

遅ればせの降雨シーズンに入り、雨が毎日のように降り続けた。合宿所に使っていた建物は、もともと倉庫だったので、湿気がひどく、皮膚病さえも発生した。一日中寝ころんで、これからの身のふり方を考えてみたが、妙案はうかばなかった。

選手たちが一人二人と姿を消した。数十名もいた数が、朝起きてみると、一人づつ減っていく。最初からようすがかんばしくないので、よそへ行って職場を見つけることにしたに違いなかった。

しかし、私はそこからよそへ行ける境遇でもなかったし、行く所も無かった。八月十八日頃までには、一人も居なくなり、私だけがぽつんと残った。困まってしまった。進退に窮するとは、このことであった。

私もともかく、立ち去らねばならないのだった。ぼんやりとして居続けたら、あとにはとんでもない濡れ衣さえかぶされかねなかった。それは、さきに出て行った連中らが、ブランケット類をねこばばして消えてしまったからである。

どこへ行こうか。私は、亀城紡績工場の方へでも行ってみようかと考えた。体育大会で、私たちのチームが負けたその相手チームである。そこの選手に会って、事情を打ち明け、力になってもらおうと思案した。なるならぬはこの次の問題であった。ほかにアテがなかった。

背のうをかついで、水産事業所の正門へ向かって歩いて行った。やりきれない気持で、そぞろわが身があわれになった。

ちょうど、この正門まえで張大衡に出会った。合宿所暮らしの短かい期間中に、あいさつをしたことはあるが、言葉を交わしたことはなかった。

その張大衡が、親しげに声をかけてきた。

『どちらへいらっしゃるのですか』

彼は、こちらの気持も知らないで、こう訊ねた。
『出て行くのです』
自暴自棄の私は、こう答えた。
『どこへ行くというのですか』
張大衡は、私のことが気になるらしく、重ねて問いかけた。
答えてもはじまらないと思ったが、いちおうの説明をした。ほかの選手たちが全部行ってしまったこと、事業所からは一向に就業命令が来ないこと、もはや食事さえも出してくれないこと、だから立ち去るよりほかに方法が無いではないか。私は、ざっとこういう事情を説明した。
張大衡は、私をとても助けてやりたいそぶりであった。彼の気持は嬉しかったけれども、別に妙案があるわけでもなかったので、そのまま足をふみ出していた。
『待って下さい。立ち去る時は立ち去ってもですよ、副支配人におわかれのあいさつぐらいして行っても損にはなりませんよ』
張大衡は、こう言うと、いっしょに副支配人に会おうとさそってくれた。
彼の言葉によると、副支配人はスポーツ好きである。そう云われてみると、私も副支配人と握手を交わしたことを思い出した。競技直前に、選手たちといちいち握手をし、しっかりがんばれ

とはげましてくれた。

私は、別に嬉しい気持にもなれなかった。副支配人に会ったところで、大したこともないだろう。私のようなよそ者を会ってくれるはずもない。

しかし、あたって砕けろの心境になり、大した期待もかけないながらも、張大衡といっしょに副支配人をさがした。

副支配人は、河べりの作業場に出ていた。「八・一五突撃戦」とやらで、増産運動のまっ最中であった。北韓カイライ集団は、「八・一五精神」をもって、高度の熱意をふるい起こし、増産目標を達成しようと盛んに呼びかけ、貝拾い作事を水産事業所の全職員にやらせていた。

私は、作業場で副支配人に会った。どうなってもかまわないと思っていたので、言いたいことを全部ぶちまけた。

事情をくわしく説明し、(もちろん成分が悪いということは伏せて) ここで働きたいと思うが、あっせんしていただけないでしょうかと訊ねた。

副支配人は、私に好意を持ったようであった。バスケット選手の中でも最後まで居残ったこと、あいさつに来たことなどが、彼の気持を動かしたらしかった。

『そうかね。働きたい人は働かねばならない。できるかどうかは知らないがね』

副支配人はこう云いながら、紙キレに何かを書き込み、手渡してくれた。
『これを持って、労賃部需給指導員に会いたまえ、一つ面倒を見てほしいと頼んでみるんだな』
私は嬉しくなり、何度もお礼を述べた。張大衡といっしょに歩きながら、再び希望が湧いてきた。
一人で需給指導員に会った。需給指導員は、副支配人のメモに目を通してから、難しそうな表情をつくり、頭を横にふった。
『そうですね。まあ、やってみることはみますが、うまく行きそうな気はしませんがね』
彼の言葉は、悲観的であった。副支配人のメモには、「できるだけ早く、関庚泰に仕事を斡旋すること」と書かれていたけれども…。
『他道(県)の人の就労は、禁止されているのですよ』
需給指導員は、このようにつけ加えた。
元来、クチを見つけて仕事につこうとする場合は、道(県)労働部の許可を必要とした。職場から上申すると、道(県)の労働部は、労力派遣証なるものを交付する。
『労働部に上申はしていただけますね?』
『ええ、それはしてみましょう。上申書は、できるだけ有利に書いてみます』

需給指導員は、おぼつかなげな表情であったが、ともかく上申書の用紙をひき出し、「食糧停止証明書」を見せてほしいと云った。

私は、偽造の「食糧停止証明書」を見せ、過去の履歴を教え始めた。海州の綜合機械工場に勤めていた経歴が、私の重要な経歴になった。成分、それはいつわらざるを得なかった。私は、「党員」でないと打ち明けた時は、一種のやりきれない悲哀さえも感じた。

受給指導委員は、できるだけ有利に書きいれでくれた。

それから、数日間を待った。ひょっとしたら、うまくいくかも知れないような気がした。それでも、すっかり安心してしまうわけにはいかなかった。ことを成り行きに任すほかに、方法はなかった。

待ちつづけたかいあって、八月二十四日、私は発令状を受け取った。道（県）の労働部が、私の就業を認めたのである。結局、運がよかったとでも云おうか。

私の職名は、新義州事業所所属の漁撈工。

漁船に乗って、魚をとる漁夫になったわけである。船乗りだ。一面では運命の現われぐあいにあきれたが、また一方では限りなく嬉しい気持にもなった。

船でする仕事は、どんなことであろうか、それはどうでもよかった。海へ出ることができるで

はないか。涯しなくひろがっている壮快な海、その海へ、うじ虫のわく、ゆううつな陸にわかれを告げ、進むことのできる大海―、あるいは世界のはてまでも、行こうと思えば行ける希望を与えてくれる大海ではないか。

私の船は、百四十六トン級の〈平新底引網船一五号〉であった。そして、船での私は甲板員。発令を受けた当日、副支配人を訪れて礼を述べた。需給指導員も会い、張大衡とも話し合った。

張大衡は私の手を取り、まるで自分のことのように喜んでくれた。こうして、偶然の女神の紹介で知り合い、力をかしてもらった張大衡とは、その後も引きつづき友情をあたためたが、結局は二人がいっしょになって自由世界のふところに抱かれようとは、その時は神ならぬ身の知るよしもなかった。張大衡もおそらく、それは考えていなかったに違いない。

私は、その日の午後、「平新艇一五号」を訪れ、船長以下船員にあいさつを行なった。それは、一種の「中告」でもあった。

翌八月二十五日、私は「平新艇一五号」に上がり、下手くそな船乗りの生活を始めたのである。船の汽笛の音、チリンとなる伝令機の音、船長が叫ぶ「海の言葉」、この全てが、私にとってははじめて経験する世界であった。

実際それまでは、船乗りの生活がどんなにつらいものであるかを、知らなかった。知りようがなかった。ともかく、はじめての重労働であったが、精神と肉体の続くかぎり堪えることであった。

ここでしばらく、「平新艇一五号」の由来をひもといてみよう。その船がどういう経路を通じて建造され、どんな性能を持っているかを。

「平新艇一五号」は、一九六一年九月のいわゆる北韓カイライ集団「朝鮮労働党第四次全党大会」の記念品として、労働者がいわば「国家」に贈呈する形式で建造された船である。船の附属品は殆んど外国製であったけれども、造船と設備だけは北韓で行なったものである。北韓カイライ集団の政策は、このように子供だましの策をろうして、遂行される。彼らは、何にでも適当な名目をつけるのに天才的な素質を持っている。「四次全党大会」は第四次全党大会以外のなに物でもないはずで、それがいったい農民や労働者とどんな関係を持っていると言うのか。

船の建造であれば、ただ建造すると素直に云えばこと足りるわけではないか。「全党大会の記念品として、労働者が国家に贈呈する」などと、ケツの穴の小さな思苦しい過程をひけらかす必要はないではないか。

ところが、その必要は充分にある。労働者が自発的に、船を建造したように見せかけるためである。労働者が上からの指示なしに、自ら進んで船一隻を建造することに決めたということになれば、純朴な彼らをもっと容易に使役することができるからである。すなわち、決まった労働勤務以外に、その船を建造する分だけ、よけいに働かせる名分が成り立つわけた。

こうして、六一年九月、全党大会といっしょに「華ばなしい進水式」が行なわれた。大変なお祝いごとでもあるかのような、お祭りさわぎを演じるらしい。労働者を讃え、ああだこうだとさわぐ例の決まりきったお祭りさわぎであったに違いない。

ところがである。この船は、進水式を行なった直後に、故障を起こしてしまった。そこには、おかしさをこえて、一種の悲劇感さえある。その直前まで、まるで人工衛星でも打ち上げたかのようにはやし立てていたカイライ集団のお偉らがたが、青筋を立てて怒った。見事な喜劇である。こうして船は、再びドック入りし、すっかりつくり直す大修理をくり返す羽目と相い成ったわけである。

修理にまる一年はかかった。一九六二年八月十四日に、ようやく操業に入るというナンセンスを演じたところが、操業のためいざ出港したまではよかったが、今度もまた故障。機関には異状がをなかったが、クラッチの接触がよくなかった。その修理に十日間を要した。

私が問題の船、「平新艇一五号」の甲板員になって出港した時は、その船にとっても、それがはじめての操業になるのと変りがなかった。言うなれば、全身これ傷だらけで故障連発のその船の由来も、私の過去も、似たりよったり身の上であった。

なにもかもが、生れてはじめて対する船の仕事であった。私は、あやふやな足どりと下手くそな手つきで、仕事にあたったが、船の仕事の中でも、いちばん面白くないいいかげんな雑役全部を任された。網をおろしたり引き揚げたりする時は、こん身の力をふりしぼった。手がはれ、息がつまった。

作業時間というものが、別にちゃんと決まっているわけではない。毎晩、夜中に起きあがって、網を引き揚げ、また降ろすのだったが、とった魚の処理もらくな仕事ではなかった。私は、船酔いにはかからなかったけれども、海上生活は、陸で育った私にとっては、やっぱり苦手の重労働であった。

約十日ほど、海で魚をとってから、船はひとまず帰港した。入港後の責任追及が大変であった。魚獲量が少なすぎるという追及から、労働者の血と汗の結晶として「国家に贈呈された船」ひいては「共産主義の船」を、船員たちが、丁寧に乗るどころか、かえっていいかげんに取り扱っていると、それは大変なお目玉であった。

しかも、そのような非難は、末端の中でもいちばんの末端である、私の上に、もっともひどく集中するのだった。

新義州は、見知らぬ土地だったので、海から陸へ帰って来ても、別に楽しいことはなかった。お金がないから、自分一人だけの部屋を持つ境遇にもなれなかったが、またはその必要もなかった。

合宿所で自分一人だけが、退屈な時間を持て余ますようになると、孤独感が身にしみ、両親の愛情がこいしがった。もっとも、そういう退屈な時間が、そうたんとあったわけではない。就職はしたものの、それが一身の出世に通じているわけではなかった。しかも、私自身にしてからが、世に出て名を揚げるなどといった大それた夢を捨ててしまってから久しいので、奴隷のように酷使されているという思いが私を支配した。

私たちの船は、九月初旬に再び出港した。

私は二度目の出港の時は、機関助手になった。一種の昇進である。海州綜合機械工場で機械を扱ったという経歴がものをいったわけである。

船の生活は、想像以上の苦しい肉体労働であった。

ただ、海の呼吸とたけり狂ったように飛び散る波頭の洪水、そして海の呼吸にさからいながら

進める作業、陽が船の右側からのぼって、左側の海に没する単調な毎日の経過、この全てこそ、私が全身全霊を打ち込んで愛することのできる唯一のものであった。

盲目的に、マルクス、レーニン、金日成しか知らなかった私も、この大海のまっ只中で、はげしい感動とともに、目を開いたのだった。

12、くらげ加工事業

「平新艇一五号」が、再び故障を起こした。プロペラがうまいぐあいに動かなくなった。機関に異状を来たして、まったくスピードを出すことができなかった。そんな状態で操業を続ければ、遭難のおそれさえあった。やむを得ず帰港した。六二年九月十四日のことである。

水産事業所の支配人は、全部教化所へ送ってしかるべき奴らだと、私たちをさんざんにしぼりあげたが、船の故障で帰港したのだから、それ以上のことはなかった。

事業所自体で修理をしてみようとしたが、故障が余りにもひどかった。製作工場で、すっかり修理し直さねばならないことがはっきりしてきた。

支配人は、カンカンに怒った。労働者が「党」に贈呈したこの船を、こんなありさまにしたのは、すなわち労働者に対する侮辱であり、「党」を裏切る反動的な態度であると、私たちに罵声を浴びせかけた。

しかし、船員たちには何の罪もないのだ。そもそも、船をいいかげんに建造した人の責任を問うべきではなかったのか。

言うなれば、労働者たちがアナだらけの船を無誠意に建造したのであり、「党」がこれをゆるしたのである。「党」の能力が、こんないいかげんな船を建造させたのである。

「平新艇一五号」は結局、重病を患らい、大手術を受けるために、南浦製作工場送りになってしまった。

支配人が、青筋を立ててカンカンに怒ったのも、当時の事情からして無理な話とは云えなかった。労働者が「党」に贈呈したということで、彼らは「平新艇十五号」をネタに、空前絶後の大宣伝キャンペインを行なっておいたからである。官用新聞はいっせい筆を揃え、あらんかぎりの美辞麗句を総動員して、船を讃え、労働者をまつり上げ、「党」の偉大さをうたい上げた。

この意味では、宣伝肉がついてすっかり宣伝ぶとりするだけしたその船が、見るも無惨な状態になってしまったのだから、新義州水産事業所の支配人といえども、後患を心配しないわけにはいかなかったのだろう。

運が悪ければ、彼はこの世界でいちばん重い罪をおかした、いわゆる「人民の敵」にされかねないからである。「平新艇一五号」が、しじゅう故障を起こせば、その船にまつわるすべての「意

味」が泥をかぶり、ぶちこわされてしまうわけである。

労働者と党があやまちを犯すことはあり得ない。労働者と党は、常に正義であり、真理である。その労働者と「党」が、「平新艇一五号」という史上類例のない立派な船を建造したのである。その立派な船が、こんなありさまになってしまったのは、水産事業所の赦しがたい過失である。「ブルジョア思想」に染まった者どもが、「党と人民」をないがしらにし、辱かしめるために、意識的に船を破損したという考えも成り立つのである。もちろん、それが常識的な判断であるか、どうかは別の問題である。

「平新艇一五号」のほかに、新義州水産事業所の支配人は、もう一つの問題で夜もおちおち眠れないほど、頭をいためているに違いなかった。それが、何であるかといえば、「水産物八十万トン高地占領」という闘争に対する「総突撃命令」であった。

「水産物八十万トン高地占領」。

これは、事情を知らない人には、とても理解できない妙な文章である。小学校の一年生でも、文脈の通じないこんな文章はつくらないだろう。これを、いわゆる「金日成元帥」が導く「党」で、しかもスローガンとして憶面もなく使っている。それは、一種のおどろきである。

北韓カイライ集団は、「闘争」という単語がとてもお気に召している。北韓カイライ集団の生

理からすると、いちばん肉感的に説得力を持っている単語がこれである。彼らは、何かといえば、この闘争という言葉を使う。彼らの行為の殆んど全ては、暴力的な単語であるこの闘争なのである。それぐらい殺伐なものにつくっておかないと困る実情を、彼らが知ってのことなのかどうかは、もちろん疑問である。

こうして、彼らは、取るに足らない行為の一つ一つを、戦争の殺りく行為に結びつける。そうであればこそ、「高地占領」というとてつもない比喩が、生産と搾取作業に使われるのである。もう少し、くわしく説明しよう。戦争中にしばしば発生するある種の状況が、力づくで、靴の修ぜん工や蚕を育てる娘たちの上に押しつけられる。靴の修ぜんがうまいとか、養蚕にたけているとかの行為を、戦場での勝利と同じものであると見なすわけである。

相手が占領している高地に向かって、それを奪いかえすために、こちらの方が肉弾戦を展開して突撃する——この状況を生産作業に適用するのである。

「水産物八十万トン高地占領」というスローガンは、こんなにもややこしい、まるで難解な哲学用語に似た意味を持つ、下手くそな文章といえる。

水産物を八十万トンまで、どんなことがあっても生産しょうというのが、そのねらいである。それで、水産物八十万トン生産計劃量を達成しょうというわけである。このように簡単な内容

を、彼らは戦闘状況になぞらえるのである。「水産物八十万トン収獲」を、敵の高地を奪回する戦闘行為と同じように考えて、それを占領しょうということであり、そのために「闘争」し、そのために「総突撃」しょうということである。

たしかに、水産物を八十万トンも生産するということ自体が、第一実現不可能な数字だから、彼らがそのようにわめきたてるのも無理な話ではない。せいぜい四十万トン以上を生産してみたことがない彼らが、その倍にあたる八十万トンを目標量にかかげたのである。それが、とても不可能であることを、党の高級幹部たちもちゃんと知っているので、「高地占領」などといった荒唐無稽なスローガンをかかげねばならなかった。

金日成は、「水産物八十万トンの高地占領のための総突撃運動」を展開はしたものの、ことが予想どおりにはこばないので、カンカンになって怒った。

「海川の魚は無限である」と、金日成は考えたに違いない。「だから、人間はそこにひろがっている魚を、いくらでも取ることができる」と、金日成は言った。

漁業は、簡単に考えると、ヒタイに汗して土を耕して収穫をあげるお米の生産よりは、はるかに手っ取り早く、やさしいように見える。資源は、無尽蔵に与えられているではないか。

それが、なぜ不可能なのか？　理由は簡単だ。漁船が不足し、人間が魚取りに熱心でないから

だ。金日成は考えた。漁撈作業をもっと忠実に行ない、持っている漁船をフルに動かせば、収獲はいくらでもあげることができるはずではないか。

かくして、とても考えられない八十万トンの生産目標がたてられた。すでに説明したように、平年なみの水準に四十万トンなのだから、これはそもそも無理な計画であることは、今さら云わずもがなである。

無理を承知でやろうとするのだから、色いろな面で副作用がともなう結果となる。漁船は、その種類を問わず、四十八時間以上の停泊を禁じられた。もちろん、数トン級の小船は、それでもかまわなかったが、百トンをこえる大型船にも四十八時間以上の停泊を禁止すると、困った問題が生じてくる。

それでなくても老朽するだけ老朽した機械を、かたときも休ませないでこき使うのだから、しょっちゅう故障が起きる。故障まではいかないとしても、性能を十分に発揮できなくなる。おんぼろ機械は、地力をなくし、空転しがちである。

船員の方の事情はどうだろうか。連続的な海上生活を強いられる。一年三百六十日を通じて、自分の家で寝る日数は、二十数日間にもならない。一度出港すると、一、二ヵ月以上は、海で暮らさねばならないが、このあと久しぶりにわが家へ帰って来ても、わずかに一晩だけ泊まって、

また海へ引っぱり出される。
疲れるだけ疲れ切った人間は、人間というよりも、むしろかせにしばりつけられた馬や牛に近い。休息さえも無いからである。
船の生活はどうか。船には党細胞副船長、軍事副船長、技術部船長などが乗り込んでいる。もちろん、普通の漁船にである。海に出ても、新聞読報会、党政策研究会などを持ち、軍事訓練さえも実施する。漁船も軍人の監視を受けるわけである。船には、武器庫があり、武器を満載している。
監視が厳しい上に、「八十万トン高地占領」以後は、水揚げをふやすための総会と「自己批判」での追及が、いっそう苛烈になってきた。
それこそ、『お魚さまよ、どうぞ私たちの網にかかって下さい』と祈っているような、奇想天外なドタバタ騒ぎである。
かくして、煽動と策謀にたけた彼らは、「女性号」という船をつくり出した。そして「女性英雄漁夫」張琴実という人形をねつ造し、搾取のモデルにした。このすべての現象が、水産物増産をはかるための死にもの狂いの最後のあがきの中から織り出されたことなのである。
「張琴実英雄」は、六一年度につくりあげられた。この話の内容をきけば、おなかをかかえて

笑おうにも笑えない北韓カイライ集団の政策の盲滅法さが、うかびあがって来るだろう。

張琴実は、当時二十六歳の女性で、背が低く、丸まると肥った田舎娘であった。ちょうど、平壌では「水産部門熱誠者大会」なるものが、金日成の主宰のもとに開かれていた。

「水産部門熱誠者大会」は、年例行事になっている。その内容は、水産物の増産を目的とする華ばなしい宣伝ショウだと思えば間違いない。当時、竜岩浦水産事業所では、金日成にこびへつらうために、とっておきの悪知恵をしぼり出し、張琴実というおろかな女を、おうむのように訓練して、平壌へ送り込んだ。

海で漁撈に従がうということ、しかも男でない弱よわしい女の身が、網の揚げ降しまですると いうこと、これは絶好の宣伝材料である。彼らはそれをねらった。

張琴実は、演壇に立って、吹き込まれたとおりのセリフをおおむのようにしゃべった。男とちがって、女が話をするのだから、金日成は好奇心をそそられたらしい。それも小型の漁船ではなくて、百トンをはるかにこえる大型の底引網漁船で小柄で丸ぽちゃな女が魚を取ったというのだから、けなげな、と考えたようである。あるいは、これこそ素晴らしい宣伝材料だと、とっさに考えたのかも知れない。

黙って、彼女のセリフを聞いていた金日成は、席から立ち上がり、張琴実の肩をやさしくいた

わりながら言った。
『女の身をもって、海へ出たこと自体が、すでに英雄的である』
その日の各新聞は、これをデカデカと報道した。張琴実の肩に手をおいた金日成の写真も掲載された。
こうして、張琴実という「女性英雄」が誕生したのである。元来、英雄の称号は、いわゆる「国家」に利益をもたらした実績が、具体的に証明された場合に限って与えられることになっているにも拘らず、張琴実は女だということで、「英雄」に祭りあげられる特権を得たのである。
芝居は、これだけで終るのではない。今度は、「英雄張琴実」のために、〈「女性英雄号」〉という漁船が建造された。これは、竜岩浦水産事業所が念に念を入れて、自分たちの阿附作戦の成功を祝うためであった。
「女性英雄号」は、女の船員だけによって構成されている。実際は、男の指導員が一人その船についていて、おもな仕事を全部片づけるのであるが、そんな真相は表面に現われないだけのことである。
「女性英雄号」には、さまざまな特典が与えられる。まず、いちばん魚の多い漁場を任される。ほかの漁船は、この漁場をおかしてはならない。これで魚がうんととれなければ、おかしな話に

なる。

それから「女性号」を、讃える意味だと称して、全従業員の家族を動員して貝などを取らせる。そして、それをまるで女性号の女子船員たちが取ったようにつくろって発表する。

こんな特典があるのだから、「女性号」の収獲量が群を抜いて多いのも、無理ではない。しかし、特典を与えたとは、どの機関も発表しない。彼らはそれほど初心ではない。

『女性も、これほど生産に熱中しているのに、男たちは、なぜこんなに怠けているのだ』と、青筋を立てて怒り、怒鳴りつけるわけである。

シナリオどおりの攻撃に、男の船乗りたちはぐうの音も出ない。『面目もありません。努力してみます』。男たちはこのように答えるのがせいいっぱいである。

しかし、もう一面に思いをめぐらすと、「女性英雄号」というシナリオの示すままに動いている張琴実以下の女性船員たちも、同情に値いする存在ではある。彼女らに、なんの罪があろう？たとえ、どんなに素晴らしい特典を与えられたにせよ、弱よわしい女の身空で、見渡すかぎりの大海原へ船出して、魚を取るということは並大抵の重労働ではない。北韓カイライ集団がつくったシナリオに踊らされて、この重労働を堪えしのばねばならない彼女らも、あるいは犠牲者なのかも知れない。

こんなわけで、北韓カイライ集団の水産物増産運動は、その極に達した。しかし、どんなに努力をしてみても、「八十万トン」の目標に近づく方法は見あたらなかった。そもそも、それ自体が不可能なことであった。共産主義の理論と実際が常に異なった形で現われるように、彼らの目標数字と実際の生産数量との間には、はなはだしい開きが現われる。

金日成は、こうして苦境に立たされた。自分の口から吐き出した「八十万トン高地」を占領できなければ、自分の口が不可能な搾取を強要するウソをついた結果となる。それで、金日成は腹いせに水産省の幹部を呼びつけた。

『もし、生産目標を達成できなければ、これは世界的な恥である。私たちがブルジョア的な怠けぐせを身につけているということを、全世界に向かって宣伝する結果となる。どんなことがあっても達成せよ。海から、草でも石でもすくい揚げよ。どんなことをしてでも、八十万トンをつくれ。』

「世界的な恥」などということこそ、まさに金日成のセンチメンタリズムである。搾取をほしいままにするためには、「世界的」という大仰な形容詞が必要だったのか。

ところで、北韓カイライ集団の欺瞞的な特性の一つが、この数字ごっこにある。統計というやつは、往往にして催眠術的な詐欺を行なう。「八十万トン」という数字に対する盲信こそ、笑う

に笑えない喜劇を演出する。

海の「草」や「石」を取って、何をしようというのだろうか。そうすることで、たとえ八十万トンを生産したと仮定しても、それが何の役に立つのだろうか。これは単に、「八十万トン」という数字に対するおろかな奉仕以外の何ものでもない。子供だましのイタズラに似たようなものである。

ちょうど、このような「統計数字の政治」が、北韓カイライ集団の支配方法である。それから、このようなデッチあげの数字を自慢、宣伝するのが彼らの政治手段なのである。統計数字それ自体は、ある種の説得力を持つかも知れないが、いかんせん、その内容が貧弱かつ悲惨きわまるのを。

身近かな例を一つあげよう。一九六〇年ごろには、ガソリンが大変不足した。彼らは、ガソリンを節約しようということで、おどろくことなかれライターさえも回収し始めた。町かどには、所きらわずポスターが張られた。ライター一個が一年間に消費するガソリンの量は、どれどれ位である。それを節約したガソリンでトラクターを動かせば、これこれの時間を稼動させることができる。このトラクターは、これこれだけの穀物の生産を可能ならしめる。このようにして生産された穀物は、これこれぐらいの間、あなたに満腹感を与える食糧となる。従って、あなたの持

っているそのライターは、「人民の食糧」を浪費する曲者である。だから、あなたはライターを進んで差し出してほしい。—たいがい、こんなふうなポスターであった。

しかし、考えてみよう。ライター一箇が一年間に消費するガソリンをどのようにして一度に集めることができるのか、しかもそれがどうしてトラクターを動かすガソリンになるというのか。実際にはとても不可能なことを、まことしやかに織りなして見せるのが、統計数字というものの暴力なのである。ライター一箇が消費するガソリンは、どこまでも雀の涙ほどの取るに足らない量に過ぎない。それを一庫に集めることはとてもできない相談なのだ。もし、ライターさえも禁止せねばならない程、事態が切羽づまっていたならば、たとえライター一個のガソリン消費量がどんなに少くても、それさえも節約せねばならない羽目になったと告白し、協力を求めるべく宣伝するのが常道ではないのだろうか。これでこと足りると思われるのに、彼らはまるでライターが大変な量のガソリンを消費するかのごとく欺瞞宣伝を行なうのであった。そして、このような欺瞞宣伝には、ライターのおかげで節約されるマッチ軸の数や、ライターのおかげでこうむる時間の節約、便利さなどは、頭から無視されてしまっている。

水産物八十万トンの高地占領というのも、これと同じ系累の考え方がその根底に横たわっている。食べられる水産物、取り得る魚などといった実際的な面は、少しも考えないで、無条件に

「八十万トン」という数字だけを押出したのである。どうせ達成できないものと相場が決まっているからには、いっそのこと目標量を「二百万トン」ぐらいにドカッとでかく決めなかったのを見ると、彼らの頭の回転も高が知れているといえなくもないだろう。

私の乗っていた「平新艇一五号」が、かくして大故障を引き起こしたので、新義州水産事業所の支配人は、頭をかかえこんでしまった。すでに云ったように、労働者の贈呈品がそんな有様になったので、重大な責任問題にも発展しかねない上に、「八十万トン」という尊敬すべき数字に対する忠誠にも穴があきかねなくなったからである。

所有していた船一隻を遊ばせる結果となったから、統計の上で大穴があくことは、はっきりしていた。

こうして、奇怪な「くらげ作業」というのが、その幕をあげた。新義州水産事業所所属の従事員八十余名に、労力動員がかかり、多謝島という島へ出かけた。いちばん末端である私も、その一員に加えられた。

金日成の云った、『海から草でも石でも引きあげよ』という命令が、実践段階に移ったわけである。

くらげ作業というのは、くらげを取って乾かし、食用品に加工することを言う。それで、彼ら

はその作業を、ぬけぬけと「くらげ加工事業」と名づけた。
時は、すでに九月中旬で、海水は冷気を帯び、風はきびしくなっていた。私たちは、六・二五動乱の時、中共軍が掘っておいた湿気だらけの坑道にねぐらを定めた。
ブランケットが不足したため、下にムシロ二枚を敷き、また一枚をかぶって寝るみじめな宿舎であった。海辺に近かったので、坑道は湿気でジメジメし、名も知らない虫がうようよしていた。
私たちは、一日に十時間づつ、くらげを取った。くらげは敵が近づくと、機銃掃射を行なった。それにあたると、涙がにじむ程痛み、みる間に手の平がふくれあがった。
これをがまんしながら、血眼になって、くらげをさがし求めるのだった。いざ、取ってみようとかかると、くらげはありそうでなかなか目につかなかった。大の男たちが、がたがた震えながら、海の中で、くらげをさがし求めてさまよう光景を想像してみてほしい。
九月中旬から十二月七日までの間、前代未聞のこんなぶざまな騒ぎを演じた。北韓の用語では「牛の頭をぶちこわす風」と呼ぶ、初冬の風のきびしさは、言語に絶する。風の中に、カミソリのようなものが入っているようで、鼻の先と耳たぼ、そしてくちびるをえぐり出す冷たさがある。見渡りかぎりの海、それて荒涼とした小島、そこは木もはだかになって震えている沈うつな小島であった。

引き揚げたくらげは、日なたで乾かす。そうすると、くらげは百分の一にちじまってしまう。くらげ一匹が、黄色みがかった碁石ぐらいの大きさになってしまうのである。それを、塩と明ばんに漬けるのである。完全に加工しあがったものでも、口に入れると、妙なにおいがし、味もそっけもなかった。

こんな馬鹿騒ぎが、「八十万トン」という共産主義者の「神」のために、くりひろげられるのであった。原価計算などは、はじめからそっちのけである。

きびしい寒さの中で、手はヒビ割れし、凍傷にかかって手足がくさり、くずれるのは、計算の対象にもならない。くらげを加工するために消費した塩と明ばんの量も、計算の対象にならない。そこに注いだ労働力を、ほかにした場合に得る生産量も、計算の対象にならない。

ひたすら、目標は「八十万トン」。

このようにしてつくった食用のくらげが、果してどれぐらい食用品としての価値を持っているかに先立ち、たった一つの目標は「八十万トン」という数字を、そのくらげで、どれ位うめることができるかの極めて非人間的な数字ごっこ以外には、なにも無い。

まったくあきれかえりたくなるような馬鹿騒ぎであるが、私たちは笑いさえも忘れた。わが身に襲いかかる苦痛が余りにもひどかったので、そんな不条理を笑う余裕などは、とてもなかった。

私たちは無人島で、世にも不思議な仕事にしばられ、三カ月と十日余りを閉じ込められてすごした。彼らの監視がまた、物ものしかった。剣つき銃で見張り、ややもすると罵声をあびせかけ、苦しさの余り身動きができなくなっても、むちよりもこわい「自己批判」の武器を振りかざして、仕事に駆り立てるのであった。

海はむごたらしく、冬の無人島は自然がつくり出した地獄であった。中共軍が掘っておいた坑道の壁は四面が全部凍りつき、湿気さえもこり固まって、まるでそこの空気が氷でできているような状態になった。

十一月中旬ごろから、私たちは廃人同様になってしまった。手、足、顔を問わずヒビ割れし、はれあがり、奇怪な皮膚病にかかって、私たちはちようどこわれた鉛の人形のような有様になった。

配られる食事がまた、いい加減なものだったので、空腹にもなやまされた。どう考えても、それは人間の姿ではなかった。文字どおりの奴隷、それも極刑を強いられている奴隷の姿であった。

これという罪を犯したおぼえもなければ、大きな過ちをしでかしたおぼえない私たちであったが、「八十万トン」という共産主義者の「神」は、このようにして善良な「人民」を酷き使っているのである。神にしては、極悪非道な神であった。

北方の寒さは、言葉で言い現わせないぐらいきびしい。十一月末になれば、気温はすでに、氷点下十五度以下に降る。しかも、海の上に、汚物のように浮かんでいる無人島の寒さは、いつそう殺人的であった。

多謝島。その名を聞いただけでも、身震るいをおぼえるその時の光景。

私たちは十二月十日、呪いの島にわかれを告げた。竜岩浦まで十二キロを歩かされた。事業所で一夜をすごした。

13、「女性号」の副船長

私は、いつも大きな悲しみを抱いていた。希望も無ければ、現在に対する満足も無かった。それでも、呼吸をし、生きている。

死んでいないという意味で、ばくぜんと生存を続けているのであって、本当に生きているのではなかった。

生命、生命はとうとく、かつ人間の尊厳性は守られねばならない。

私は、生命のとうとさを知らないでいた。

たとえ、私が生命のとうとさと生の力強い渇望を、はげしく主張してみたかっとしても、それは瞬間的な興奮にすぎなかったことだろう。

私は、第二次大戦当時、ナチ・ドイツがユダヤ人に加えた野蛮な行為について考えてみる。ナチは、ユダヤ人を完全に動物として扱った。呼び方も必ず、「あれ」「これ」に統一し、返事は決

まってげんこつとピンタであった。

人間は、人間の資格を拒まれた時、最も醜くい動物性だけを現わすようになる。ナチの残酷な待遇にいつの間にかなれてしまった収容所のユダヤ人たちは、お互いに殴り合い、殺し合い、非難し合った。その有様は、人間動物の姿そのままであったと伝える。

北韓カイライ集団は、民衆の心に憎悪を植えつけた。もっとも明るく、そして美しくあらねばならない対人関係さえも、ゆがんだ憎悪の鏡に照らして醜くつくりかえた。人人は生命のとうとさを忘れ、他人の生命をゴミのように軽視した。

北韓カイライ集団は、民衆に人間らしさとはどんなことであるかを教えなかった。働かせることだけで満足した。人間が、人間としての存在を認められていたのも、仕事ができ、手足で労働することができるという理由一つのためであった。

この結果、人間は人間動物になるか、あるいは人間機械となった。

この状態をこばむ時、その人間の前には苦しみが展開される。

私がおぼろげながらも自由のとうとさをさとり、人間意識が芽ばえたのは、かくべつ初志一貫した思考力があったからではない。

無条件に強いられる非人間的な状況と、鉄のカーテンに閉じこめられ、身動きもできなくなっ

たわが身の悲惨さに目を開いた時からであった。

私は、自分のいちばんとうとい特性が、「反抗精神」だと考える。自明のことではあり得ないにも拘らず、それが自明のこととしてとおる、絶望的な状態に対して、私は頭を下げようとしなかった。

私は、自己を維持せねばならなかった。自分を維持できない時に、完全な破滅が訪れると感じた。自分を維持するために反抗した。

私の反抗は正しかった。私は、北韓カイライ集団の地獄社会を是認することができなかった。そんな社会を、どうして是認し得るだろうか。

それで、私は脱出を計画していた。脱出とは、逃げ出すこととは異なる。逃げるということは、自分の過ちをうまくおさめることができない時、自分自身を放棄して、ほかの場所にかくれてしまう卑劫な行為である。

脱出とは、そんな類いの行為ではない。脱出は、若者の理想と、若者の勇気と意志の力を必要とする。脱出は逃亡ではなく、ゆるぎない理想に向かって、超克するという行動である。

私が脱出の決意を固めたのは、一時の安っぽい虚栄心からではなかった。北韓でくりひろげられている状況を、黙って坐ったまま是認することはゆるされないという、もっと高く大きい理

想への自己止揚であった。
私は、自分の安定を失なうまいと努力した。脱出決行の日まで、自分を大事にせねばならないと感じた。
私は、竜岩浦の「機関長養成所」への入学推薦状を貰った。その時までの勤めぶりが良好であったと認められたうえ、機械の動かし方を知っていたのと、高級中学校卒業の学歴が考慮されたせいらしい。
私は、引きつづき家族状況と成分をいつわり、一九六三年一月四日、「機関長養成所」に入学した。
そこは、人家もなければ、木も見あたらない陰惨な地域であった。海からの風が強く、心の慰さめとなるなごやかな風景は、どこにもなかった。そこで私は熱心に勉強した。
そこを卒業したのは、一九六三年六月であった。私は再び、以前の「平新艇一五号」の乗組員になった。
新しい職名は、操機長。
私は再び出港して魚を取り、海をあてもなく見渡す時間を持つようになった。海上の船員生活は、私にとり多くの意味を持っていた。海が、世界の広さを教えてくれたからである。

中世紀の暗黒時代のような閉ざされた北韓の社会しか知らなかった私にとっては、北韓の社会をこえて、海の向こう側に見える他国が、全て新世界であり、新天地であった。アメリカ大陸を発見したコロムブスの燃えるような野心や、北極大陸を探険したアムンゼンの超人間的な意志の力が、私とは無縁の、単なる探険小説の中のことのようには考えられなかった。

海にも、魚は多くなかった。手あたり次第、取り放題に取ったので、魚族も減ってしまった。それで私たちの船は、遠い海の方まで進出した。大抵、中国本土に近い、北緯三十二、三度の線まで降りて行くこともあった。そして、山東半島の近海一帯をあさり、海賊船のように、西海を出没したこともあった。

海上生活は、忘られないさまざまな追憶を残してくれた。砂ばくのような海―人一人、かもめ一羽見かけることもなく、三カ月以上を堪えねばならない時の孤独感は今さら語る必要も無いこと思うが、赤く染まった海のたそがれに、辰気楼を見た時は、私もわれを忘れた。辰気楼は、砂ばくだけのものではなくて、海にもあるということを知っている人は少ないだろう。

その辰気楼は、大気中の微細な空気層をプリズムにして、韓国のとある地方の小さな邑（市の下の地方小都市）の風景を映し出した。あぜ道が見え、三階だての邑事務所が見え、邑をめぐる

河と橋が見えた。

海上生活では、しばしば精神異状をきたす人が出る。海は肉体の試練に劣らず精神の試練をも要求するからである。童話の中の海洋小説のようにロマンチックな一面もあるが、その反面には、陸では想像もできない苦痛がともなうものである。

空が灰色にくもり、四方の視野が除じよにせばまりながら、海の霧が立ちこめて来ると、霧の中から人肌くさいにおいのようなものが、臭覚を刺戟する。私のように感情のひからびきった男でも、そういう瞬間には、とても堪えがたい思いにかられる。さまざまな感傷がわき起こり、わが身がとても哀れになる。このあとに、シトシトと霧雨でも降ろうものなら、生きているということが、なま身がまるで虫に喰われて、腐っていくようなもの悲しい錯覚にとらわれるのだった。

暴風雨が吹きすさぶ時は、またどうだろう。私が経験した暴風の中でも、いちばんひどかったのは、六四年夏の暴風であった。私たちは北緯三四度近くで、作業を行なっていたが、三昼夜の間、海は荒れに荒れた。

波の高さが、五メートルはあった。船よりも高い波が一度どっとおし寄せると、船は死んでひっくりかえった魚のように、船底を高だかと持ち上げる。船尾のプロペラが、空中で空まわりす

る。地球は横に倒れているようだし、海は船の下にあるのではなく、頭の上から襲いかかる。船上の人間は、風に吹かれた枯葉のように、あっちへころがり、こっちへ倒れる。頭が割れ、血が流れる。

船は小さくなり、暴風が情も容赦もなく頭を殴りつける。二、三メートルさきも見えない。こういう時、人間の頼りになるものは、勇気と意志の力だけである。死なない場合もあるのだと信ずる勇気を持つことが、どんなに難しいことであるかを、どのような言葉で説明したらよいのだろう? 生への執念が、どんなに断ちがたいものであるかということも。

しかし、こういう時でさえも、私は一度も声をあげなかった。今、考えてみても、私は必要以上に厳しく武装していたようである。

すでに云ったように、海は私に多くのことを教えてくれた。海は非共産主義的な性格を持つっていたのである。共産主義者たちも、海に対しては教育をほどこうスべがなかったのだろうか。海はそれどころか、あの北韓の社会で行なわれている浅はかな目かくしの欺瞞策、搾取政治の有様をはげしく非難するかのような性格を持っていた。

私は、太古の昔から変ったことのない潮流、海の波立ち、そして海の大いなる生命の呼吸!、こういったものを生なましく感ずることができるのだった。

それは、人類の歴史においても変ることなく連綿として伝わる、ある種の本質的な生存の態度、あるいは人間が必ず持たねばならない本然的な生活の真の姿を、間断なく教えてくれているようであった。

北韓の陸地に囚われ、毎日をいわゆる「金日成命題」の暗誦に過ごしていた時には、感じたこともないような開放感と自然さが、海にはあったのである。

帰港。陸地への帰港ほど甘く楽しい航海もないだろう。人間が陸で生活する運命を背負っている以上、陸には人間の生活に必要なすべての財産が待っている。

しかし、私の場合は、事情が多少ことなっていた。本能的にわき起こる陸への郷愁はどうすることもできなかったが、その陸が北韓カイライ集団治下の土地、そこからの脱出を計劃している、悪夢のような北韓の土地だと思うたびごとに、私は裏切られたような妙な気持になった。

結局、今度の出港でも、脱出の執念は光を見ずじまいになってしまったのかというやりきれない挫折感が、陸地へもどる時の本能的な悦びにさからって、私の心にふかい影を落すのだった。

大きな鴨緑江が、除じょに視野に入り、かわいい小島たちが現われるごとに、私は錯そうする思いに、胸を震わせ、ひそかにおののくのだった。海に出ている間に、とんでもないことが起こり、私をなぶり殺しにしようと待ちかまえているのではないだろうか。

たとえば成分がばれたり、あるいは身におぼえのないかげ口や中傷が行なわれ、第一歩をおろすと同時に、陸地の深渕、奈落へ落ち込むのではないだろうか。

海と陸のふた筋の生活を行なう両棲動物。このような両棲動物としての私は、結局、海に出ても陸に隷属する定めだと考えないわけにはいかないのだった。

北韓の土地に所属している限り、北韓の陸地をはなれて海へ出ても、その海は、北韓カイライ集団治下の海、共産主義に染まった「赤い海」なのである。

帰港は、かくも苦しい回帰、特別休暇で外出を許された模範囚が再び刑務所に帰って来るそのような回帰に似ているのだった。

私は、ここで私の知り合った女性との短かい交際について語ろう。それは、恋とは云えなかった。愛情を抱かなかったというよりも、はげしく迫る愛の思いを拒んだ仲である。私たちは愛し合わなかったことになる。結局それは、恋ではなくて、ふかい悲劇の谷間に向かう、そしてただ知り合って別れた平凡な男と女の出合いであったのかも知れない。

善玉、これが彼女の名前である。はじめて彼女に会った場所は、「水産物八十万トン高地占領」という途方もない数字ごっこのいきにえにされ、多謝島でさんざん苦労をなめさせられたあと、ようやく新義州へ帰る船の中である。

私たちは多謝島から六二年十二月八日、竜岩浦につき、鴨緑江運輸事業所所属の旅客船「女性号四三三号」に乗った。新義州へ帰るためであった。「女性号」という船の性格については、まえにも説明したが、北韓カイライ集団は漁船ばかりでなく、旅客船の中にも、「女性号」というものをつくっておいた。船は船長以下、全部女性の乗組員によって、運転されていた。

その時は、三カ月以上も無人島で暮らした影響により、人がこいしかったうえに、心身ともにつかれきっていたので、女ばかりの「女性号」で新義州へ帰るということが、とても楽しい旅のように思われた。

その船には、羅津高等海洋学校の卒業学年の生徒たちが、実習のために乗っていた。羅津高校は男女共学で、そこを卒業すれば、船員の資格を得るのだった。

女学生たちは、固い咸鏡道なまりの言葉で、いかにもにぎやかにおしゃべりをしていた。そこからは、朗らかな若さが発散した。耳なれない咸鏡道なまりの方言が珍しかったばかりでなく、そんな言葉で若く発らつとした女の子らが盛んにはしゃぐので、私たちはまるで外国にきた気持におそわれ、浮きうきしてきた。

それ以前までの私たちの状態は、心も体も傷つき、刑務所から釈放されたばかりの囚人のような気持になっていたので、女の子たちの発らつさに刺戟されて、自然と私たちの若さが顔を出し

た。

時は、あたかもたそがれで、沈み行く太陽を見下ろしながら、やさしき母のようにゆったりと流れる鴨緑江をさかのぼる気分は、すばらしかった。鴨緑江は、黄ろく濁っていたが、大河の雄おしい風景を、あますところなく見せてくれた。

それこそ、蘇東波にでもなった気持であった。あれはなんという詩だったのだろう。「赤壁の賦」か、「船上の嘆」か、こう思う間もなく、私たちは風景に酔い、歌をうたった。

海にかもめ飛びかい
船首に君がすそひるがえり
えいこら　えいやっさ　えいこら　えいやっさ
海に出る

昔から伝わる「船の歌」をはじめ、漁夫の勤労を讃える「機関長の歌」など、知っている歌を手あたりしだいに合唱した。

鴨緑江が、この歌声を大きくすい込み、波立つ水音が私たちに合わせて、楽しい伴奏をかなでてくれるのだった。

船室では、笑いのうずがまいた。誰も彼も楽しい気持になり、手をたたいたり、相手に歌をリ

クエストしたり、それは大変な騒ぎであった。

「女性号」の船員も、羅津海洋高校の女学生も、ためらうことなくこれに加わった。誰かが私に歌を指名した。羅津海洋高校の女学生であった。制服をきていたけれども、上気したほほは赤くほてり、北方の女にふわしい快かつさと、そこはかとないういういしさをただよわせていた。私は、気がねなしに立ちあがり、歌をうたった。以前に習っておいた「蒙古キャラバンの歌」であった。私は、その歌のメロディが気に入っていた。民謡風の歌であったが、それに耳をすますと、砂ばくの苦しい孤独な旅と、ラクダのなき声、夜空の星のささやき、突風が吹きすさび、砂あらしがまき起こる音などが、見事なハーモニーを織りなしている歌であった。

私は、その歌に秘められたあこがれと悲しみが好きだった。人生はしばしば、砂ばくを行く孤独なキャラバンにたとえられるが、その歌には、現在の苦しみと明日を予見できない自然への恐れが、または生と死が一つの調和をなし、遂にはそんなものを飛びこえて、意志の力で前進しようとするけなげさがあふれていた。

私の声量は太い方ではなかったけれども、まるでその歌の主人公になった気持で、声をはりあげて歌った。水面をよぎる初冬の風は冷たかった。私は歌いながら、自分の歌が、かすかに震動している空気のヒダをぬって、あるいは高くあるいは低く、流れるかと思うと、最後には水の中

へすっと吸い込まれてしまうのを感ずるのだった。
いわば、私自身がそれだけ孤独で、やるせない境遇におかれていたのかも知れない。
「女性号」が新義州に到着し、私たちは事業所に帰って来たことを報告した。彼らは、慰さめの言葉一つかけないで、明日は貨物の陸揚げの仕事が待っているから、今日は早目に寝ておいた方がよいだらうと、また別の仕事をおしつけた。夕食をそそくさと取り、久しぶりに新義州の町でも歩くつもりで水産事業所を出た。
外に出ると、船で私に歌を指名した女学生が、きょろきょろしながら立っていた。彼女は、私の姿を見ると、向きを変え、いかにもほかの用件で来たようなそぶりを見せたが、その態度全体が、私を待っていたことを無言のうちに語っていた。
私は、彼女に近づいた。別に言うこともなかったので、
『さっきは、とても面白かったですね』と語りかけた。
彼女も、ニコッとほほえみながら、とてもたのしかったと答えた。私は、彼女に親しさを覚え、まだ高校卒業の幼ない女の身空で、故郷を離れ、遠くに旅しているのが、どんなに辛いだろうかと、ひそかに同情した。
私たちは、しばらく立話をした。彼女は、私に打ち明けてもよさそうだと、考えたらしい。自

分は明日の朝、羅津に帰ると言った。そして、これから機会があれば、また会えるかも知れないが、手紙を出すからと述べた。彼女が手紙をくれるということには、多少のためらいをおぼえたが（脱出を計画していたので、誰とでもふかくつき合う気持がなかったから）、とりあえず住所を教え、私も手紙を出したいと返事をした。このあと、いっそうふかい親密感を抱いて別れた。

その後、私は竜岩浦「機関長養成所」を卒業し、再び変りばえのしない、船乗り生活に戻ったが、彼女は海洋学校を卒業すると、「女性号」の副船長になった。彼女は、鴨緑江運輸事業所に配置され、竜岩浦と義州間の鴨緑江の水路を往復した。

私たちの船も、出港と帰港の時は、鴨緑江を出入りするので、自然、彼女の「女性号」に出会う。引き潮のときに入港する場合は、竜岩浦で一泊し、そうでない場合は新義州に直行する。それで、しばしば二つの船は水上ででくわした。

私は、一九六四年一月下旬、船を乗りかえた。「平新艇一五号」から「平新艇三四号」に変わった。これと同時に、地位があがった。私は、副機関長になった。党員でない私にとって、副機関長の職責は、最高の出世であった。北韓カイライ集団は非党員には「副」までの昇進しか認めないのである。

一九六四年四月頃、「平新艇三四号」は二カ月間の遠洋漁業のあと、久しぶりの帰港をいそい

でいた。ちょうど引き潮の時だったので、竜岩浦に入った。そこで、停泊中の「女性号」と出くわした。

私と善玉の仲が、両方の船員たちの間では、すでに評判になっていたので、両方の同僚たちは二人をからかうように汽笛を鳴らしたり、船べりをたたいたり、声をかけたりしてはしやいだ。

一方は、ながい航海から帰る、陸地も人もこいしいひげ面の海の男であり、一方は、女の身でありながら船を動かさねばならない娘さんだちだったので、自然、両方の気持が打ちとけた。

彼らは、その胸の中のもやもやを、私と善玉を理由にして、発散するのだった。その日、「女性号」の招待を受けた。

その晩、「女性号」の方へ出かけた。事実、これは違反であった。たとえ、近い距離に停泊しても、一方は新義州水産事業所の所属船であり、一方は鴨緑江運輸事業所所属なので、往来を禁じられていた。

女性号が私たちを歓迎するのには、もう一つのかくされた理由があった。あわよくば魚の数匹でも手に入れようとする魂たんがあったからである。それは、一見みじめな期待であった。

もちろん、百トン級以下の漁船では、魚のはらわたひと切れさえも自由に処分できないようになっていたが、私たちのように遠距離漁業を行なう漁船では、おかずに、小魚を使う程度のこと

は黙認されていた。
「女性号」の甲板では、笑いの花が咲いた。彼らは、私と善玉をエサにして、自分たちの孤独をなだめるのだった。私は、皆のさわぎに巻きこまれていくふりをしてやった。また、ワッと笑いのうずがまき上がり、『「副」さん同士で、うまくやろう』と、「春香伝」のセリフをもじったりした。善玉さんが副船長で、私が副機関長だったからである。
ふだんは、むっつりとしてガンガン怒鳴ることだけが得手の軍事副船長や技術副船長も、この日ばかりはかみしもを脱ぎ、
『私たちは義理の縁を結んだ船同士ではないか』
と笑うのだった。善玉の方を見ると、嬉しいさとはずかしさがごっちやまぜになった気持なのか、ツンとすましこんで、知らんふりをしていた。別れる時、彼女はまた会いたいとささやいたが、私はそれとなくこれをことわった。皆といっしょに笑って遊ぶ時は別であるが、その以外の時は、自分のカラを固くしめておく必要があったからである。
私たちの船は、その後故障のため、中共の煙台港へ行った。附属品の関係で、北韓では修理ができないのだった。六四年十二月二十七日から六五年三月末までかかる大修理であった。
修理が終って入港する時、鴨緑江の河口でまた「女性号」に会った。薄ぼんやりと霧がかかった

日であった。汽笛が水面にこだまし、地上には青葉が春の訪れをつげていた。

両方の船の中では、ひとさわぎ持ち上がった。「女性号」がさきにこちらを発見して、汽笛をプープープーと三度鳴らした。私たちの船もこれに応じ、せまい水路にさしかかった。有秋島という小島の前であったが、そこは水深が浅く流れが早いので、注意を怠れば転覆の危険さえある水域であった。私たちは、意識的にお互いの船を接近させた。

『遠洋漁業から帰る三四号の船員を歓迎す』

「女性号」から、このような手旗信号を送られて来た。そうすると、こちらからはさっそく張大衡がマストに上り

『感謝する。貴船の無事な航海を祈る』

と同じく手旗信号で答えた。

これが合図になったように、皆がいっせいに手旗信号を交わすのだった。

『今日の晩、糧券があればそば屋さんで会おう』『今日は駄目で、明日の晩は』『了解、感謝する』。大抵、こんな内容の信号たちであった。

安炳録が、機関室にいる私の方に飛んで来て、大事変が起こったようにさわぎながら、善玉さんがさがしていると伝えた。私は、手のあぶらをふき、作業服を気にしながら、善玉の方に手を

振った。善玉はパッと笑顔をつくった。機関の響きのために、声をあげることはできなかった。彼女も、ただ私を見つめて手を振った。

こうして、「女性号」に会い、たとえ自分が皆のからかいの対象にはなったが、善玉という女性と特別の恋でもしているように見られて、あたたかい人間らしい雰囲気にひたるのは、生まれてはじめて味わうほのかな感情であった。

しかし、入港すると、事情はガラリと一変する。全てが殺伐な空気に包まれ、現実はその苛酷さをいっそう荒あらしくむき出しにするのだった。漁獲高の報告から機械故障の原因説明が続き、最後には軍事訓練で制式状態が悪かったと軍事副船長の報告が行なわれた。しかも、事業所の支配人は、紀律がゆるんできたと「気をつけ」「休め」の号令を矢つぎばやにとばし、報告する姿勢がなっていないと怒鳴るのだった。

ようやく解散になって、宿舎に帰る時にも、労苦に対する土産物として、魚一匹、豚肉ひと切れ分けてくれるでもない。私たちは、手ぶらで帰った。家族持ちは、再会のよろこびに先立って、みじめさを味わねばならなかった。私はといえば、そういう家族さえもなかった。

その後も、私たちの船と「女性号」、あるいは私と善玉さんとの間の、見立たぬ交わりは続いた。それを一つの恋愛と呼ぶことができるならば、鴨緑江という偉大な河、海という巨大なリズム、

そして窒息しそうな現実の複雑な組合わせと対立が、どんな恋愛にも負けない素晴らしい背景となったことだろう。

しかし、北韓の社会でいうその恋愛には、すでにはっきりしたけじめが、そのまわりにつけられていた。私は、善玉さんが学校でどんなふうな生徒であったかということと、彼女の父が党員であるということを知った。彼女の外的な条件が、私の心を黒い絶望の墨で塗りつけた。皆は、まだ私の成分がとてもよいと考えている。成分がよいと思っているから、いたずら半分に二人の気持をあおい立てている。しかし、ひとたび、私の成分がばれた時は、事情ががらりと変ってしまうだろう。

私も成分が悪いというそのことだけで、全てをあきらめてしまうつもりはなかった。しかし、鉄の組織と成分によってできあがっている北韓カイライ集団の世界では、自分一人の主張だけで生きられるものではなかった。

現実に背を向け、山の中にかくれ住むことができるならば、そのような幸福でも、手に入れようとしたことだろう。しかし、山の中にも自由はなかったし、第一そんな所があろうはずもなかった。

それからもう一つ、これは現実の問題であり、道徳的な問題もあったが、結婚した場合の彼女

の不幸を考えないわけにはいかなかった。北韓の社会は、愛情と理解さえあれば、幸せな家庭をいとなめるという、そんな生やさしい所ではない。いわゆる「個人すなわち国家」、「個人と国家」を一直線に結びつけるその社会では、個人が自分を主張することや、心に芽生えた愛情を中心に考えることなどは、とてもゆるされないことであった。私は与太者でも、グレン隊でもなかった。ただ一つ、成分がよくないということだけが、どうすることもできない絶対絶命の条件であった。そういう私と結婚した彼女は、この共産社会で、うむを云わさぬ苦労と不幸を背負いこむことになる。

それに、私は脱出を計画していた。脱出をはかっている男が、誰かに未練を残すということは、それだけ重い心の十字架を背負いこむ結果となる。

ともかく、その後も、私と善玉はつきあい、二人の心は、求め合っているようであった。

竜岩浦にまた停泊した時、「女性号」は私たちの船から三百メートルばかり離れた所にあったが、さっそくウインクを送ってきた。二時間ばかり経ってから、「女性号」の女子船員たちが、いやがる善玉を先頭に押し立てて、私たちの船にどやどやと乗りこんで来た。

『閔同志は、石でできているのですか。善玉は、三四号が帰って来る日を、夜も寝ないで待っていたのに、見てみぬふりはひどすぎます』

女船長は、短刀直入に私を叱りとばした。私は、それを冗談と受け取り、ニヤニヤ笑ってやった。

いっせいに笑い声がうずをまいた。善玉の上気した顔には、いかにも幸せそうな表情が、つくられていた。私は、彼女のそのような表情を見るのがつらかった。私はできるだけ快活をよそおい、彼女のことは、皆が考えているほど、そうふかく思っていないというふうなそぶりて対した。

その日も、どうするつもりなのかと、盛んにからかわれ、どやしつけられたものである。式をいつあげるつもりなのかと、彼らは先のさきのことでも心配するのだった。

善玉の方を見ると、彼女ははにかみながらも、嬉しそうな上気した表情。これは困ったことになったと、私はひそかに考えた。愛情一つだけで、結ばれてもよい間ではない。むしろ、結婚には愛情など必要のないものだ。たしかに、愛情などというものは、共産主義者の云うとおり「ブルジョア産物」なのかも知れない。

このあと、出漁からかえったとき、両方の船が新義州でうまくハチ合せになった。前と同じように、にぎやかな騒ぎが持ちあがり、私たちはそのような瞬間的な若さの現われを楽しんだものである。やがて、ランデブーが終りかかった時、「女性号」の船長が片すみに私を呼びつけた。

彼女は、そのものずばりと要点にふれた。
『そろそろ結論を下してもよい時期でしょう?』
『結論ですって?なんのことですか』
『まあ、閔同志って、ひどい方ですわね』
女船長は、こういいながら、早く決めてしまうようにと、うながすのだった。私は、頭がこんがらかってきた。女船長からはなれ、はしゃいでいる皆の輪の中にまじってしまった。
六五年九月九日は、北韓カイライ政権の創建記念日だというので、いろいろな行事があった。その年には、金日成がとくに新義州に来て、記念式に参加した。その準備のために、私たちも出漁を数日間延期して訓練とデュレイションや行列用の仮装道具づくりに追われた。
一日中に、いそがしく働いた。職場単位で動員がかけられ、男は男同士で、女は女同士でおどりをおどったりした。おどりといっても、こちらで考えるような、そんな楽しく甘美なものではない。ダンスにも、いわゆる「革命性」というのが持ちこまれているので、五分ぐらい走りまわっているだけでも、息が切れそうになる、そんな代物である。
その日の夕方、事業所への帰りみち、私は善玉に出会った。町かどで、なにげなく立っているそぶりが、私を待っていたらしい。その日だけは、きれいに洗った作業服を着ていた。私を見

つめる目には、こちらの胸をさす訴えがこもっているようであった。
私は高なる胸をしずめ、できるだけ冷静をよそおうとした。
『ここで、なにをしていらしっゃいますか』
『いいえ、ただ町の見物ですの……』
善玉は語尾をにごし、顔を赤らめた。
『私の船にいらっしゃいません？お話でもしましょう。わたくしが、ちょうど当番なんですの』
しばらくしてから、彼女は思い切って、こう云った。
私と彼女は、「女性号」の方へ歩いて行った。船には、誰も居なかった。私たちは、船室に入り、向かいあった。
彼女は、一面嬉しくもあり、一面恥かしそうなそぶりで、私を見つめた。その気持は、私の方も同じであった。
こうして、二人だけで向かいあって見ると、私の胸中には苦しさが津波のようにわきおこった。彼女のきれいな顔には、私を信じ、またたよっているような表情がはっきりと現われていた。なんかを訴えたい感情が、はっきりと現われていた。
しかし、彼女を受け入れてはならないのだ。

『ご両親は、年取っていらっしゃいますの?』

彼女がこのように訊ねた。私の家族状況を知りたいらしい。

『ええ、年取っています。それに私は長男だし、党にも入っていない、将来性のない男なんです』

私はこう云いきると、二人だけ居るのを他人に見られると照れくさくなるからと口実をもうけて、船室から出てしまった。

船にかえって来た私は、その晩一睡もできなかった。無力感と孤独と、そしてやりきれない悲しみがおしよせてきた。記念行事や先祖の霊をとむらう公休日と名節の日は、私にとって、いつも一つの苦業であった。その日はにがい一日であり、夜はつらい時間であった。私は、自分の力ではどうすることもできない壁を感じていた。その翌日、再び海へ出てからも、私は彼女のことを思いつづけた。

愛をささやきかけるようなそのまなざしと、彼女の方へ引かれる自分の心を、このままにして、成り行きに任せてはいけないという決意が、海の上で徐々ではあるが、固まってきた。

その航海から帰ってから、「女性号」を訪ね、善玉に青年公園まで出て来るように云った。善玉は私の言葉をきくと、パッと顔いっぱいに幸せそうな表情をうかべ、とたんにそわそわし出すの

だった。

翌日の夜八時、私は約束の場所に行った。雲が低くたれこめ、河のにおいをいっぱいにふくんだ秋風のさわやかな夕べであった。

ひっそりとした公園には、落葉がころがり、秋の虫たちが、悲しげな鳴きごえをあげていた。

彼女は、約束の時間に三分ばかりおくれて来た。

始めて見るスカートに、ブラウスを着ていた。船員服を脱いだ彼女は、いっそ女らしくなっていた。私と彼女は、落葉がいっぱいの道を、ゆっくりと歩いた。私は、どうしても口を開くことができなかった。彼女は、二メートルほど後からついてきた。彼女の、つよい息づかいが私の方まできこえた。

私は、ようやく話を切り出した。低い声で。とても言いづらいことであった。

海に出ている間もずっと善玉のことばかり考えていたと打ち明けた。彼女は、じっと聞いていた。

それから私は、家族状況がよくないこと、自分の成分が悪いことも打ち明けた。そして、私という人間は、山で土堀りでもして暮すのが、どうせせいいっぱいの人間であるから、あきらめてほしいと話した。

善玉は、ただ黙っていた。
その態度が、とても私を苦しめた。
彼女はただ、沈黙を守った。
私は、彼女が怒ってくれれば、助かると思った。私が悪人になるのはそれでも救われるではないだろうか。
やがて、彼女が蛾の鳴くような声でぽつりと云った。
『今のままでもいいと思うわ。変ったことがなければ……』
『それはいけないことだよ。僕を忘れてほしいんだ。悪いやつだと思ってくれてもかまわない……。善玉もさっとあとで、わかる時があると思うよ』
『それでも、わたくし、今のままでいいの』
彼女は、ひくくつぶやいた。私はこれに答えなかった。彼女の目からは涙があふれた。彼女は、その涙をふこうともしなかった。
私は、彼女をなだめた。どうせ結ばれない仲であるならば、未練を残さず、思い切るのが、二人の将来のためによいと、なだめすかした。
『かえります』

彼女は、私の話を最後まで聞かないで、向きを変えた。
『おくってあげよう』
『ほっといて』
しかし、私は彼女を船のあるところまで送った。
鴨緑江の河のにおいが、強くただよってくる坂道であった。彼女と私は、それ以上は、ひとごとも言わなかった。話をすれば、それだけ苦しみがつのるばかりで、とても堪えられそうでなかった。
私たちは、別れみちの所まで来て、立ちどまった。しばらく、そのまま立ちつくしていた。
私の方がさきに、クビスをかえした。目に涙がにじみ出て来るのを感じた。空には三日月が、鋭い光りを放っていた。月さえも怒っているようであった。
しばらく歩いてからふりかえって見ると、彼女はその場に立ちつくして、こちらを見ていた。
私は、彼女に船の方へ行くように手で合図した。彼女が、背中をくるりと回した。
私は、彼女が見えなくなるまで、そこに立っていた。
秋風は、いっそう強く、河のにおいを乗せてきた。鴨緑江は、三日月の光りをキラキラと反射しながら、ゆったりと千年を一日のごとく流れていた。かわききった別れを悲しむかのように、

船の汽笛が、ながいながい余いんを引きながら、河の両岸にこだました。
私は、船に帰った。ひと晩じゅう、まんじりともしないで、夜を明かした。

14、ある北送同胞の娘

新義州を拠点とする、「平新艇三四号」の海上生活は、変らない苦痛の連続であった。家族からは音さたもなかった。家を出てから、早くも四年有余の年月が流れた。

歳月は、いったん過ぎさってしまうととても早いもののように感じられた。

私が両親をはじめ、家族の消息を耳にしたのは、六五年も殆んど暮れかかった時分である。発信人の住所のない手紙一通が、舞いこんできてからである。

その手紙は、黄海道信川郡月成里からきたものであった。差出人は、おそらく私に好意を持つ友人なのだろう。

その手紙によると、両親と弟たちは信川にいなかった。どこかへ強制移住させられたのであった。

六三年三月末のことであったという。「安全員」が現われ、ヤブから棒に、立ち退きを命じたと

いうのである。どんなに近い親近にも、会うことを許されなかった。

携帯をゆるされた家財道具は、一人あたり三十キロ以内に制限された。一人あたり三十キロ以上は認めないということは、家財道具を全部おきざりにして、体一つだけで追放するのと変らない。

家族は、行き先も知らないで、追放させられたわけである。伝わる噂では、どこかの炭鉱へ行かされたという説もあるが、その炭鉱がどこなのかは知らないとあった。

私は、その手紙を受け取った日から数日間は安眠を忘れた。年取った父と母、幼ない弟たちが死ぬ程の辛酸と苦労をなめているのだ。

それを、この不孝な息子は知らずにいた。しかも、北韓の空の下のどこに居るかを捜し出す目当てもなかった。果して、どのような生活をしているのだろうか。

これが子としての道だろうかと考えると、身もほそる思いであった。

それから数カ月後に、妹からのはじめにして最後の手紙を受け取った。

妹も発信地は書いていなかった。なぜ、自分の住所を書かなかったのだろうか。住所を書かなかったばかりではない。妹は、自分が私の妹であることを言外にほのめかしただけで、手紙は普通の知り合いが出したような内容であった。

元気にやっているから心配しないでくれというたより、それだけである。どんなにしでも命の続く限り生きていくというたより。そして、朝になると、東海（日本海）の夜明けが素晴らしいとあった。仕事はとても辛いとあったけれども、それがどんな種類の仕事であるかについては、一言もふれていない。

私は、その手紙をくりかえし、くりかえし読んだ。しかし、それだけのことである。妹は、果してどこに居るのだろうか。東海が見えるといったから、清津近くの炭鉱ではないだろうか。その方面の炭鉱へ、多くの人々が強制移住させられたという噂が、その当時にひろがっていたからである。

しかし、たしかめる方法はなかった。

私は、自分の無力さに対するやり切れなさと責任感、両親と弟や妹のことで、わらわたをえぐり取られるような良心のかしやくと心の苦痛を感じた。これからは、いったいどういうことになるだろうか。

年取った両親は、なんの罪もないのに、引っぱられて行ったことだろう。ただ、理由があるとすれば、ちょっとまえの「八十万トン高地占領」の時と同じように、北韓カイライ集団当局の盲滅法な搾取の対象にされ、あてもなく徴発されて行ったに違いない。

私は、もはや天涯孤独の孤児と同じ身の上となった。父母と兄弟が居るにはいるが、いったいいずこに住んでいるかを知らない境遇になったのだから、力づくの生き別れをさせられたのと同じ状態である。

人倫の道をふみにじする彼らを呪ってみても、そこに救いの手があるわけでなかった。私はただ、子として両親に及ぼしている不孝を考えると、息がつまり、両親の老後の苦労を思うと、胸をかきむしられる思いであった。

そして、私は自分の方に向かっても、ある種の予期しない危険が刻刻と迫りつつあることをさとった。父や母は、私のことを心配しているだろう。負けてなるものか、負けないぞ。私は、自分にはげしく云い聞かせるのだった。

私にはもはや、たった一つの目標がはっきりと目の前に、うかびあがるのみであった。どんなことがあっても、君たちの望むままにはならない。私は、必ず脱出して見せる。どんな手段を使ってでもなし遂げてやる。

そうすることで、君たちの野蛮な政策と行為を全世界にバクロしてやる。そして、私自身の人生の目標を、君たちとの闘かいにおいてやる。私は、自分の怒りをなだめすかすつもりはなかった。自分の決意を弱めるつもりもなかった。

脱出への執念は、具体的な方法を手さぐりし始めていた。

中共(中国本土)から香港を経て、大韓民国へ行く方法も考えて見た。その道がどんなに遠く険しくとも、やり抜いて見せるだろう。こうして、私は、中共の人たちに近づきはじめていた。しかし、私が親しくなった中共の青年は、中共から追われて、北韓に来た男であった。

その当時は、満州に逃げる人たちが少くなかった。中共との関係が悪化すると、中共は密入国者を北韓へ送りかえさなかった。新義州だけでも、毎年、七、八百名余りの人たちが、中共入りをしているという話であった。そして、満州には、解放まえから住んでいた人たちを合わせて、約百万名にのぼるわれらの同胞がいるという話であった。

しかし、中共を経て、香港から大韓民国へ脱出する道のりは、考えてみたら余りにも遠く険しすぎるような気がした。たとえ、鴨緑江を飛びこえることができたとしても、中共では生きたくないのが私の本心であった。共産主義が支配する社会は、どこでも同じだということを、私は知っていたからである。

それで、「平新艇三四号」で脱出する計画をねることにした。船員が二十数名になるから、一人の力ではとても無理だ。同志が必要である。同志はいないだろうか。

副船長の張大衡がいるにはいた。張大衡と私は、ひそかに固い約束を取りかわしてある。しか

し、たった二名の力で、どうして二十名を屈服させることができよう？　また、安炳録がいる。安炳録は、私に実の兄のようになついでいた。全部を合せても、わずか三名の同志しかいない。もっと緻密な計劃をたてねばならないと考えた。手あたり次第、誰彼をつかまえて打ち明けてもよい性質の仕事ではないといつてなま半可な気持で実行に移すこともできない。

私は、あせりと緊張のうちに、一人で気をもむ毎日を送った。六四年がこのようにして過ぎ、六五年がまたこうして流れた。

時間を無駄づかいしていると思うと、気が気でなかった。

私は、こんな気持で過していた時に会つた、ある北送家族の話をしてみよう。その家族と知り合ったのは、偶然の機会からであったが、その家族とつき合ううちに、私の脱出計劃が決して、一時の感傷や不幸な環境から生まれたものではないことに気づいた。

彼らは日本から来た北送家族である。たしかに、私とは奇妙な対照になる。私は脱出するため、日夜心をくだいており、彼らは自分の足でのこのことこの汚辱の土地を求めて来たのである。私は、その無暴さにあきれもし、また一方では内心ひそかに同情もしたくなるのだった。

一九六四年の夏のことである。数カ月ぶりに帰港はしたものの、嬉しく迎えて来れる人もなく、新義州の町に出てみたところで、行くところも無かった。ただ、故郷の中学校を卒業した同

窓が一人、新義州の紡績工場にかよつていた。彼が私の知り合いであった。
その日も、午後七時ごろその友人をたずねた。友人は外出中で、部屋にはカギがかかってい
た。待っていてでも会いたい気持であったが、外で立ちんぼうをしているのも、おかしかったの
で帰りかけた。
それにしても、私が訪ねたということを知らさないで、そのままふいっと帰るのも残念であっ
た。それで隣家の人を訪ねた。五十歳にはなりそうな婦人がお勝手で食事のあとかたづけをして
いた。私は、あいさつを行なったのち、隣りの友人を訪ねて来たが、留守なのでそのまま立ち去
る事情を話し、彼が来たら伝えてほしいとたのんだ。
そのおばさんは、快よくそういたしましようと答えながら、赤の他人である私が、そんな用事の
ためであっても、自分たちに声をかけてくれたのを喜ぶようであった。必要以上に、なにかと話
しかけてきた。どこに勤めているかということからはじまって、仕事が面白いでしようということ
となど世間話が続いた。おばさんはそれから、思もかけずに私を上らないかと招待するのだっ
た。どうせ来たのだから、部屋に上ってお待ちになり、おともたちに会って行けばよいでしよう
と云ってくれるのだった。
初対面の人の部屋に上るのは、おもはゆがったが、おばさんがあんまりしっこくさそうので、

遠慮なく上りこむことにした。どうせ来たことだから、もっけの幸いだ、この家のおばさんと世間話でもして時間をつぶし、彼に会って行こうと思った。

おばさんが、すぐ部屋に入って来た。さいぜんから、不思議だと思ったことはそのおばさんのなまりであった。どういうふうに考えてみても、北韓のなまりではない。南の慶尚道なまりがまじっていた。

ひょっとしたら、日本から来た北送同胞なのかも知れない。これに考え及ぶと、私の出しぬけの来訪を喜ぶ理由がうなづけた。北送同胞の家族に対して、人々はなかなか打ちとけようとしなかったからである。

北送同胞は、いつも監視のマトになっていた。わけもなく、親しいつきあいをしていたら、いつ災難がふりかかって来るかも知れない。それで、北送同胞は皆から村八分のような目にあっていた。

その家のおばさんが、私を嬉しげに迎えたのは、とりもなおさず、人がこいしかったからである。部屋に坐った私は、その家が、北送同胞にあることにすぐ気づいた。

家財道具に高級品が多く、ナイロンの服などがかかっているのを見ても、それは間違いなかった。おばさんも、自分たちが北送同胞であると打ち明けた。北送同胞の家を見るのははじめてで

あったので、私はいささかとぎまぎし、また内心好奇心もわいた。

しばらくしたら、そこの中老の主人が帰って来た。私は丁寧にはじめてのあいさつを行なった。つづいて、その家の娘が入って来た。娘は、年が二十三、四歳ぐらいに見えたが、美人の方ではなく、やせ型であった。

世間話のすえ、

『それで、暮らしの方はいかがですか』

と向うの方から話題を持ちかけてきた。私は、正直に打ち明けてよい間がらでもないので、どうにかこうにかやっているとあいまいに答えておいた。それはそうでしょうと、向うは答えたが、どことなく元気がなかった。

その北送同胞の一家が、とても困っているらしかった。

その日は、これ程度で終り、ちょうど友人が帰ってきたので、席を立った。

北送同胞の一家は、人がこいしかったらしい。中老の主人をはじめ、おばさんから娘まで三人がぞろぞろと、玄関の外まで私を送って出た。そして、この次にも、ぜひ立ち寄って下さいと、熱心にたのむのだった。

あとで知ったことであるが、その一家は、一九五九年、日本から北送されて来た。山口県で小

さな商売をしていたが、それがうまくいかない矢先、北送問題が出てきた。北韓へ行けば、楽に暮らせるという宣伝につられとんでもないことを仕出かしてしまったらしい。それは、歩いて虎のほら穴に、入ってきたようなものである。

主人の名前は、李義秀(63)さんで、夫婦と息子二人、娘一人の五人家族であった。

その一家は、見たこともない北韓に来て、新義州市に配置され、そこの改革洞で暮らすことになった。北韓カイライの集団は、北送同胞が一カ所に集まって生活することを好まなかった。それで、四方八方に分散、居住させ、職場もできるだけハチ合わせにならないようにした。

李義秀さん夫婦は、新義州建設事業所で貨物運搬の力仕事をしていた。

私が、その次の機会に、もう一度そこを訪れた時は、李義秀さんもちょうど勤めから帰ったところであった。手の皮が裂け、着物はつぎはぎだらけのボロをまとっていた。

私たちの話題は、自然、日本のことにふれた。李義秀さんはため息をついた。日本では、なにはともあれ、食べることと着ることに対する心配はなかったと言った。もう少し、楽に暮らしてみょうと欲ばったばかりに、とりかえしのつかないしくじりを仕出かしてしまったと、大地にのめっ込むような大きなタメ息をつくのだった。

『とうもろこしのご飯というのが、この世の中にあるのをはじめて知ったのですよ』

奥さんはタメ息をついた。

事業所では、お米ととうもろこしを半半づつ配給してくれるが、歯をいためて、とうもろこしなどとても食べられないというのだった。たしかに、食べ物だけでも彼らは困ったことだろう。もともと、北韓で暮らした人ならば、お米のおかゆだろうが、小麦のおかゆだろうが、なんでも手あたり次第に食べることができるかも知れないが、自分たちは日本で暮らした時のクセがあって、とても口をとおらないと云うのだった。一、二年は持ってきた着物類や家財道具を売って、空の星を取るほどむずかしい密売のお米を買って、不足分をおぎなうタケノコ生活もできたが、今はそれもすっかり無くなってしまい、どうして暮らせばよいのか、考えれば考えるほど、目のまえが真っくらになるとしきりにタメ息をついた。

北送同胞がはじめて来た時、北韓の人たちはびっくりして、わが目を疑がった。彼らの持って来た荷物というのが聞いたことも見たこともない珍しいものずくめであったからである。テレビセット、録音機、ワニ皮のハンドバッグなどという品物は、余りにも夢のような話なのでハヤから大して気にもかけず珍しがりもしなかったが、ナイロンの衣服やカシミロンのセーターは、目玉の飛び出るような値段で、ひそかに売られたり買われたりした。個人商店というものが無いので、お金で取引きされるのではない。党幹部の夫人達が、人目にかくれて、物物交換を行なうの

だった。

一家の苦しみは、それぱかりではなかった。日本にいた時は、いつも消化剤をのみ、ビタミン剤を取っていたのに、北韓に来てみると、これさえも手に入れることができないばかりか、泣き面に蜂のようなもので、食べ物がひどいため、しょっちゅう体をこわすそうである。病気にかかっても、ろくな治療を受けることさえできない。目が悪くなり、眼鏡をかけようと思っても、眼鏡の店さえない。数日まえから、歯がひどく痛むので、歯科医へ行ったら（新義州には歯科の病院が二ヵ所しかない）珍察の日を今日明日とずるずるに引きのばし、なおしてくれる気配は、いっこうに見えなかったそうである。

それも、無理ではなかった。第一、北韓には歯の患者はいない。虫歯など薬にしたくても無い。眼鏡をかけた人も殆んど居ない。それで、虫歯は北送同胞、眼鏡をかけた人は北送同胞などといった新しい流行語さえ生まれたほどなのである。

北送同胞は、四方八方に散らばっているので、お互いの行き来や連絡もとぎれ、大海の中の孤島のように、完全に疎外された村八分になり、みじめな生活を強いられている。

日本に残っている親戚に手紙一通送るさえもできないという。検閲がきびしくて、少しでも不平がましいことを書けば、その手紙が向うに届かないのはおろか、なぜそのような手紙を書いた

のかと、はげしい追及を受けるということであった。

それでも年よりは、あきらめて暮すことができるが、若い人たちはあきらめ切らず、見るも哀れなほどであった。

私がその次の機会に、友人を訪ねた時、その家の前でぐうぜんその娘さんに会った。彼女の名前は、文子と呼んで、家では昔どおり「ふみ子」と呼んでいた。

彼女は、私を見つけると、すっかり喜び、お友だちとのご用件が終んだら、ぜひ自分の家に来て下さいと、たのむのであった。一時間ほどたってから、友人といっしょにその家を訪れると、とても嬉しそうに迎えてくれた。日本式に、軽く頭を下げてあいさつをすると、すっかり打ちとけて私たちの前に坐った。

その家の奥さんも喜んでくれた。実際に、訪れてくれる人が一人もいないので、とてもさびしいと話しながら、ラジオのダイヤルを回した。判で押したようなプログラムと内容、面白くもない宣伝ものだ。平壌放送のアナウンサーが、一人で勢いよくしゃべりまくっていた。

『ふん、その放送をまたなんできこうとするの』

その家の娘、文子はいらいらしながらこのように言い放った。

北韓でラジオを持っている人は、党の高級幹部だけである。彼らも、放送局と「安全部」に申告

をせねばならない。そして、水も洩らさぬ監視のもとで、平壌放送だけを聞くのである。北送同胞に対しては、しばらくの間、ラジオの所有を認めたが、あとになってダイヤルを固定し、平壌放送以外のものは聞けないようにした。

自由世界で暮らした彼らは、このようなやり方に適応できないようであった。耳も目も鼻も口もふさがってしまったような、息苦しさを感ずるようであった。

文子の母親は、びっくりしたらしくて、顔色を変えた。

『まあ、文子さん、あなたはお客さんの前で、なんということをおっしゃるのですか』

ひどく狼狽した口ぶりで、娘をたしなめるのだった。

北送同胞の中でも、若い人々は、がまんができないようであった。彼らは、自由世界に暮らし、「国家」と「社会」の干渉をそんなに受けた経験がない。それが、北韓にやって来てからというものは、まるでワナにかかった兎のような状態になり、身動きもできない。とても、堪えられないことだろう。老人はともかくとして、若い人々はとても可哀そうであった。私のように、北韓で育った人間も、我慢ができないのだ。あまつさえ、自由がどんなものであるかを知っている彼らにおいておや、である。

私が、なんとなく同調するように気配を見せると、彼女はつもりにつもった不満をぶちまけ始

めた。母親は、大事にしていた紅茶を沸かして、私たちをもてなしてくれた。私にとっては、生まれてはじめての紅茶であった。北韓では、砂糖をキューバから輸入していたが、お金を出しても買えない貴重品だったので、砂糖なしの紅茶を、私はちびりちびりと舌の先で味わいながらのんだ。

彼女は、紅茶をのみながら、セキを切るように、不満を並べはじめた。同じ若い人だから、胸を打ち割って、話してもかまわないと考えたのかも知れない。

彼女は、新義州紡績工場の実験室に勤務していると勤め先を告げた。

一カ月、死にものぐるいに働いて、三十円をもらうが、それでストッキング二足も買えないのだから、どうして生きて行けるかと云うのだった。(北韓では、ストッキング一足が十八円である)。

『もちろん、日本でも決してお金持ではなかったわ。水害で、家が流されたし、日本人から馬鹿にされたりもしたわ』

そういうさなかに、北韓へ行けば、全てがよくなり、気安に暮らすことができるといわれて、このように来てしまったというのである。彼女は、両親をうらんでいるようであった。自分は、最後まで北韓送還などいやだと言い張ったそうである。

彼女は、見ても見なくても、共産社会がどんなものであるか、およそ想像することができたと云った。

実際に来て見たら、すっかり反動分子扱いであるばかりか、監視がとてもきびしいうえに、両親は日本ではしてみたこともない貨物運搬の仕事をするしまつであると述べた。

間食をするクセがついているばかりでなく、一週間に一度は肉を食べないと、体の調子がおかしくなる状態なので、食事をそのように準備しようとしたら、一ヵ月に二百円はかかるというのだった。ところが、実際の収入というのが、七十円ぐらいしかない。家計は大変な赤字つづきであるといった。

その後も、数回、その北送家族を訪ねる機会があった。正直に云うと、その家族をしばしば訪ねる気持にはなれなかった。私自身さえも、疑いの目で見られているのに、それに加えて、北送家族の家をしげしげと訪問していることが北韓カイライ集団当局に知れたら、どんな危険の火の粉を自分の手で招くか、知れたものではないからである。

しかし、わが身につまされた思いで、その家族を同情したい気持だったし、その上に自由社会の話をききたい気持も強かった。若い私が抱いている自由へのあこがれを、彼らは実例をあげてみたしてくれた。その代りに私は、北韓という大変な社会で生きて行く「処世術」を伝授した。

そういうある日、その家の母親が私に向かって、意外なことを云った。
『そろそろ、家の娘もお嫁に行って、むこを取りたいと思っているのですよ』
私は、びっくりしてしまった。そのむことして、私の上に白羽の矢をたてているような口ぶりではないか。
私は、どきっとした。そうでなくても成分のよくない男が、北送同胞の家にむこ入りすれば、いったいどういうことになるのだ。苦しさは現在の二倍になるという話ではないか。いわゆる資本主義の思想が、骨のズイまで浸み込んでいる人間として、烙印をおされてしまうことは、火を見るよりも明らかであった。
それで、私はそうなった場合の不幸を説明した。もちろん、そのものばかりと直線的に云ったのではない。比喩を使いながら、遠まわしにそれとなく、ほのめかした。
おばさんは、とてもがっかりした表情であった。
おばさんの考え方は、苦労している者どうしが、お互いに助け合っていけば、とても幸せではないかということであった。ところが、北韓の社会は、そんなことをゆるすような、生やしい所ではないのだ。
しかも、北送同胞の上には、もっとひどいことが行なわれていた。北韓カイライ当局は、一挙

手一投足を監視しているばかりではなく、日本の「朝総連」を通じて、彼らの日本居住時代の成分と、日本にいる親戚の動態をことこまかく調べていた。その上、「資本主義の思想」が浸みこんだやからだと朝から晩までつまはじきされているばかりでなく、いつどこで、とんでもない災いを受けるかも知れずいつも不安におののかねばならないのであった。

もちろん、北韓カイライ集団当局は、自由な環境から地獄にやって来た在日北送同胞をむかえ、さまざまな洗脳工作を行なった。「同胞講習所」をあわてて開いて、六カ月間にわたり共産主義の理論をつめこみ、

『現在の苦しみは、南韓の飢えた同胞を救うために貯蓄を行なっているからである』

などと、途方もない馬鹿話をまことしやかに聞かせてやるのだった。

同胞接待委員会という組織もできた。しかし、これは常設機構ではなかった。同胞が日本から到着すると、埠頭で歓迎式を開き、いわゆる資本主義の色あいがとくに濃いぜいたく品、いわばテレビセットや金の指環やテープレコーダーなどを進んで献納する形式で、召し上げる仕事を行なう。このような体のいい略奪行為をこととしながらも、いちばん大事なこと、北韓の社会にどのように適応せねばならないかを教えてやろうとはしない。それも、そのはずで、北韓のみじめさは教えようにも教えようがなかっただろう。

これで、北送同胞は、村八分にされる。しかも、周囲の環境に対する不満は、ひっきりなしに爆発する。人口二十万をこえる新義州市にしても、下水道の施設がないし、いわゆる「国営商店」のショウインドーにならんだ商品は、読んで字の如く、陳列品に過ぎず、商品として売りに出されたためしがない。

そればかりではない。一般の人々との間には、ミゾがある。なにを好きこのんで、この地獄の真っ只中にのこのこと入り込んできたのだとでも云いたげな、ある種のなげやりに近い白眼視と冷遇が待っている。

北送同胞は、いたるところで環境適応に失敗していた。勤めに出ている人は、彼らなりに理論と実際の余りにもはなはだしい距離に堪えきれなくなって、抗議を行ない、学校に通う若い人たちは、学校できくこと、やることが労働指導所のようで、また警察の情報係りのようだと不満をぶちまけるのだった。

北送同胞は、生活力が弱いという評を一般にきいていた。苛こくな北韓の社会で、もまれるだけもまれた人々から同情を寄せられるのはおろか(もちろん、他人を同情したい気持が、北韓の同胞の側にないからでもあるが)、その生活力のもろさをいたるところで非難されるのだった。

普通の北韓同胞が、ボロを着て歩いているのは、あたりまえのこととされるが、日本からの北

送同胞が薄ぎたないなりをしていると、笑草となった。その理由は簡単だ。ワイシャツ姿にネクタイをしめ、高級品の雨傘や日傘を持っている人は、党員の幹部か、さもなければ北送同胞と相場が決まっていたからである。

私が、その家の娘、李文子さんに最後に会ったのは、六六年の春のことであった。彼女は、すでに結婚していた。主人は、新義州食品工場に勤める人であると言った。ところが、結婚はしたものの、主人が肝臓炎をわずらっているので、辛さがいっそうふえたばかりだと語った。もはや一日一日が余りにも苦しいのでとても堪えられそうでないと訴えた。

彼女は、云わなかったけれども、彼女の弟が教化所（刑務所）に送られたということを、私は知っていた。罪は、かよっていた新義州高等技術学校で、先生にくってかかったという、それだけのことであった。

事実、北送同胞は、想像を絶した不可解な社会環境に直面して、ずるずると引きまわされていた。環境を自分のものにすることができなかった。どんなに適応し、あるいは堪えてみようと努力しても、人間というものは、一朝にして人間動物や人間機械にはなれない存在なのである。殆んど二十年間も赤どもにしごかれ、思想教育を受けてきた本国生まれも忍耐の限界点をさまよっているのに、まして日本から甘いロマンの夢を抱いて渡ってきた在日北送同胞においておやと云

いたいところである。

一九六六年八月、金日成が平安北道の道事業をいわゆる指導するために、新義州にやって来たことがある。この時、北送同胞たちは生活の改善と最少限度の自由を要求するデモを計画して、事前に発覚されたことがある。それで、三十数名がつかまった。それで、北送同胞に対する監視がいっそうきびしくなったということは、新義州市の市民の間では公然の秘密になっていた。

たとえ、李義秀さんの家に出入りしたのはわずか数回にすぎなかったけれども、私は貴重な体験をした。私の脱出計画には、いっそう熱がこもりはじめたのである。

それればかりではない。はっきりした自分の信念を持たなくで、世の成り行のままに翻弄れる人間の悲劇を、この目で見ることができたのであった。

北送同胞の李義秀さんの一家がそうであったし、昔の私たちの一家がまたそうであった。一九四七年度に強制移住をさせられた時、ためらうことなく韓国へ行けばよかったのである。それが実行できなかったのは、北韓カイライ集団を無条件に信じたからというよりも、全てを無にして新しく出発する勇気の不足と、故郷の大地を捨てるわけには行かないという愚直なふるさとへの愛着からであった。

おそすぎないうちに、勇気と決断を下さねばならなかったのである。何かが狂っている現実を

ぶち破らねばならなかったのである。おそすぎないうちに、人間としての最少限度の自由と、ほこりと愛情を取りもどさねばならなかったのである。人間は、これのない所では、生きることができない。これを奪われた所にいる人間は、生きているのではなくて、ただ死なないでいるだけである。

自由がとうといものであると、簡単に云う人は、なぜ自由がとうといものであるかをはっきりと骨身にしみるほど感ずることができない、自由とは、哲学の用語ではない。それは、きわめて肉感的な皮膚的な、用語である。

自由をほしがるのが、人間の本態でないだろうか。それなくしては、生きることが、できないからである。机の上で、西洋哲学があぁだ、東洋哲学がこぉだと比較しながら、自由を吟味することが、決して悪いことだとは思わない。ただ、自由の威力が温かい体温のように私を目ざめさせてくれたので、命がけにこれをえらぼうと決心したのであった。

北韓の社会で暮らしてきた私にとって、自由とは命と引きかえても惜しくない充分の理由を持っていた。私は、自由のために、自分の全てをかける決心をした。自由は、頭で理解することがやさしい単語であると同時に、それだけ手に入れることが難しい単語でもあった。

勇気がない時、果して、どんな運命が私を待っているのだろうか。他人の言うことをうのみに

し、そして無信念に北韓カイライ集団の宣伝に欺まされて、北送の運命の道を歩んだ在日同胞の娘から、私は、くりかえされてはならない悲劇、純朴ではあるが、勇気を持たない優柔不断な人々の悲劇をもう一度はっきりと見せられたのであった。

六六年四月から六七年三月にかけて、北韓では「住民再登録事業」が行なわれた。北韓カイライ集団は、もっと能率的な搾取を行なうために、現代版士族と平民のけじめをもっとはっきりとつけておきたかったのであろう。階級の再構成である。人間機械の熱誠党員を頂点にすえ、その下に三等分、四等分された階級の区分をおいて、しいたげられる平民を生産する階級の再調整、この必要を感じたのであろう。

上には、三代にかけて家系を細かく調べあげた。どんなに小さなアラでも一度発見されれば、一言のもとに平民の烙印をおされる。

全住民一人一人のホコリをはたき出すのが「住民再登録事業」というやつである。まず、現住所別に調査を行なう。次には、地方別に調査を行なう。小学校をはじめ学校別に調査を行なう。次には、前住所と故郷までさかのぼり、この全てが一つの書類つづりにまとめられる。

「住民再登録事業」が終れば、一九五八年の大虐殺に劣らない野蕃行為が行なわれだろうと、人々はささやき合った。

私が脱出を思い立った重要な動機の一つが、まさにこの「住民再登録事業」にもあった。

しかし、すでに数回も云ったように、「住民再登録事業」こわさに、脱出しようと考えたのではない。さまざまな苦労をしてきたので、たとえどんなことが持ち上がるにしても、殆んど慢性になり、慣れってこなっていたからである。北韓の社会では、とても自分を存在させることができないというもっと本質的な理由が、私の北韓脱出にはあったのである。

一九六六年九月七日、私は、鴨緑江の河口から除じょに海の方へ出て行きながら、脱出計画が少しも間違った行為でないことを、最終的に確認した。

ながいと云えば、とてもながかった過去であった。過去の山脈―その峯峯をさかのぼりながら私がそこで発見したのは、果して何であったか。私は、そこでいっそう思い切って完全に過去を断ち切ることを決心した。

二度とくりかえされてはならない過去、これ以上引きのばしてはならない過去であった。

このような決意を知っているのか、知らないのか、「平新艇三四号」は前方の視野を少しづつひろげながら、大海へ大海へと出て行った。やがて水平線が現われた。私は、ひとみをこらして、水平線の向こう側をにらみつけた。私には、水平線の彼方の世界が、手に取るように見えるのだった。

15、脱　出

私が乗っていた「平新艇〇三四号」と、同僚船の「平新艇〇三三号」は、鴨緑江を抜けて、大海に出た。針路は西。行き先きは、鴨緑江河口から西方六〇マイルの海洋島（中共治下）と緑島近海。

これが、気にかかる。今度こそ、必ず脱出すると決心した私たちであった。ところが、漁場が余りにも北寄りではないか。万一、反乱決行八時間以内に北韓カイライ集団に知られれば、南方海域で警備任務についているカイライ集団の快速艇につかまってしまうだろう。

それればかりではない。泣き面に蜂とはまさにこのことで、「平新艇〇三三号」には、職場長の金利沢が乗り込んでいた。職場長はめったに乗らない。せいぜい一年に一、二回、漁撈作業の全過程を監視するために乗り込み、細かいことまでいちいち命令を下すのであった。

脱出を考えている私たちにとって、これは全く有難くないお客である。

職場長金利沢が来ているので、船員はいっそう緊張し、間違いを起こさないように、気を張りつめていた。

私たちが独船で作業するならば、どんなによいだろう。〇三三号に職場長が乗っているので、主導権はあちらにあり、〇三四号は言われるままに動く羽目となっている。だから、脱出に成功するためには、実質的には船二隻を相手にしなければならないわけである。

全ての条件が不利だ。しかし、もはや決心をひるがえすわけにはいかない。幸い、脱出に必要な食糧とディゼル油だけは、たっぷりあった。飲料水も十五トンは積んであった。食糧も十月五日までは持つ。

天候は連日よかった。風も、秒速三〜八メートル程度で、おだやかな方だったし、波も大きくなかった。全くの秋の天候である。海の空は、いっそうすんで高い。まるで、船が中空にふわりと浮かんで、前へ前へと進んでいるように感じられた。

清朗な天気に比べて、私たちの気持は重く沈んでいた。条件が、私たちに背中を向けていたからである。絶望感も感じた。今度の出漁でも成功出来なければ、どうしよう。

いつものように、南方の中共近海まで進出してくれないものだろうか。それなのに、よりによって北のそのまた北の方へ行っているではないか。それに、なんでまたこんな重大な瞬間に、職

場長のヤツまで乗り込んで来たのだ。

武器庫の状況が、どうなっているかも気がかりの一つだ。いつものように、四名の射手が、武器を持っているのだろうか。あるいは武器庫にしまっておいたのだろうか。

もし、射手たちが手に武器を持っておれば、とても決行することはできない。素手の私たちは、彼らの敵ではない。ただ武器が、武器庫におさめられていれば、一条の希望はある。私たちは、この希望に全てをかけた。

私は九月八日午前五時から網を入れはじめた。海洋島の沖合いであった。九月は、およそ盛漁期とされている。とくに太刀魚の多く取れるのが、この時期である。

重労働の毎日が過ぎて行った。ところが、想像以上に水揚げが少ない。太刀魚は見ることさえもできず、網にかかるのは、少しばかりの雑魚と海底のドロだけである。

網を投げながら、機会を待っていた。チャンスはなかなか来なかった。水揚げが少なくなると、職場長以下船の幹部たちの神経がいら立ちはじめた。手あたりしだいに罵声をとばし、矢つぎばやに命令をたすのだから、とてもチャンスをつかまえそうになかった。

九月十三日になった。この時まで、二隻のあげた漁獲量は、わずか五トンに過ぎなかった。これでは、お話にならない。帰港すれば、事業所支配人の雷が間違いなく待っている。恐れをなし

た職場長と船長二人は、すっかりあわて、気をもみはじめた。
漁獲量が少ないことは、決して船員の怠慢やサボのせいではないのであるが、しかし水産物増産計画が厳とひかえている以上、責任量ははたさねばならない。いらだたしい督励は、いっそうはげしくなった。
その日の夕刻、両漁船の幹部会議が開かれた。職場長の金利沢と〇三三号の船長文炳泰、そして私たちの〇三四号の船長文士善は、無電室で待期していた。
漁場を変えることにしたようであった。太刀魚がとれないから、ほかの漁場へ行こうというわけである。この討議のあと、山東半島の方へもっと入り込むようにと命令した。
そこの漁場には、新義州水産事業所所属の平新艇「〇一九号」と、「〇三五号」が一組になって、網を入れていた。
こうして、その日の晩、二隻の漁船は船首を山東半島の近海に向け、航海を開始した。
私と李燦虎は、事態がこうなるのを待っていた。それだけ、北韓カイライ集団から遠ざかりつつあるので、チャンスをつかむ可能性が大きくなってきた。
その日、私と李燦虎と張大衡がひそかに寄り合い、見通しと決起計画をこまかく話し合ってみた。

『どうだ。やれそうか』

『わからん。今の状態では難しい』

張大衡が答えた。張大衡の情況分析はこうである。目下両船は、最高の緊張度にある。しかも、私たちの船と、〇三三号の距離が近すぎる。第一段の計画が成功し、船を完全に掌握したとしても、すぐに〇三三号にさとられる公算が強い。そうなれば、万事休すではないか。武器庫の状況がどうなっているかも知らないのだから、念には念を入れたい。彼は、慎重にはこびたいと述べた。

『僕も同感だ。条件が悪すぎる』

これは、李燦虎の考え。

『では、こういうふうに決めよう。何月何日にやると、日どりを決めることは避ける。ただ、チャンスだと判断した時には。ただちに行動を起こすこと』

『いいだろう。いつも待機する状態だ。誰でも今がチャンスだと考えたら、連絡を取ること』

『それから、まず武器庫の占領から……』

『わかった。ところで、気づかれないように、せいぜいうんと笑ってくれよ』

李燦虎は、冗談まじりに云った。

三人はいっしょに笑った。それから長居は無用と、それぞれの持場へさっさとさった。三人は、注目の対象になっていた。その三人が、集まってなにかひそひそ話をしている現場を見つかれば、疑惑はいっそうふかまるだろう。

私は、その日の晩は、機関当直勤務がなかった。三人が集まって、相談をしたあとなので、重荷をおろしたような気持であった。武器庫と弾薬庫は、私の寝室にある。直ぐそばのその内部を調べることができないので、気持は落ちつかなかった。

船尾の寝室には、ベッドが七つあった。私は、南浦水産学校の実習生ととりとめのない雑談をかわした。彼らは、二十六才以上の青年たちで、一定の職場に籍をおき、一年間の実務教育をうけたのち、再びもとの職場にかえり、幹部職につく人たちであった。全部四名で、卒業まえに私たちの船で実習を行なっているのだった。

実習などは別に考えもしないで、ベッドにひっくりかえり、馬鹿話ばかりしている怠け者の実習生たちであった。

彼らとひとしきり冗談を言い合っていたら、十一時になった。そこで、ベッドにもぐりこみ、ぐっすり寝こんでしまった。午前三時二〇分ごろになっていたのだろうか、私はふっと目をさました。

二、三回寝がえりを打った。緊張していたせいか、すっかり頭がさえてきた。寝室には百ワットの電球がついていた。エンジンの響きと舷側を打つ波の音以外には、なにも聞こえなかった。私はしばらくの間、『あるいは、今がチャンスなのかも知れない』と考えた。

おそくまで起きていたせいか、ほかの連中は、丸太のようにぐっすり寝ていた。

私は、ベッドからおり立ち、部屋じゅうをぐるりと見まわした。異状はなかった。

寝耳の早い甲板員、金俊永老人をゆり動かしてみた。手ごたえがない。金老人は夢の世界を前後不覚になってさまよっている。

それでも安心ができなかったので、一人一人の顔を確認した。機関長の張元彬は午前二時、当直勤務から帰ったばかりなので、ぐっすり寝こんでいるはずだし、操機長の張英沢は勤務交代で外だ。

やる気さえあれば、船尾の寝室は、すでに占領したに等しい。すばやく武器庫を開いてみた。狙撃武器四ちょうが並んでいた。これで、武器庫も掌握したことになる。

外部の情況を調べるために、タラップをのぼって、外に出た。注意ぶかく甲板に上がった。操舵室の方へ足をはこんだ。

『誰だ?』

暗やみの中で、誰かが叫んだ。私は、びっくりしたが、平静をよそおい、すたすたと歩いて行った。操機長の張英沢であった。

『ああ、閔だよ。おなかがいたむんだが、薬あるかい』

『薬？　機関室にあるだろう』

張英沢は、こう言いながら、機関室に入って行った。私もついて入った。張英沢は、ひき出しから「健胃錠」をさがしてくれた。

『これをのんだら、きっとよくなるだろう』

「健胃錠」二錠を水なしに、その場でぐっとのみ下した。張英沢は党員ではあったが、職責の上では私の下に属した。そのせいだったかも知れないが、せっせと機械手入れをはじめた。

私は、彼にわかれをつげ、外に出てから上甲板に上がった。煙草をくわえて、鋭くあちらを見回わした。

前方約三〇マイルの地点に、山東半島の東側突出部がある山東高角が見えた。灯台の光りがきらめいていた。二隻の漁船は、約八ノットのスピードで進んでいる。五百メートルほど前方に、〇三三号の灯が見えた。

私は、操舵室に入った。船長の文士善は、二時に副船長の金起鳳と舵を交代し、ベッドでぐっ

すりと寝ていた。そのほかには、憎まれ者の党細胞副委員長、朴昌萬一人が警備についていた。

朴昌萬と金起鳳が私の方を見た。怪しむようでもあった。

『腹痛がひどいのです。くすりありませんか』

『くすり、ここにはないよ。機関室に行ってみなさい』

朴昌萬が言った。

私は、わかったとうなづき、外に出た。時計を見た。三時四十分ちょっと過ぎであった。

（これから、どうする？）

私は、自分に訪ねた。決定を下さねばならない。今が、果してその素晴らしいチャンスなのだろうか。決定を下さねばならない。

私は、決定を下した。今が、そのチャンスである。ただ、もう少したてば、夜が明けるのが心配だ。暗いうちに、全てを成功させねばならない。ほかの条件はこちらに有利だ。

現在位置は、山東半島山東高角の東北方三〇マイルの海上で、北韓カイライ集団からは二百マイル以上も離れている。それに〇三三号が、こちらを大きく引きはなして、はるか前の方を進んでいるから、銃声は届かないだろう。これが、最大の好条件だ。

（いそごう）

私は、トッサに決心すると、足早やに船室に向かった。部屋に入ってから、李燦虎をゆりおこした。李が目をあけた。

『どうした?』

李燦虎がねぼけまなこで訪ねた。

『やる』

私は、息が切れたので、これだけようやく言った。続いて、現在の情況を説明した。

『何だって?』

李燦虎は、まだはっきり目がさめていないらしい。しばらく考えているふうであったが、

『わかった。ぼくもちょっと考えさせてくれ。君のベッドで待っていてくれ』

こう言った。

私は、ベッドにもどった。長話は禁物だ。ベッドに横になって、李燦虎の来るのを待った。幸い、部屋の中は、さっきと変らず、異常はなかった。皆は、夢の世界をさまよっていた。

一分ばかりたってから、服装をととのえた李燦虎がやって来た。

『どうする?』

『いいだろう。時間がない。始めよう』

李燦虎は、きっぱり言い放った。

私は、さっと起きあがった。まず、武器庫の方へ行き、歩兵銃二ちょうを引き出して、タラップをのぼった。食堂を通って、船尾甲板のスミにそれをかくし、寝室にもどった。

李燦虎は、弾薬庫を開け、狙撃武器の実弾と手榴弾十個を全部持ち出してきた。

私は、武器庫から機関短銃二ちょうを引き出した。

張大衡も起こしたかったが、寝室にあかりがついているのを見ると、誰かが起きているような気がして、行けなかった。

李燦虎と私は、テキパキと働いた。手榴弾を持てるだけ持ち、残った二箇を海に捨てた。それから銃に弾をこめ始めたが、手が震えて機関短銃の方は、なかなかはかどらない。やむを得ず、いちばん簡単な歩兵銃からさきに装塡した。

緊張の連続だったので、体中に汗が流れ、手は震えた。この時、新しい事態が起こった。いつからか、雨がシトシトと降っていた。雨が降れば、機関当直の張英沢が機関室の窓をしめに、外に出て来るかも知れない。

『いけない』と私は云った。『張英沢が、窓をしめに出て来るかも知らん』

『そうだ。弾ごめが終ったなら、先に行って見張ってくれ』

李燦虎が言った。彼は、機関短銃に実弾をこめている最中であった。

私は、機関室の方に行った。力をこめて銃をにぎった。すでに、矢は弦をはなれたのだ。じゃまする奴が現われたら、ほかに方法はない。その場で射殺して、やりとげるだけだ。

この瞬間、私は、機関当直の張英沢がこちの方に歩いて来るのを発見した。思ったとおり、窓をしめるためであった。私は、全身の血が逆流するのを感じた。どうしようか？

張英沢は、ねむたいのか、よろめきながら歩いて来た。まだ、私を見つけていなかった。あいつが私たちを発見して、さわぎ立てれば一大事だとトッサに気づいた。それから、張英沢が帰港報告で、私をさんざんにこきおろしたときの、その表情がちらっと頭を横切った。

張英沢は私を発見し、そのまま逃げながら、船中の人をたたき起こすかも知れない。気が気でなくなった。

張英沢が、私のまえ五メートルの所まで近づいた。

『とまれ、動けば射つ』

私は叫んだ。声が大きすぎたような気がして、またこわくなった。

張英沢が私を見た。その目がとたんに大きくなった。それから彼は、後の方へ向きをかえ、逃げようとした。私は、血が肉を貫いて飛び出して来るような気がした。引き金を引いた。瞬間的

に、一発、二発、三発、四発、五発の銃声が、私の意識を断ちきりながら、響きわたった。

李燦虎がとんで来た。彼はすばやく事態を見てとった。私は、銃をにぎったままぼうぜんとしていた。手の平をはげしく打った撃発反動が、頭を連続的にガンガンと殴りつづけていた。

李燦虎か、前の方へ走って行った。私は、彼が操舵室のドアを足でけり、中へ飛びこむのを見た。叫び声を聞いたような気がしたが、すぐに銃声が起こった船長の船室が開かれる音がした。また銃声が起こった。

私は、気を取り直した。すぐ目の前に、金俊永が迫っていた。私は射った。私は前の方へ飛んで行った。船尾寝室では、大騒ぎが持ちあがり、皆あわてふためいていた。ベッドのきしむ音、皆のガヤガヤする声が聞こえた。

『動くな動けば。射つ。僕は副機関長だ』

こう叫んだ私は、いそいで無電室に飛びこみ、無意識的に引き金をひいた。その瞬間、私は目のまえが真暗になった。銃の故障でタマが出ない。

私は、あわてて李燦虎を呼んだ。李がこちらへすっとんで来た。無電士が〇三三号に、無電を送る刹那であった。銃声といっしょに、無電士は受話器をかけ、キイーを握ったまま、その場に倒れた。李燦虎は、今度は船首寝室の方へとんで行った。

『動けば撃つ』

彼の叫びが私の耳を打った。

張大衡が近づいて来た。彼は、なにも云わずに、強く私の手をにぎった。それから、急に気がついたように、前の方へ行くと、操舵室の電灯用スイッチを下におろした。外部の電球か、いっせいに消えた。

船が、カーブを切り始めた。私は、それを足もとに感ずることができた。張大衡が舵をにぎった。彼は東南方の方角へ船首を回わしていた。まだ落ち着いた気分にはなれなかったけれども、どうやら船は掌握したように思われた。

それで、第一段階は成功したことになる。四時一〇分ごろになっていた。私は〇三三号の方を見た。〇三三号は、わけがわからないようであった。それ以上進みもしないで、ぐるぐると回っていた。こちらの船灯は火を消してしまったので、なにも見えないだろう。

無電士の飛ばした電波をキャッチできなかったようである。〇三三号は、電灯をそのままつけていた。海上反乱が起こったことを知らないのだ。しかし、夜が明け、こちらの船を発見すれば、追いかけて来るだろう。

私たちの船は、すばやく暗やみの中に、吸いこまれ、姿を消してしまった。それが、私にはと

ても痛快なことであった。双児のように、ずっとくっついて行動してきた〇三四号が、突然見えなくなってしまったわけだ。

〇三三がいないからといって、〇三四号がハナ垂れ小僧のように、迷い子になるはずがないではないか。私は、〇三三号の職場長と船長が、ベソをかき、あわてている姿を見るような気がした。

彼らは、きっと夜が明けてから、私たちの船をずいぶん探したに違いない。〇三四号の行方不明について、海上の全船舶はもちろん、事業所の方にも電報を打っただろう。大騒ぎが持ち上がるだろう。しかし、心配は断えなかった。もし〇三四号が脱出中であることをわかれば、快速警備艇はもちろん、飛行機までも動員するだろう。

いっそうはげしい緊張感におそわれた。しかし、それ以上の心配はしなかった。雲がはやい速度で散っていた。風が強くなった。非常に強くなった。マストのアンテナがうなり声をあげた。

波が高まった。波高は一・五メートルはなりそうであった。強く甲板を打つ。それがちょうど〈でかした〉と、私の肩を打ってくれる親友のげんこつのような気がした。波が、白いあわをふくんで、どっと甲板の上になだれこむ。私は、それをまともにかぶった。まるで、ぬれねずみの格好である。塩からい水が、体全体から、したたり落ちた。

全速を出しているエンジンの音が、あまりにも大きかった。これでは、エンジンが焼けただれてしまうかも知れないと心配になったが、そのままにしておくことにした。焼け切ってしまっても、かまわないような気さえした。事実、エンジンは全速をこえていた。三百馬力の性能を持つドイツ製のＳＫＬの最大速度は、十二ノット程度であったが、この時の私たちの船は十三ノット以上のスピードで、東南方の方角に向かって、疾走していた。

徐じょに、東の方が明るみはじめた。風はいっそう強くなり、大きな波をまき起こすので、船はいっそ大きくゆれはじめた。

船の上で、私たちは六個所の監視をし、機械を回し、船を運転せねばならなかった。力に余る多くの任務を果たしていたのである。

死にもの狂いの李燦虎は、司令塔にのぼって、四方を監視し、張大衡は舵をとって船をあやつり、私はエンジンを動かしながら、二カ所の船尾寝室にある六名を見張らねばならなかった。

安炳録も連絡任務を受け持ち、司令塔と操舵室、そうして私のいる機関室の間をいそがしく往き来した。

夜が明けた。私たちは船尾の船員たちを船首の寝室に集めておくことにした。私は、彼らに向かって、

『一分内に船首に集まらなければ撃つ』と怒鳴り、彼らの行動を見張るために外に出た。ところが、どうしたことだろう。勇ましかったエンジンが急に停まってしまった。私と李燦虎は、いそいでエンジン・ルームにとびこみ、威嚇射撃を行なった。

『誰だ、すぐエンジンをかけなければ撃つ』と怒鳴った。なんの手ごたえもなかった。機関に入るのが、急にこわくなったが、そのまま放っておくわけにに行かなかった。威嚇射撃を加えながら、入って行った。銃をかまえて、四方八方をさがしまわったが、機関室には誰もいなかった。調整ハンドルが停止位置にもどされているだけで、異常を発見することができない。私は、空気タンクを開き（空気起動式で二、三秒内に起動が可能である）ハンドルを動かしたら、再びエンジンは轟轟と音を立てながら動きはじめた。回転計の針は、五二〇をさした。

私たちは、安どのため息を洩らし、捜索を続けた。実習生二名と機関長、そして軍事副船長柳輪輿ら四名の姿が見あたらなかった。あるいは海に落ちて死んだのかなという考えもちらっとうかんだが。そうだと断定してしまうこともできなかった。彼らが、海に入る現場をたれも見ていないからであった。私たちは、もっと見張りをきびしくしながら、緊張を解かなかった。

死体は、そのままにしておいた。それを片づけるだけの心の余裕がなかった。

私たちは、ますます緊張した。事態が急変して、失敗に終るかも知れないことが気にかかった

からである。そう云えば、その瞬間まで成功すると考えるよりも、死を覚悟していたといった方が、私たちの気持にぴったりしている。

やがて、海上はすっかり明るくなった。くもっていたので、太陽を見ることはできなかった。海が荒れ、波高は二メートルに及んだ。

海は荒れ、私たちは風と波をひっかぶつたが、それだけ気持は痛快であった。こうして第一次計劃は見事に成功したと考えてもよさそうだという、一種の安ど感にひたったのであった。

それからは、希望の光りが見えはじめた。このまま進め。「平新艇三四〇号」よ。今の調子でも早く走れ。私たちは、はげまし合いながら、波高い水平線の方に目をやった。今に、あの水平線上には新しい大地が、新天地が浮かびあがるだろう。緊張とはげしい運動にも拘らず、一向につかれをおぼえなかった。

五大洋六大州が、はじめて確実に姿を現わしだ。自由だ、脱出だ。若さがたたかい取った勝利だ。遂に、鉄のカーテンを勇敢に突き破り、前へ前へと進んでいるのだ。

希望を乗せた船よ、どこへ行こうとしているのか。もっとスピードを出してくれ。風よ、船を前に押し出してくれ。波よ、こたえてくれ。

私たちは、針路を群山の方向に定めた。

とても退屈な時間であり、あせりに満ちた時間であったが、時間は変ることなく流れつづけた。その時間の流れにのって、〇三四号は群山に近づいていた。いつの間にか、時計の針は午後六時をさしていた。

この瞬間である。望遠鏡で前方を見つめていた張大衡が『島だ、島が見える』とわめいた。私は、彼から望遠鏡をうばい取り、目をこすりながら、彼の指さす方角をにらんだ。

島の姿を見たと思った瞬間、私の目は涙でかすんでしまった。私たちはいっせいに喊声をあげた。どうすればよいか、わからない程であった。(一方では、あれが海州だったらどうしようかという馬鹿げた考えもうかんだ)。共産主義よ、永遠に消えてなくなれ。自由を手に入れた。母なる祖国にかえった。

このように叫ぶ私たちの心は、勝利を得たほこりと自負心、そして共産主義に対する憎しみの思いが満ち、できれば金日成に、もう少しでかい爆弾をお見舞いしたい気持であった。

ここで、私たちは日本へ行きそこで死をとした私たちの壮挙に全世界の目と耳を集め、共産主義の野蕃さを全世界の人々に告げようと決心した。そればかりではない。日本に行けば、北送同胞の悲劇を伝え、そのような悲劇がくりかえされないように、闘かおうと決心した。この目的さえ達成できれば、あとは祖国大韓民国、夢の中でも忘れたことのない自由人の故国、私たちの故

国へ帰るつもりであった。私たちは、自分たちのやったことにふかい誇りを抱き、自由な人間として、果さねばならない任務が余りにも多いことに、もっとはげしい闘志と緊張をおぼえるのだった。

16、自由への凱旋

十四日を一日じゅう全速で航海した。船は、およそ群山西方一〇マイルの海上に来ていた。日は暮れ夜になった。

私たちの生涯で、いちばんながい一日であった。この一日の間に、人生の航路を変えたばかりでなく、私たちの船を自由の港の方へ駆っている。

私たちは、船首寝室に監禁され、震えている船員たちに夕食を運んでやった。彼らは、私たちにかえって「有難い」と礼を言うではないか。きっと、みんな殺されてしまうと考えていたようであった。

私たちは、むやみやたらな殺傷ざたを好まないと彼らに納得させ、北韓カイライ集団の野蕃な行為について説明し、力を合わせて自由世界へ行こうと説いた。

彼らは、本気かどうかは知らないが、それに応じた。

はじめて、船の掃除を思いついた。船の上は、せいさんをきわめた。いたる所に銃弾の跡がついていた。死体五つが、ころがっており、血は池をなしていた。私たちは、死体を見ても別にこわくはなかった。

それだけ緊張していた。死体を海に投げこんだのち、私たちは海水で、あたりをざっと流した。

今度は、私たちは船の内部をくまなく、さがしまわった。軍事副船長柳輪興、機関長の張元品そして実習生二人が見えなかったからである。彼らが、どこかに隠れているかも知れなかった。

緊張をとかなかった。無電室に入り、裏切り者があるいは無電を打ったら困ると思ったので、無電機をこわしてしまった。無電機は、すでに朝の騒ぎの時に、台なしにされていた。念には念を入れた。

無電室は、ブリッヂのすぐ下にあった。私たちは、ブリッヂに登るつもりで、無電室のそばにあるタラップの手すりに手をかけたとき、背中に人の気配を感じた。

私と李燦虎が、いっせいに振りかえった。無電室の開けてある窓に人の姿が現われた。軍事副船長の柳輪興であった。柳は、手になにか太いものを持っていた。

それは、危機一発の瞬間であった。

『手をあげろ、出て来い』

李燦虎が、やにわに叫んだ。柳輪輿は顔色が白色になって、無電室の外に出て来た。彼の手には鉄棒がにぎられていた。

おそらく、私たちが人の気配を背中に感じなかったならば、そして振り返らなかったならば、事態がどういうふうに発展したかは、誰もわからない。柳は、徹底した「赤」であり、人間機械であった。

彼は、私たちをそのままにはしておかなかっただろう。結局、私たちの運がよかったわけである。

無電室のベッドの下に、柳のほか、機関長の張元品と実習生二名が隠れていた。大変な連中であった。ベッドの下の、そのせまい場所に四人もの大の男が入りこんで、二十時間以上も身動きもしなかったわけである。

『外に出ろ』

私たちは、その四人を甲板に連れ出した。彼らは手をあげて、私たちの方を見ていた。私たちは相談した。その結果、実習生二人は船首寝室に監禁した。

あとの二人、悪質な党員で、最後まで反抗の色を見せている残りの二人は、その場で射殺した。それは、とても危い瞬間であった。あとで考えてみても、身の毛のよだつ危機一発の刹那であった。

私たちは、気持をゆるめなかった。交代で寝ることにしたが、四人のうち誰も目をつぶる気になれなかった。船首寝室に監禁した九名の人間に、神経を使わねばならなかったのである。たとえ武器は、私たち四名がにぎっていても、人数の上では彼らが多いからである。彼らがひとかたまりになって襲いかかって来れば、大変なことになる。北韓カイライ集団はみんなに軍事訓練を行なっていたので、その九名はそのまま全部が戦闘員だと考えても間違いではなかった。

彼らを見張りながら、一方では北韓カイライ集団の野蕃な政治について説明し、もし反抗さえしなければそれ以上血を見ることはないと話して聞かせた。そして、自由世界で誇りをもって、自由に生活するということが、果してどんなことであるかを知っているのかと、北韓できいた韓国の自由放送を引用、説明した。

彼らも、ようやく安心したようであった。こうして、閉じこめられていたのでは、とても退屈だし息苦しくてならないから、なんでも仕事があればさせてくれと、協力的な態度に出た。

私たちはもちろん、それを断った。

それでは、トランプでも持って来てくれないかと言った。時間つぶしにトランプでもしたいというのであった。トランプを持って行ってやった。

その間にも、船は全速で走りつづけていた。今や、全てが思う通りに運んだわけである。問題は、船が故障を起こさなければ、それで万事がうまく行きそうであった。

私たちは、航路を東の方向に変えた。十五日の朝、船は木浦沖合いの西南方、約十五マイルの海上にあった。私たちは、大韓民国の沿岸をぐるっと回るつもりであった。麗水沖の多島海を経て、済州島の上を回り、対馬島の前を抜けて、日本の本州に向かう計画であった。

私たちの海図は、大韓民国と中共の間の黄海を中心にしたもので、南方海域については、せいぜい麗水までしか出ていなかった。それで、当然のことながら、海図がほしくなった。地理の常識だけをもってしても、およその見当はついたが、しかし、見当をあてにして、船を動かすことはできなかった。まかり間違えば、太平洋の方へ流れて行ってしまうおそれさえもある。

途中で、船に会えば、海図を借りることにした。やがて、十五日も暮れかかったころ、船は、麗水から五マイルほど離れた所まで来た。そこから、再び南東の方向へ転針した。

生まれてはじめて見る南海の風景は、すばらしかった。次から次へと島が現われた。海はな

ぎ、観光旅行の気分になって、美しい多島海の眺めに心を奪われた。
再び、夜が過ぎて、十六日の朝がやって来た。私たちは海図なしに、中東に向かっていた。
遂に、朝九時ごろ韓国の漁船にそうぐうした。相手の船が、韓国の漁船であることが、とても嬉しかった。すっかり安心することができた。これで、やっと脱出に成功したことを信じてもよかったのである。
船腹に、「順風号」と船名を書いたその船は、はじめて見る怪物のような私たちの船に、疑惑のまなこを寄せるようであった。
どこの船かと、私たちに訊ねるだった。
私たちは、ありのままに答えたかった。そして、感激で張り裂けそうな胸中を打ち明け、抱き合って、なつかしい思いをなだめたかった。
しかし、私たちはそれをがまんした。まず、日本へ行こう。日本に到着して、北韓カイライ集団の野蛮さを全世界に知らせ、北送同胞が居なくなるように、私たちの反共事業を実践し、そのあとで祖国へ凱旋してもおそくはない。
それで、私たちの所属はあとでわかるようになるから、私たちを信じて、海図を貸してほしいとたのんだ。

彼らは、疑惑が晴れたのか、網に結びつけて、海図を渡しながら、なん日までに必ず釜山港に持って来てほしいとつけ足した。

私たちは、それを約束した。それで、すっかり緊張がほぐれ、水揚げはどうなのかとか、目の前の島はなんという名前なのかとか、いろいろなことを訊ねた。その島が、巨文島であることを、その時に始めて知った。

「順風号」に心から感謝した。

こうして、私たちの船は再び航海を続けた。海図を開いて見た。それまでの航路も、比較的に正確なコースを進んでいた。見当だけで進んできたのであるが、頭の中でかいた海路と海図の海路は、殆んど一致していた。

しかし、その海図も私たちを満足させてはくれなかった。それは、数十年まえに日本の人たちがつくった海図で、日本の対馬島と九州の一部が出ているにすぎず、ほかの所は殆んど略されていた。それでも、気を落とさずに前進した。到着目標を本州に定めたのは、日本の中心部に一時間で早く結びつきたかったからである。

十六日は、このようにして過ぎた。船は対馬島の南端を通過した。私たちは、日本の領土圏内にあることを感じた。一時間でも早く到着しないことには、気が落ち着かなかった。夜も航海を

続けた。
午前四時ごろ、灯台が見えた。灯台の灯は、とこもなつかしかった。嬉しかった。
『殆んど到着した』
『うむ。とうとう成功したのだ』
私たちは、固い握手をかわし、慰さめ合い、はげまし合った。夜がすっかり明ける時まで、錨をおろして休むことにした。
三昼夜をぶっ通しで、走り続けた脱出である。私たちは、これを誇りにしたかった。全てに満足した。
正確な航海を保証した張大衡――。
全身に波をかぶりながらも、武器を放なさず、見張りを続けた李燦虎――。
四人の中の最年少でありながら、信念と勇気を失なわずに、落ちついて連絡の任務を果たした安炳録――。
三日間のつかれと気の張りが重なって、体は鉛のように重かったが、ねむりにつくことはできなかった。私たちの胸は、限りない物語りと明日への希望で、ふくれるだけふくれていた。
徐じょに夜が明けた。再び、海には霧雨が降り出した。風はなかったが、霧が立ちこめて柔

らかくあたりを包んでいた。灯台の灯が、少しづつ薄れていくのが感じられた。
白く陸地が浮かび上がった。それはまさしく陸地であった。
陸地は、海をさえぎり、ながく横たわっていた。日本の本州に間違いなかった。遂に、私たちは到着してやったのだ。海のもう一つのはて、その陸地に到着してやったのである。
この時、はじめて自分の着ているものに気がついた。三日間も波をかぶりつづけたせいで、服には塩の結晶が白く散らばり、まるで皮のように固くなっていた。
そこで、服を着がえ、船首寝室の九名を動員して、汚れた甲板をきれいに掃除した。
十九日午前九時ごろのことであった。錨を上げ、港を確認するため、近くの日本の漁船に接近した。私たちの所属と意思を伝えるのも、もう一つの目的であった。
しかし、日本語を知らない私たちは、自分の意思をはっきりと伝えることができなかった。向こうの船では、わけのわからないことをわめいていたが、興味がないとでも感じたのか、魚釣りに熱中しはじめた。
私たちは、船つき場の空いた場所に船をつけた。
誰かが現われて、今に大騒ぎが持ち上がると思ったのは、いっこうにその気配がないではないか、私たちをかえりみようとする人さえもいなかった。

やむを得ず、私が降りた。私は解放直前、小学校にかよったことがあるので、四人の中では日本語を片言ぐらいは話せる方だったからである。

中年の男に近づき、漢字を書きながらの筆談をまじえて、ここがどこなのかと訊ねた。その男は、ここから一番近い所に、下関港があるから、そちらへ行ってみたらよいだろうと教えてくれた。要するに面倒くさいといった表情である。およそ十五マイルほど離れているという。

私は、彼に感謝し、船に帰って来て、再び航海をはじめた。一千トン級の船一隻が先きに立って進んでいた。その船が間違いなく下関港に入るとにらんだので、そのうしろについて行った。果して、しばらく行くうちに下関港が現われた。

時間は午後二時になっていた。私たちは下関の埠頭に歴史的な停泊を行なった。すぐにでも日本の警備船が現われるだろうと予想した。それは、「平新艇三四号」の姿が怪しみまれるだろうと思ったからであった。ところが、誰一人ふりむこうともしなかった、警備船が近づく気配さえもなかった。やむを得ず、今度もまた私が陸に上がった。日本の警備船を待つよりは、進んで申告した方がよいと考えたからである。

私は、陸に上がって、息を大きく吸い込んだ。余りにも苦しい自由への航海であったので、陸をふんだ瞬間の感激は大きかった。頭が混乱し、体もそれについてゆれ動くような気さえした

が、気持そのものは壮快であった。

生まれてはじめてふむ日本の土であった。全くの見知らぬ土地である。警備署がどこにあり、海上管理所がどこについてあるかを知ろうはずがない。ちようどその時、小型トラック一台が通り過ぎようとしていた。私は、道の真中に立って車をとめ、ともかく乗り込んだ。運転手に、手まね足まね、それにさっきと同じような漢字の筆談と、そしてたどたどしい日本語で、海上保安庁まで連れて行ってほしいとたのんだ。運転手はあっけに取られ、わけがわからないというような奇妙な表情をつくったが、ともかく私を海上保安庁の前でおろしてくれた。

船で待っている同志の心配、そして保安庁では日本までやって来たいきさつを説明せねばならないという緊張感などで保安庁のドアを開ける私の心は、錯そうした。

保安庁の内部には、職員がそう多くはいなかった。私は入ると同時に、事情を説明しはじめた。

「平新艇三四号」で北韓を脱出してきたこと、私たちは、日本への亡命を求めること、外務省に連絡してほしいこと、船と身辺を保護してほしいことなどを要求した。

こちらの言うことが、相手側に充分に通じないためのか、彼らは私が冗談云っているとでも思ったらしい。自分たちの間で、腹をかかえて笑ったりした。そうして、なにか話しあっている様

子が、韓国から密入国した者と考えるらしかった。

ともかく、行こうということになり、彼らを埠頭まで案内した。

彼らは、「平新艇三四号」を見た、とたん目を大きく見開いた。急に緊張し、連絡を取るやら、増援を求めるやらの大騒ぎとなった。

私は、かえっておかしくなった。ある意味では、そのあわてぶりが面白くなった。

しばらくしてから、私と日本の保安署員は、「平新艇」の中に入った。私は、平新艇の内部をくまなく案内し、脱出の道すじを説明しようとした。そして、武器庫を見せ、持っていた全ての銃器類を手渡した。彼らは、こわれた武器など全てを細かく調べてから中心人物であった私たち四名を保安庁まで連行した。

この時から、私たち四人は、残りの九とかくりされた。保安署でも、くわしく脱出の経路を説明した。そして亡命の目的についての審問も受けた。

かくしだてすることもなければ、遠慮することもなかった。はずかしいこともあやまったこともしていなかった。かえって私たちは誇りを持っていたし、自分たちの行動に自負心を抱いていた。

やがて日が暮れ、夜のとばりが降りはじめた。その間、彼らは上部への報告やら書類づくりや

らで大騒ぎを演じていた。
しかし、私たちはそういうことにいちいち神経を使いたくなかった。亡命要求は、すぐ受け入れられるはずだと考えていた。そうなれば、あこがれてやまなかった自由な生活をたっぷり味わうことができると、タカをくくっていた。
ところが、奇怪な事態が持ち上がった。保安署員が私たちに手錠をはめようとするではないか。
私たちは突然の事態に、頭のさきまで血が流れて来るような怒りをおぼえた。こんなことがあり得るのか。死をとして自由を求めて来た人間を罪人扱いにするとは?
私たちは、その場で抗議した。そして反抗した。どうして、私たちが罪人扱かいを受けねばならないのだ?この場で死ぬことがあっても、手錠をかけられるのはいやだ。
私たちのはげしい反発に対して、彼らは力づくででも手錠をかけようとしたが、とうとう私たちはそれを拒否することに成功した。そのごろからニュースがひろがったようである。カメラマンがかけつけ、人々が集まってきた。
その中でも、ある紳士が私たちのために、日本官吏に抗議を申し入れてくれた。とても嬉しかった。あとで知ったことであるが、その紳士が韓国の下関駐在領事朴匡海さんであった。朴匡海

領事は私たちといちいち握手をかわし、私たちをはげまし、勇敢さをたたえてくれた。

しかし、もっと話し合う余裕も与えないで、日本の官吏は私たち四名をほかの部屋に移し、審問を続けるのだった。

この時、亡命が拒否されたことを知った。日本人はひどいことをすると憤慨の気持が先に立った。私たちは、成り行きをはっきりとつかむことができたし、デリケートな立場におかれていることを知った。

それで、こう答えた。

『亡命が拒否されるならば、やむを得ない。それでは、この場でそくざに大韓民国へ行かせてほしい。そうすれば、いゝではないか』

この当然の要求に、日本の官吏は返事につまったようであった。あわてた表情で、しどろもどりになり、はっきりした返事をしてくれなかった。

私たちは、もっと問いつめた。私たちは自由を求めて日本に来た。私たちは日本政府が自由国家の一員として、私たちの亡命を受け入れてくれるものと信じていた。それにも拘らず、亡命を認めないならば、大韓民国へ送ってほしい、というのになぜはっきりした回答をしてくれないのか。

北韓カイライ集団の共産主義の政策が、どんなに欺瞞と詐欺にこり固まったものであるかを全世界に知らせ、日本に残っている「朝総連系」と闘かうつもりであったもともとの計劃が、結局、日本政府の態度を考慮に入れない純真な考えだったのか—。私たちはほぞをかんだ。

日本の官憲は、こちらの要求には答えようとしないで、一方的にあれやこれやと根ほり葉ほり調べようとするのだった。

この時、私たち四名は決意した。

韓国の領事との面会を要求する。それ以前には、決してあなたたちの質問には、答えないつもりである。

さじを投げたのか、夜の十二時をすぎてから、日本の官吏は私たちを外に引き出し、警備艇に抑留した。(この時、私たちは日本の官憲に猛烈に抵抗した。その反抗のもようを、内外の写真記者がカメラにおさめた。その写真を見ると、私たちの体がずるずると引かれて行く格好が鮮やかにうつっている。ところで、この写真が北韓カイライ集団の新聞にものったことをあとで知った。北韓カイライ集団は、船が遭難し、日本に漂流したと解説し、日本政府が私たちを北韓へ送らないのだという記事を出したという。まったく、ぬけぬけとよくもそんな嘘がつけたものである。しかし、おそらく殆んどの北韓の同胞たちは、私たち四名が何をやったかを、私たち四名が

栄光の脱出に成功したことを、その記事の行間に読み取ったことだろう）

十八日午前九時ごろ、日本の官吏はもう一度、審問を始めようとした。しかし、私たちは頑としてそれをはねつけた。

韓国の領事に会わせてくれない限り、ひと言も返事をしないという決意には変りがないときつく答えた。

日本の官吏は、声をはり上げておどかしたり、私たちの罪が大それたものであると威嚇したが私たちは最後までねばりにねばった。それくらいのことで挫ける私たちではなかった。

それで、とうとう午前中には審問を受けなかった。彼らは再び姿を現わした。彼らは間違いなく韓国の領事に面会させてくれると約束し、その約束に対する保証文まで示してくれたので、午後には審問に応じた。

領事の朴匡海さんと随行員二名が、夕方になって、ついに面会のため姿を現わした。地獄で仏に会ったように嬉しかった。私たちは、はっきりと、そして明白に、脱出のいきさつを説明し、一日も早く韓国へ行かせてほしいと希望した。朴匡海さんは、心配しないで待っていてほしいと慰さめてくれ、再び私たちの壮挙をたたえ、全世界の報道陣が私たちの脱出を、おどろきの目をもって報道したと伝えてくれた。

それればかりではない。あとで知ったことであるが、北韓カイライ集団のボスであるソ連のタス通信も、私たちのニュースを流したという。同じ共産主義者ではあっても、彼らなりに思いあたるふしがあったらしい。生命がけで共産主義社会を脱出する人が後を断たないのを見て、彼らの共産主義社会が大変に苛こくな生き地獄であることを認めたのかもしれない。

面会の時間は、余りにも短かかった。三十分は、アッという間に過ぎた。私たちは、大韓民国政府の発行した多くの本と画報集、それから食料品などを受けとった。なにもかも、珍しく、おどろきの連続であった。私たちは、いっそう強い勇気を得た。胸には自信があふれた。

次の日の十九日午後二時ごろ、自動車に強制的に乗せられ、下関刑務所に収監された。反抗もし抗弁もしたが、私たちの力ではどうすることもできなかった。ただ、勇気と信念を失なわなかったので、大して心配はしなかった。

刑務所で、私は一人の面会人と会った。面会に来た人は、意外にも従兄であった。私はこれ、が果して夢なのか、現実なのかを疑った。従兄がおそらく韓国に行っているかも知れないと、内心考えていたが、日本で会うとは予想だにしなかったことなのである。面会の時間が短かかったので、積もる話をする暇はなかった。

『苦労しただろうな』

『ええ、とても苦労しました。だからこんなに脱出して来たんです』
私たちは、感激に言葉を失ない、このような通りいっぺんのあいさつと親戚の消息などを、ぼつりぼつりと話し合った。従兄も、大変興奮しているようであった。
『悲劇の話は、この次にしよう』
従兄は、このように云った。
突然の再見なので、感激だけを分け合い、その感激があるまでの悲劇は、あとでゆっくり話し合おうというのだった。
従兄との面会があったのちは、私はたとえ刑務所に入っていても、心配することはないと考えた。私の行動は正しかったのであり、行動は必ずむくわれると信じて疑わなかった。ただし、やり切れない思いをしたのは、生死を共にしてきた私たちの四人が、それぞれ独房に入れらればらばらになってしまったので、お互いに慰め合うことができなくなってしまったことであった。
私たちは、微に入り細にわたる審問を受けた。日本政府が、微妙な立場にあることを知った。日本政府の態度は明らかに非人道的であったが、ひきょうにも、国際関係をタテに、一種の中立的な姿勢を取っているようであった。それで、私は審問を受けるほど自信と誇りを持つことがで

きた。

検察官が刑務所に来て、

『なぜ、日本への亡命を求めたのか』

と訪ねた。

私は、検察官の問い方が気にくわなかった。まるで、私が大韓民国に直行することをわざと避けて、日本という第三国を選んだのだろうといった口ぶりでそんな問い方をする彼の心の動きを私ははっきりとつかむことができた。底の知れた浅い優越感を、彼の心に見てとることができた。

それで、私は正直に自分の思っていることを告げた。

『私は、大韓民国をわざと避けて、日本をえらんだのではない。私はもっと大きな悲劇、あなたたちの手で強制送還された在日同胞が、北韓でどんな目にあっているかを知らせるために、まず日本に来ることにしたのである。それから私は、共産主義の正体を知らないあなたたちと世界の人々に、真相を伝える必要を感じている。しかも、私が死をとして、このような脱出をはからねばならなかった責任は、あなたたち日本人にある。三十六年間にわたる侵略行為によって、韓国は二分され、その悲劇がまた幕をおろしていないのである』。

私のながったらしい答えを検察官は笑いでまぎらし、

『あなたの話をきくと、冷汗三斗の思いがする』

万事がこういうふうで、彼らは審問のたびごとに、論理的には私たち四名の言分を認めないわけには行かなかった。それに、彼らも私たちの勇敢さと闘志には敬意を表すると述べた。ただ、言うに言われぬ事情で、政治が介入しているから、しばらく待ってほしいとそれとなくほのめかし、あるいはあからさまに、そう暗示する人もいた。

私たちは、多くの人々の面会とげきれいを受けた。居留民団中央本部の団長である権逸(当時)さんも直接面会に来てくれたし、顔も知らない同胞たちがかずかずの差入れをしてくれた。それは、差入れの洪水であった。食べ物に、くすりから背広、ワイシャツ、靴下、靴までも入れてくれた。私たちの身長を、いつどこではかったのか、体にぴったりと合う洋服が届けられた時は、びっくりした。

刑務所にいても、体と気持は苦しみを知らなかった。

しかも、自由を求めて脱出して来た私たち四名に対して、そんなにまで挙国的に援助を惜しまない祖国の政府と、在日同胞の熱意は、私たちを感激させたばかりでなく、かえって済まない思いさえ抱かせる程であった。そのたびごとに、自由への喝望が、どんなに大きかったかをあらた

めて知り、ひそかにおどろいて見るのだった。

結局、自由をあこがれ求める人間の意思と勇気と信念が、どんなに偉大なものであるかが、私たちの行為によって証明されたならば、それ以上の喜びはないと、私はひそかに考えた。私は、自由を望んでやまない人間の心が、勝利をかちとらねばならない理由を知っていた。そのような望みが実現できなければ、人間は未来への希望を抱くことができないのではないか。私は、自由への人間本来の正しい望みが、必ず成就されると信じて疑わなかった。

それは、ついに実現した。九月二十八日午前三時、私たちは釈放された。私たちは、ついに凱旋した。熱烈な歓迎を受けながら、自動車便で福岡に赴いた。民団団長の権逸さんをはじめ、多くの同胞が私たちを迎えてくれた。私たちは、民族の血が、自由の偉大な勝利の前で、あつく通じ合うのを感じた。

私たちは、みなさんの祝福を受けつつ、福岡空港へ向かい、午後二時四五分、祖国に向かう祖国の飛行機、ＫＡＬ機に乗った。私は、飛行機の窓をとおして、「大韓民国万歳」を連呼して、私たちを見る同胞の姿を見つめていた。太極旗が、微風にゆれるあまたの花のように、多くの人々の手の上で、ひるがえっていた。

17、幸福な凡人

私は、病気から回復した人の気持はどんなものだろうか、と考えてみる。それも不治の病にかかって、絶望の谷間をさまよったが、生きようとする超人的な意志の力で病気に勝ち、健康をとりもどした人の気持を考えてみる。

いわば、私が、そのような人なのである。

不治のはれものが、きれいになおった人と同じ気持を私は抱いている。

考えるだけでも、身の毛のよだつはれものであった。傷であった。

うみただれた霊魂の傷、肉体の傷―、それをこれ以上思い起すのは苦しい。

北韓から脱出した私は、傷をすっかりなおした。私は、新鮮な空気の中で、新しい出発を行った。

傷は完全になおった。

私はながい患いからようやく起き上がった人だけが持つ、あの明るく清けつな感覚をもって、新しい世界と握手しているのである。

その中は美しい。醜悪なものは、醜悪であるがゆえに、また美しい。私は今、自分の目で世の中を眺めている。自分の頭をもって、世の中を理解している。生まれてはじめて、「私」の目を開いたのである。

私は、これをもっともなことだと考えるけれども、「病い」にかかっていた時の苦しみを、また完全にぬぐい去っていないので、おどろいたり、時には現在の喜びが信じられなかったりする。

しかし、私はある種の生命の重みのようなものを感ずる時がある。「病い」にかかっていた時は、生命の重みを感ずることができなかった。生きるということの重みを、生きるということの本当の価値を考えるだけの余裕さえなかった。しかし、今はそうでない。

それで、「病い」にかかっていた時のことを早く清算し、自分の将来と自分の未来を、根本的な態度をもって、考えつつある。

私は今、結婚を目前にひかえている。おそらく、私はだんらんな家庭をつくるだろう。また、だんらんな家庭を持つべく、努力するだろう。それが今の私を甘い夢の世界へ誘ってくれる。私

は、力いっぱい生き抜いて行くことだろう。
これが「共産治下という名の病い」から脱出した私が、いちばん大きな生きがいをおぼえている、この新世界との出会いの意味なのである。
私たちは、ソウルに着いてから、しばらくして、市民歓迎大会の主賓として招かれた。
各放送局、とくにテレビジョン放送局でも中継を行ない、数多くのカメラマンと報道陣がおしよせた。
大会の場内は、一階も二階も、集まった市民でいっぱいになった。式がはじまる二十分まえに、すでに満員になってしまった。
私たちは、歓迎壇上に坐る栄誉に浴した。
式が始まった。私たちは、はげしい拍手の音とげきれいに感激した。
各界から、花束が寄せられた。私たちの一人一人が受け取った花束が五つにもなったのだから、寄せられた花束と花環は、全部でいくつになるのだろうか。
私たちは、みなさんの歓迎の辞に耳をかたむけた。
各界各層の人人、公共機関の人人、以北五道庁の人人、そして国会議員も出席していた。
私たちは、かえって身もちぢまるほど恐れ入る気持の方が強かった。自由を求めて脱出した行

動は、当然の行為ではなかったのだろうか。

私たちは職場を世話された。住宅をおくられた。大金の入っている貯金通帳を受け取った。衣食住の面倒をみてもらったわけである。それからソウル市民証を受け取った。

私たちは、答辞を述べた。答辞の最中に、のどがつまった。感激で声が出なかった。私たちは「病い」にかかっていた過去をふりかえり、明るい明日を見た。みなさんに、大韓民国の国民として、あるいは立派な自由人として、生きることを誓った。

こうして、大韓民国の国民としての光栄ある第一歩をふみ出し、「病い」から完全に回復、健康体にもどったことを確かめたのである。

私たち四人は、今もよく会っている。

私たちは熱心に働いている。足りない点があれば、熱心に勉強しょうとしており、みなさんは親切に教えてくれている。

私たちは、すべてのことについて学んでいる。まだ慣れていない自由生活についても学び、私たちに不足している知識についても学ぶ。

学ぶことがあまりにも多すぎる。「病い」におかされている間、なにも学んでいないのと同じ状態にあった。成長をストップしていたが、こうして再び成長しはじめたような気持である。

私たち四人は会うと、すぐに学ぶことが多いと話し合う。北韓カイライ集団治下で送った患者時代のことは語り合わない。すでになおった傷の、昔の痛さを思い出す必要がないからである。

私たち四人は、自由な生活にとけ込んで行くことの不思議さについて語り合う。そのような対話は、常に楽しいものである。

事実、私たちは早い速度で、自由生活に慣れてきている。時には、北韓カイライ集団から受けた「病菌」の惰性的な残りカスが、抵抗を起こす場合もあるが、次の瞬間、その抵抗は新しい自由生活という活力素によって、きれいさっぱりにおし流されてしまう。

私たち四人は、しばしば会った。

私の婚約式のときにもあった。

私の婚約式には、五十名近くのお客さんが集まってくれた。ちょうど、雨が降っていた。式が終り、私が許婚といっしょに外に出たとき、「四人」はまたいっしょになった。

四人はタクシーに乗った。四人は、私の許婚も入れて、しずかなグリルでビールをのんだ。

李燦虎は、結婚のことで私に先手を打たれたと、残念がっている。彼は、もっと肥ったように見える。彼は最近、夢にまで見たおじと感激の再会を持った。

張大衡は、韓国に来ていた叔父に会った。叔父の家に暮らしているが、彼は私といっしょに成

均館大学にかよっている。安炳録も張大衡と同じ家に住んでいる。彼ははじめて、家庭というものの温かさをしみじみと味わっている。彼は、婚約式に出席し、私を「かも」にした。立派にである。

私たちは、いろいろな家庭に招かれて行った。ぜひ一度会って、私たちの話をききたいという人が現われる。

忙がしくて行けない時もあるが、時間さえゆるせば、いつでも出かけて、話をする。

私たちに訊ねたいことは、いろいろと多い。北韓の現在の実情について訊ねる人が多い。北韓に親戚を持つ人は、その身の上を心配している。私たちは、事実をありのままに伝える。

ある人たちは、私たちの脱出についても話を聞きたがる。私たちは、その時をふりかえって見る。とても、自分たちのしたことは考えられないその時のことなのである。

そしては感ずる。この人人が私から聞きたいことが何であり、私がこの人人に話してやらねばならないことが何であるを、私は知っている。

自由のとうとさについて、自由の偉大さについて、私から力づよい肯定、力づよい確認を受けたいその人人に、私はそれを力強く肯定し、力強く確認してやる。あの張りつめた、自由のとうとさについて……。

こうして、私の傷はすっかりなおった。完全にいやされた。北韓カイライ集団治下で受けた傷は、きれいに消えた。それで、私は今、北韓カイライ集団のあくどいずるさについて話をする時は、すっかりなおった傷あとをかきむしられるような痛みをおぼえる。

それでも私は、北韓カイライ集団の悪らつさについて語る。きれいになおった傷あとを引っかき回し、私のなめた「痛み」を記憶し、それと同じく「痛い話」をする。

この話を、私はこれからもするだろう。それ以上の痛さが生まれないようにするために、そしてこれ以上痛めつけられる人が出ないようにするために。

北韓カイライ集団治下の真相を完全に知っているると、自信をもって云える人がいるだろうか。私の知っている真相の一部は、私にそのひどさを一部分だけでも体験させてくれたが、そんな私の「病い」であったがゆえに、少くとも私だけはその病気に免疫になっている。抗菌力を持っている。

その病気に免疫になっていない人たち、またはその病気のむごい痛みを知らない人たちに、自分の痛みをよみがえらせ、語って聞かせ、證言する使命感を私は感じている。

その「病い」に対する予防を、徹底的に行なう必要があると、私は切実に感じている。證拠を

求める人の前には、いつでも私が證人として立つ用意がある。そして、私がその病気を闘かって勝った「闘病記」を話してやるつもりである。

その「病い」に対する抗生物質は発明されないのだろうか。その病気に対するB・C・G接種は、ないものだろうか？恐るべきその病気に対して……。

私は今日、急用でタクシーに乗った。

運転手が、バックミラーを通して、しげしげと私を見つめた。

『どこかで、お目にかかったようですが』

運転手はこう言った。

『そんなはずがないでしょう。私は、平凡な庶民ですよ』

『それでも、たしかにどこかで……』

運転手はこう言ってから、

『ああ、わかりましたよ。新聞に出ていた平新艇の……？』

私が、意地になって、そうでないと答えたら、

『かくしても駄目ですよ。私の車にお乗りになることは光栄です』

運転手は、私に讃辞を呈した。

『それで、さいきんの生活はいかがですか。勤めの方は、うまくいっていますか』
運転手はこのあと、北韓の交通事情について訊ねた。私はありのままを話してやった。
彼は、私が嘘をついていると考える。とても信じられない表情だ。私は弁明しない。運転手が信じないのも無理ではない。
目的地についた。メータが八〇円になっていたので、百円札を出したら、運転手が、それをおしかえした。
『いや、このお金は納めて下さい。ただで、お送りしたことにいたします』
運転手は、こう云いながら、強情をはった。私は運転手に負けた。私はただで乗せてもらったことにした。
私は、もう平凡な市民になった。平凡な、それでいて一番「幸せな」市民になった。この「平凡な」という形容詞と「幸せな」という形容詞を、民主主義的に、一つの水平線上で結びつける。そして、イコールになった「平凡な」と「幸せな」が、私にあてはめられる時、私は内に充満する生を認識することができる。ペンを置きながら、最後に記した二つの単語はこれであると、本を書き始める時から考えていた。
すなわち、私は幸せな凡人になった。

北より南へ（北韓脱出「平新艇」副機関長手記）

1967年 8月 5日 印刷
1967年 8月 10日 発行

著 者 閔 庚 泰
発 行 内外問題研究所
大韓民国・ソウル
光化門局私書函第69號
TEL (72) 8732
印 刷 光明印刷公社

<150ウォン>